

八郎瀉町文化財調査報告書

白ヶ口V遺跡

高岳地区農地集積加速化基盤整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

2021年11月

八郎瀉町教育委員会

うす くち

白ヶロV遺跡

高岳地区農地集積加速化基盤整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

2021年11月

八郎潟町教育委員会

序

八郎潟町では、昭和31年に真坂字沢田地内で発掘調査が実施され、縄文時代中期の遺跡である沢田遺跡が確認されております。

今回の調査は、八郎潟町高岳地区の農地集積加速化基盤事業に伴う埋蔵文化財、白ケ口V遺跡発掘調査です。令和2年度のは場整備区域に埋蔵文化財包蔵地が3か所あり、工事開始前に試掘調査を行ったところ、遺構・遺物が発見された1か所、面積3,630㎡について本調査を行いました。

調査の結果、縄文時代、平安時代、中世、近世の遺物が出土しております。主なものは縄文時代の石籠などの石器、縄文土器、平安時代の土師器・須恵器、中世の青磁、近世陶磁器などで、中世の古銭も出土しております。

本書は、開発行為に係る埋蔵文化財の調査結果をまとめたものであります。文化財の保存と普及啓発活動、そして地域の郷土学習の歴史教材として、児童生徒や地域住民、広く遺跡等に興味・関心の高い方々から活用されることを通して、埋蔵文化財の保護の一助となることを心から願っております。

最後になりましたが、現地での調査から本書の刊行に至るまで、ご協力とご支援をいただきました秋田県教育委員会並びに秋田県埋蔵文化財センター、併せて発掘調査に長期間ご尽力くださいました調査員・作業員の皆様には感謝と御礼を申し上げます。

令和3年11月

八郎潟町教育委員会
教育長 江 畠 廣

例 言

- 1 本書は、高岳地区農地集積加速化基盤整備事業に係る白ケロV遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査ならびに本書作成にあたり、次の団体・個人より多大なる協力・助言をいただいた。記して謝意を表する（順不同、敬称略）。

NPO法人「浦城」の歴史を伝える会 秋田県立大学木材高度加工研究所 株式会社セコー
五城目町教育委員会 潟上市郷土文化保存伝習館（石川翁資料館） 八郎潟土地改良区
秋田県埋蔵文化財センター 秋田県教育庁文化財生涯学習課保護室
北嶋雄一（NPO法人「浦城」の歴史を伝える会理事長）
阿子島功（山形大学名誉教授） 植松暁彦（公益財団法人山形県埋蔵文化財センター）
根岸 洋（東京大学大学院人文社会系研究科考古学講座准教授）
栗本康司・工藤佳世・薩摩鉄司（秋田県立大学木材高度加工研究所）
磯村 亨（秋田県埋蔵文化財センター所長） 嶋影壯憲（大館市教育委員会歴史文化課）
伊藤武士（秋田市秋田城跡歴史資料館） 神田和彦（秋田市観光文化スポーツ部文化振興課）
伊藤直子（男鹿市観光文化スポーツ部文化スポーツ課）
- 3 石器・剥片類の分類と文は、秋田県埋蔵文化財センター資料管理活用班長の吉川耕太郎副主幹による指導と助言に基づく。
- 4 本書に掲載した遺物の一部は、株式会社ラング（岩手県盛岡市）に業務委託した成果品である。
- 5 本書の執筆は、第3章第4節を秋田県立大学木材高度加工研究所助教の工藤佳世氏から提供いただいたデータを掲載した。他は、八郎潟町教育委員会の鎌田大輝、工藤 晃・高橋 学が担当し、編集は高橋が行った。

凡 例

- 1 本書に使用した地図は、八郎潟都市計画用途地域図（昭和57年編集、平成3年修正、1/10,000、第2図）、八郎潟町都市計画図（平成4年測量、1/2,500、第3図）、国土地理院電子地形図25000「五城目」（第5図）である。
- 2 本書に掲載した平面図の方位は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による座標北を示す。
- 3 遺構番号は種類毎に略記号を付し、種別を問わずに検出順に連番とした。また、遺物番号は遺構の内外・種別を問わず出土順に連番とした。遺構・遺物の略記号は次のとおり。

S D 溝跡 S K 土坑 S L 河川跡
R P 土器・陶磁器 R Q 石器・剥片 R M 鉄製品・鉄滓 R W 木製品 R N 自然遺物
- 4 遺構実測図及び遺物実測図には、それぞれスケールを付けて表示した。
- 5 遺跡の基本層序番号にはローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・・・）、遺構内堆積土層番号はアラビア数字（1・2・3・・・）を使用した。
- 6 基本層序・遺構内堆積土の色調表記は、小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』23版によった。

目次

序	
例言・凡例	
目次・挿図目次・表目次	
第1章 調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業と整理等作業の体制	5
第3節 発掘作業の経過	5
第4節 整理等作業の経過	7
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	10
第3章 調査の方法と成果	
第1節 調査の方法	18
第2節 基本層序	21
第3節 遺構と遺物	33
第4節 樹種同定	92
第4章 総括	98
報告書抄録	

挿図目次

第1図 遺跡の位置と立地	2
第2図 白ヶ口地内試掘調査位置図	3
第3図 白ヶ口V遺跡確認調査トレンチ配置図	4
第4図 遺跡周辺の地形分類・表層地質図	9
第5図 白ヶ口V遺跡と周辺の主な遺跡	11
第6図 沢田遺跡採集遺物(1)	13
第7図 沢田遺跡採集遺物(2)・賽ノ神遺跡採集石器	14
第8図 遺跡遠景	19
第9図 調査前の状況	20
第10図 グリッド配置・地区区分図、基本土層図	22
第11図 第IV層面における遺構と土層の平面分布図	25
第12図 土層堆積模式図	26
第13図 C・D区における第III・IV層堆積状況	27
第14図 B・C区西側における第III・IV層堆積状況(1)	28
第15図 B・C区西側における第III・IV層堆積状況(2)	29
第16図 B・C区西側における第III・IV層堆積状況(3)	30
第17図 B・C区西側における第III・IV層堆積状況(4)	31
第18図 B区HD50グリッドにおける第IV層堆積状況	32
第19図 第IVb層出土遺物(1) A地点	34
第20図 第IVb層出土遺物(2) B~D地点	35
第21図 S L.07河川跡(1)	38
第22図 S L.07河川跡(2)	39
第23図 S L.07河川跡(3)	40
第24図 S L.07河川跡出土縄文土器	41
第25図 検出遺構(1)	43
第26図 検出遺構(2)	44
第27図 遺物出土地点図	46

第28図	出土石器 (1) 石槍・石鏃・楔形石器	52
第29図	出土石器 (2) 石篋 (1)	53
第30図	出土石器 (3) 石篋 (2)	54
第31図	出土石器 (4) 石篋 (3)	55
第32図	出土石器 (5) 石篋 (4)	56
第33図	出土石器 (6) 削器 (1)	57
第34図	出土石器 (7) 削器 (2)	58
第35図	出土石器 (8) 削器 (3)	59
第36図	出土石器 (9) 削器 (4)	60
第37図	出土石器 (10) 搔器 (1)	61
第38図	出土石器 (11) 搔器 (2)	62
第39図	出土石器 (12) 石錐・鋸齒縁石器・ノッチ	63
第40図	出土石器 (13) 石核 (1)	64
第41図	出土石器 (14) 石核 (2)	65
第42図	出土石器 (15) 石核 (3)	66
第43図	出土石器 (16) 石核 (4)	67
第44図	出土石器 (17) 石核 (5)	68
第45図	出土石器 (18) 石核 (6)	69
第46図	出土石器 (19) 石核 (7)	70
第47図	出土石器 (20) 石核 (8)	71
第48図	出土石器 (21) 石核 (9)	72
第49図	出土石器 (22) 石核 (10)	73
第50図	出土石器 (23) 剥片 (1)	74
第51図	出土石器 (24) 剥片 (2)	75
第52図	出土石器 (25) 剥片 (3)	76
第53図	出土石器 (26) 剥片 (4)	77
第54図	出土石器 (27) 磨製石斧・敲石 (1)	78
第55図	出土石器 (28) 敲石 (2)	79
第56図	出土石器 (29) 敲石 (3)	80
第57図	古代以降の出土遺物 (1) 土師器・須恵器・土製品・木製品・鉄製品	88
第58図	古代以降の出土遺物 (2) 鉄滓・灰壁	89
第59図	古代以降の出土遺物 (3) 青磁・須恵器系陶器	90
第60図	古代以降の出土遺物 (4) 陶磁器・銭貨	91
第61図	出土材の顕微鏡写真	94
第62図	樹種同定結果 (1)	95
第63図	樹種同定結果 (2)、試料採取位置 (1)	96
第64図	試料採取位置 (2)	97
第65図	出土石器平面分布図	101
第66図	出土石器垂直分布図	101
第67図	調査区外礫層・礫の分布状況	102
第68図	鉄滓の出土分布図	104
第69図	土師器・須恵器の出土分布図	104
第70図	秋田県内出土の雁股鏃	106
第71図	出土遺物の分布と遺跡北側の地形	108

表目次

第1表	白ケロV遺跡周辺遺跡一覧表	12
第2表	報告書掲載石器観察表 (1) ~ (4)	81 ~ 84

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

高岳地区農地集積加速化基盤整備事業に伴い、事業主体者である秋田県秋田地域振興局（以下、地域振興局、担当：同局農林部農村整備課）は、予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地である白ケロⅠ遺跡、白ケロⅡ遺跡、白ケロⅢ遺跡が含まれていることから八郎潟町教育委員会（以下、町教育委員会）に対して、それら遺跡および工事計画の切土範囲を対象とする分布調査を依頼した。町教育委員会は、秋田県教育委員会（以下、県教育委員会、担当：県教育庁生涯学習課文化財保護室）の協力を得て、令和元年12月9日～11日にかけて試掘調査を実施した。

調査は重機（バックホー）を用いて対象地区内に計46箇所（No. 1～46、第2図参照）の試掘坑（掘削面積1～2㎡）を開け、土層の堆積状況や遺構・遺物の有無についての確認を行った。その結果、2地点から土坑らしきプランが検出され、15地点から縄文土器片、石器（石核）・剥片が出土した。

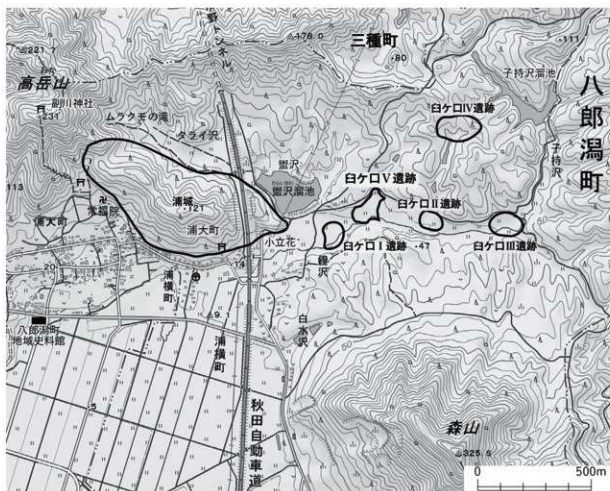
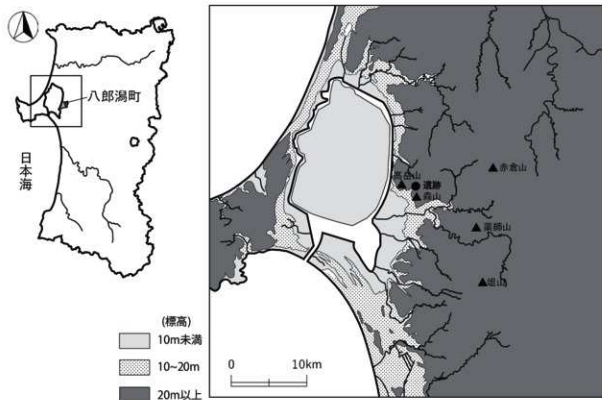
白ケロⅠ遺跡の範囲内では、No. 5の第Ⅱ層から縄文土器片が20点（同一個体か）出土した。土器は深鉢形胴部であり無文、縄文時代後期と見られる。白ケロⅡ遺跡の範囲内では、No.28・30・31の第Ⅱ層から剥片が各1点出土した。白ケロⅢ遺跡の範囲内では、No.44・45・46の第Ⅱ層から縄文土器片1点、石器（石核）・剥片14点が出土した。また、同遺跡範囲外の西側にあたるNo.41の第Ⅱ層から剥片が1点出土した。No.41での遺物出土を受けて、白ケロⅢ遺跡の範囲は西側に広がりをもつことが確かめられた。

一方で、白ケロⅠ遺跡と白ケロⅡ遺跡の中間にあたるNo.16・22で土坑らしきプランが確認され、No.13～16・18・23から縄文土器片3点、石器（石核）・剥片19点が出土した。遺構・遺物が発見された地区の約6,000㎡を新たに白ケロⅤ遺跡として登録することとし、令和2年1月31日付、八社教育第146号で県教育委員会に通知した。

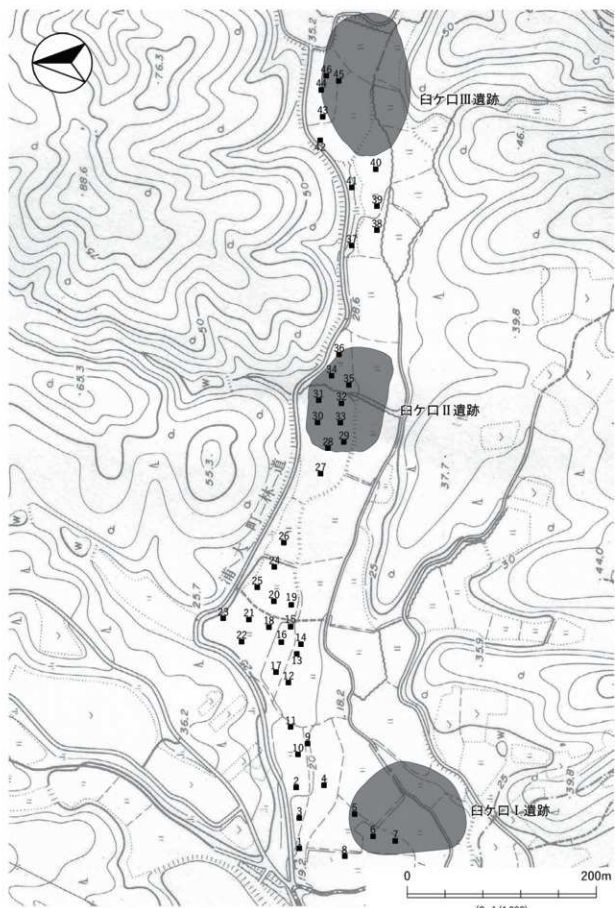
町教育委員会は、周知の遺跡である白ケロⅠ～Ⅲ遺跡と新発見の白ケロⅤ遺跡の取扱について地域振興局と協議を行い、白ケロⅠ～Ⅲ遺跡は施工に際して工事立会を、白ケロⅤ遺跡については事業予定地や工事設計の変更は困難であることから、記録保存を目的とする発掘調査を実施することで合意した。次いで町教育委員会は、白ケロⅤ遺跡の本発掘調査を行う区域を確定させるために、新規登録した遺跡範囲のうち、非農業用地として施行から除外された区域を除く箇所、約5,000㎡を対象とし令和2年4月16日～27日にかけて確認調査を実施した。

調査は重機（バックホー）を用いてトレンチ（掘削面積3～20㎡）を21本（トレンチK1～K21、第3図参照）を開け、土層の堆積状況や遺構・遺物の有無についての確認を行った。

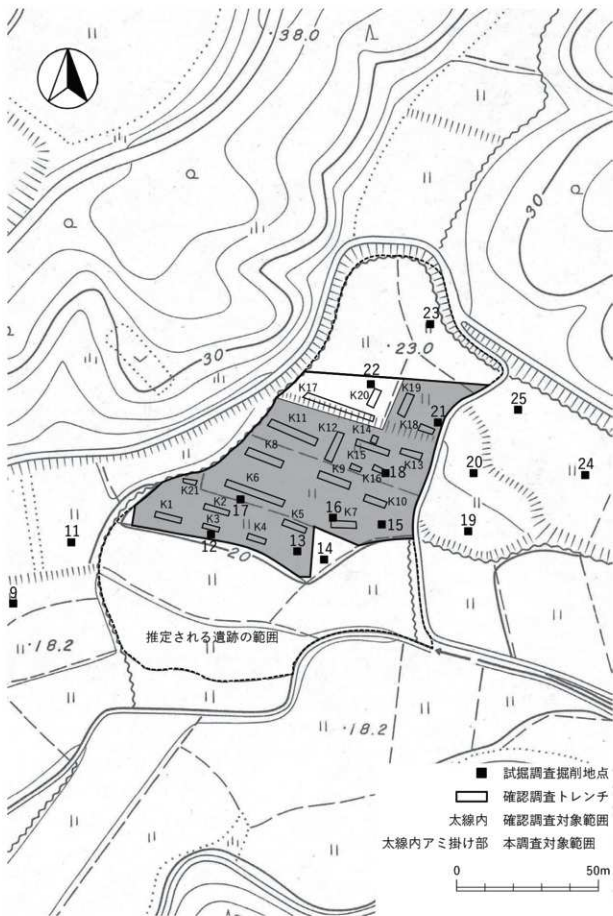
その結果、遺構とみられるプランはトレンチK6とK18から検出された。K6では長さ0.5mの土坑もしくは溝状遺構を、K18では堅穴住居様の黒色土の落ち込みが発見された。その広がり径は約2m、深さは0.5m程度であり、縄文土器片が確認できた。また、15本のトレンチ内から石器・剥片類63点、縄文土器片49点、土師器片12点、および近世陶磁器、鉄滓等13点が出土した。



第1図 遺跡の位置と立地



第2図 白ヶ口地内試掘調査位置図



第3図 白ヶ口V遺跡確認調査トレンチ配置図

確認調査の結果、対象地区内のうち北西部の水田面において遺構・遺物が検出されなかった箇所（第3図K17・20周辺）を除く4,205㎡を要本発掘調査範囲に確定させた。

この結果を受けた地域振興局は、文化財保護法第94条第1項に基づき、令和2年5月21日付、秋農-1559で県教育委員会に土木工事等のための発掘の通知書を提出した。

県教育委員会は令和2年5月22日付、教生-521で地域振興局に白ケ口V遺跡地内における土木工事等について、工事着手前の発掘調査実施が必要なことを通知した。

その後、地域振興局と八郎潟町は、高岳地区農地集積加速化基盤整備事業業務委託として、埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、町教育委員会が発掘調査を担当することとなった。

以上の経緯により、町教育委員会は令和2年6月22日から10月7日まで白ケ口V遺跡の発掘調査を実施した。

第2節 発掘作業と整理等作業の体制

遺跡名	白ケ口V遺跡（遺跡番号：363-27-56、遺跡略記号：UKV）
所在地	秋田県南秋田郡八郎潟町浦大町字白ケ口30-1、31、44外
事業主体者	秋田県秋田地域振興局
調査期間	令和2年6月22日～10月7日
調査面積	3,630㎡（調査対象面積4,205㎡のうち、水路等による調査不能箇所を除いた面積）
調査主体者	八郎潟町教育委員会
調査体制	八郎潟町教育委員会教育課社会教育担当 教育長 江島 廣 課長 落合 智 課長補佐 鎌田亜希子 主任 鎌田 大輝（調査担当） 調査員 高橋 学・工藤 晃（調査担当）

第3節 発掘作業の経過

調査区は4段の水田面からなり、南側の最低位面をA区（A1区：標高20.39m、A2区：20.60m）、一段上面のB区（21.18m）、C区（21.68m）、北側の最高位面をD区（22.84m）とした。現況水田面での高低差は2.45mである。

6月22日、調査担当者立ち会いの下、重機（バックホー）による表土除去を調査区内北部、最高位面のD区から開始する。層厚15～20cmの水田耕作面（第Ⅰ層）を取り除くと黒色土層（第Ⅱ層）が現れ、この面で掘り下げを止める。同区内の第Ⅱ層面を人力で掘り下げて見ると、直下に粘性の強い基盤層（第Ⅳ層）が認められた。24日、D区一段下のC区第Ⅰ層面の掘り下げに入る。25日、C区一段下のB区と最下位のA1・2区にも重機を投入する。30日、B区南側の第Ⅱ層は層厚が40cm以上となる箇所があり、遺物の有無を確認しながら同層面も掘り下げることにした。同層是水田面造

成に伴う盛土層である。遺物は剥片類が目立つが、炉壁のような遺物も見られる。古代か中世か。

7月6日、B・C区とも第Ⅲ層上面において遺構等の検出は認められないことから、同層上部も重機により除去することにした。9日、D区南側は確認調査の際に堅穴住居様の黒色土の落ち込みが認められた箇所（トレンチK18）であり、慎重に精査したところ、自然地形の凹地（第Ⅳ層）を埋めるように第Ⅲ層土が厚く堆積したものであり、遺構とは認められないと判断した。

7月13日、本日より発掘作業員による遺構検出作業を最下位面のA1区から着手する。早くも溝状プランの一部〔後にS D01〕が確認された。遺物は頁岩の剥片が多いが、黒曜石の剥片や土師器片等も出土する。15日、遺物に通し番号を付し出土位置を記録して取上を始める。レベルの基準高を21.70mに固定する。16日、出土遺物のなかに鉄滓が含まれることが判明する。

7月20日、A2区～B区の第Ⅲ層面掘り下げに入る。石器・剥片の出土が目立つ。試しにB区南側、HD49グリッドで長さ4m、幅1mのサブトレンチを設定して第Ⅲ層土を35cm分掘り下げたところ、40点の剥片が出土した。計算上では第Ⅲ層1㎡あたりの出土点数は29点となる（ $4\text{m} \times 1\text{m} \times 0.35\text{m} = 1.4\text{m}^2$ 、 $1.4\text{m}^2 : 40\text{点} = 1\text{m}^2 : 28.5\text{点}$ ）。21日、A1区のS D03は、長さ8m以上となりそうである。22日、取り上げた遺物が800点を超えた。定型的な石器では石篋の出土が目立つ。29日、B区東側、G S52グリッドから寛永通寶が1枚〔RM825、第60図215〕出土した。

8月3日、B区での土層観察から、当初は第Ⅳ層を地山（粘土層、基盤層）と見ていたが、同層下位から少数ながら剥片が出土することを契機として再度土層観察を複数箇所で行ったところ、第Ⅳ層とは基盤の粘土層を母材とするものの、上位面からの流入土（再堆積層）と判断した。同日、男鹿市教育委員会からの要請により、文化財担当新人職員の現地研修として主事1名を受け入れた。7日までの5日間、発掘器材の取扱、遺構検出作業、遺物の取上等一連の作業を経験してもらった。

8月4日、B区西側、HH53グリッドでの土層観察により、第Ⅳ層再堆積層には単なる水性堆積では説明のつかない“土層のうねり”が認められる箇所が発見された（下写真）。6日、S D03満跡平面図作成。11日、取り上げた遺物が2,000点を超えた。12日、B区東側GT51グリッド第Ⅳ層上面〔後に第Ⅳb層〕から縄文時代後期の土器片〔RP2146～53、第20図③〕がややまとまって出土した。17日、12日のRP2146～53から北西に約3m離れたHA51グリッド第Ⅲ層下位から、近世の陶磁器〔RP2194、第60図213〕が出土。このことから、第Ⅲ層の形成時期が近世以降であることが明確になった。

8月19日、B区HA53～55グリッドの第Ⅲ層面を掘り下げたところ、自然木が複数箇所でも確認された。沢状に窪む地形内のようなものである。21日、19日の沢状の地形は、河川跡と判断しS L07と名称を付した。

S L07底面直上から縄文時代晩期末頃の土器片〔RP3474、第24図13〕が出土したことから本河川の形成時期がこの頃かと想定された。同日、秋



最初に確認された“土層のうねり”〔第17図⑤地点、200804撮影〕

田県立大学木材高度加工研究所の工藤佳世氏ら来跡し、木材サンプル5点を採取。24日、B区中央のHC52グリッドから縄文土器片がややまとまって出土する。

9月1日、五城目町文化財保護審議会委員一行来跡。3日、本日の最高気温が36度との予報があり、発掘作業を中止する。7日も酷暑で作業中止。9日、取り上げた遺物が3,000点を超えた。15日・16日、八郎潟町議会議員一行来跡。24日、八郎潟町文化財審議会委員一行来跡。現地の状況確認と出土遺物を見ていただいた。30日、B区西側で第IV層の堆積状況の確認を行う。HH50グリッドでは層厚60cmの第IV層下が第V層の砂利層（基盤層）となる。以降、主にB・C区内の第IV層の堆積状況を確認を行う。

10月1日、八郎潟小学校4～6年生17名、総合学習（郷土歴史クラブ）の一環で来跡する。5日、事業主体者である秋田地域振興局担当職員、調整機関である県文化財保護室職員立ち会いの下、現場の引き渡し協議を行う。6日、現地からの発掘器材等の撤収を開始する。7日、S L 07内にある木材のうち9点を樹種同定用サンプルとして採取する。この作業をもって野外での調査は終了となった。

第4節 整理等作業の経過

整理・報告書作成作業は、令和2年3月末で閉校となった町立八郎潟小学校の教室を八郎潟町埋蔵文化財整理室として利用し実施した。

野外調査が終了した翌日である10月8日から、出土遺物の洗浄を開始した。その後、全点の注記作業を経て、遺物の選別・分類と集計・計量を実施した。土器類については接合・復元を行った。次いで報告書掲載遺物の抽出と集計データの入力も並行させた。

10月26日、秋田県埋蔵文化財センター出張展示『八郎潟周辺の縄文・弥生』（八郎潟町えきまえ交流館 はちバルギャラリー、会期：11月8日まで）に合わせて、併設の町立図書館内で「白ケロV遺跡」の出土石器類を展示。現場の写真も併せて掲示した。

遺構の平面・断面図等は、11月10日からイラストレーター2021を利用してデジタルトレースを行った。また、出土遺物の図示は、その作業時間と経費面での効率化と共に従来手法の実測や拓本に比べて客観的な資料提示を考慮し、株式会社ラングに委託した“PEAKIT画像”を採用することにした。PEAKITは、ラングが考案した考古資料に特化した三次元データの表現方法であり、報告書に掲載した石器類・縄文土器・鉄製品（鉄滓を含む）の全点はPEAKIT画像である。12月15日、八郎潟町文化財審議会委員整理作業を視察する。

令和3年1月14日、秋田県埋蔵文化財センター中央調査班（秋田市新屋）の整理室を借用して、出土した縄文土器〔第19図2〕の接合と復元作業を行った。

PEAKIT画像の編集、イラストレーター等を利用した挿図・写真図版作成は2月末に、以降は報告書の文字原稿作成に終始し3月末で完了させた。報告書の印刷は、令和3年度事業として実施した。

なお出土した遺物は、報告書掲載の有無、種別により分けた上でコンテナに収納し、遺物台帳を作成した。

第2章 調査の位置と環境

第1節 地理的環境

白ケロV遺跡が所在する南秋田郡八郎潟町は、秋田県の沿岸中央部、かつて琵琶湖に次ぐ国内第2の湖であった八郎潟の東岸城南側にある。海水と淡水が混じる汽水湖であった八郎潟は、国営干拓事業として昭和32年に着工、昭和39年には干陸となり大潟村の誕生、昭和44年事業完工、昭和52年の全事業終了という経緯をもつ。

八郎潟町は、昭和31年に一日市町ひといちまちと面潟村おもかたむらが合併して誕生し、町域の東から南側は五城目町、南西隅で井川町、西は八郎潟唯一の面影を残す東部承水路を挟んで大潟村、北側は山本郡三種町（旧琴丘町）とそれぞれ隣接する。その面積は17km²と県内25市町村では最小であり、南北・東西ともに一辺6km四方内に収まる。一方で人口密度は県内最大値（平成27年国勢調査、357.6人）を示している。町域の西側を南北に縦断するJR奥羽本線八郎潟駅を起点とすれば、遺跡は北東方向に約3.3kmの位置となる。

遺跡周辺の地形を東方の出羽山地側から俯瞰する。秋田市仁別と井川町境に位置するまいたやま俎山(722m)を主峰とする俎山山地、その北側に続く薬師山山地・赤倉山山地（五城目町）が当域内の出羽山地を構成する。南北方向の延長性をもつ山地の西側に接続して丘陵地、その西側に沖積低地、そして日本海に連なる八郎潟へと高度を下げていくが、丘陵地と沖積低地の境界域に森山(325m)と高岳山(221m)という二つの火山岩地であり残丘状の山地が認められる。

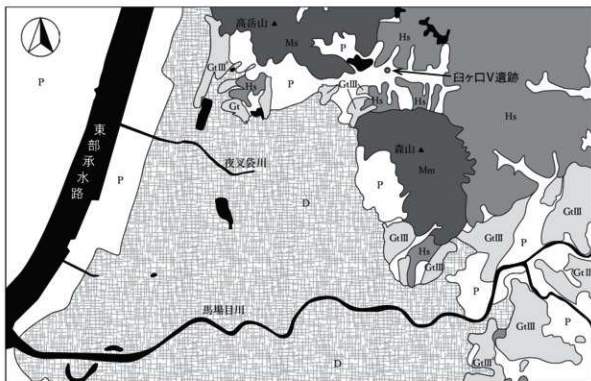
遺跡は森山の北側、高岳山の南東部に位置し、両者に挟まれるように分布する琴丘丘陵地を西方向に開口する湖東沖積低地の最奥部に立地する。標高は20～22mである。

表層地質的には、遺跡周辺の琴丘丘陵地は、船川層（新第三紀中新世後期）と呼ばれる泥岩（msF）層であり、湖東沖積低地は泥がち堆積物（ma）からなる。また遺跡地の土壌は、水稻の生産に適した細粒グライ土壌（Htn、幡野統）、調査区北側の琴丘丘陵地は適潤性の褐色森林土壌（Fu-2b、富津内2統b）である。

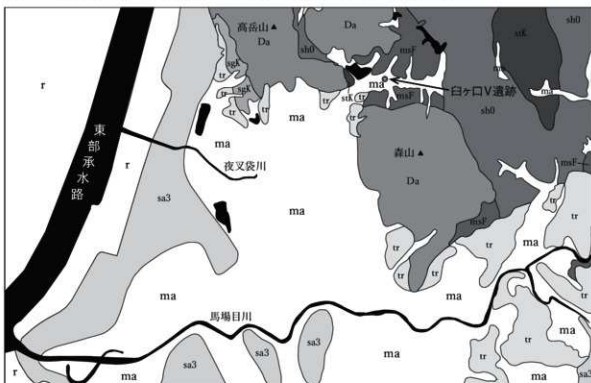
また、農村指導者で農聖と称される石川理紀之助（1845～1915）が明治31年〔1898〕に調査した「面潟村適産調 浦大町部落」（発行は明治34年、潟上市郷土文化保存伝習館蔵）には遺跡のある字白ケロの土壌についての説明が認められる。

添付の絵図には、調査区周辺に「イ」と墨書きされ、「(イ)印（古層）淡黒色強埴土下層同上又礫点々」、調査区外北側の細長い沢地には「ロ」とあり、「(ロ)印（第三紀）淡黒色強埴土粒状及砂質点々地未熟なり下層同上」と記されている。

本遺跡の範囲は、試掘・確認調査および本発掘調査時における周辺域の踏査・遺物散布状況により、東西・南北とも長さ約150m、面積11,000m²と推定される。（第3図参照）。



地形分類図 Mm：中起伏山地（起伏量400～200m）、Ms：小起伏山地（起伏量200m未満）、Hs：丘陵地Ⅱ（起伏量100m未満）、Gt：砂礫段丘（中位GtⅡ、低位GtⅢ、最低位GtⅢ）、D：三角州および湖岸平野、P：谷底平野（扇状地・自然堤防および砂堆の低地、干拓地・人工改変地を含む）



表層地質図

未固結堆積物=r：泥・砂および礫、sa3：砂がち堆積物3、
 ma：泥がち堆積物、tr：砂および礫、stk：砂礫層（含泥炭層、潟西層）、固結堆積物=msF：泥岩（船川層）、sh0
 ：珪質頁岩（女川層）、stk：礫岩・砂岩・頁岩および凝灰岩（小谷沢層）、火山性岩石および深成岩=Da：石英安山岩

0 2km
 (S=1/50,000)
 上図は、秋田湾大規模工業開発地域「土地分類基本調査五域目」（秋田県1973）所収の「地形分類図」と「表層地質図」を一部改変後にトレースしたものである。

第4図 遺跡周辺の地形分類・表層地質図

第2節 歴史的環境

白ケロV遺跡周辺の歴史的環境について、第5図内に所在する遺跡を中心として紹介する。なお、遺跡名次の《 》内数字は、第5図の遺跡番号に対応する。

【旧石器時代】当該期の遺跡は図幅中には存在せず、最も近くでは白ケロV遺跡から北北西約4.5kmにある堂の下遺跡（三種町鹿渡、秋田自動車道八郎潟SA周辺）でナイフ形石器や石刃が出土している。

【縄文時代】町城の北西部にあたる真坂地区の沢田遺跡が知られる（現在は沢田I遺跡《19》として登録）。明治時代から石器類の出土が知られ、秋田の郷土研究の先駆けとされる真崎勇助〔1841～1917〕が著した『雲根録』には、明治8年〔1875〕11月の記録として「秋田郡真坂村八幡林ノ辺り」から「畑ニ矢ノ根石イト多クアリ」とある。八幡林あるいは八幡台は、沢田地区一帯の通称とされる。同著所収で明治19年〔1886〕の「秋田縣鐵石産地一覽表」には、真坂村「八幡林ノ辺」から鐵石（石鐵）44点の記載がある。

また、昭和31年には秋田大学歴史研究室と八郎潟町教育委員会により、「秋田県中央部に於ける縄文中期文化の編年の研究」を目的とした沢田遺跡の学術調査が実施された。その結果、縄文前期末から中期末にかけての土器群が出土し、米代川流域以北に分布の中心をおく円筒上層式土器と秋田平野以南に分布の中心をもつ大木式土器が共存する形で確認された。次いで、昭和47年には八郎潟干拓地における宅地造成に供する土砂採取に係る緊急調査が、秋田県教育委員会と八郎潟町教育委員会により実施された。その結果、縄文時代中期の竪穴住居跡2軒等が検出された。出土遺物には北陸の影響を受けた土器や土偶（第7図20）も認められた。さらに発掘資料ではないが、鉢形土器（秋田県指定有形文化財、考古資料）や、翡翠製大珠（秋田県立博物館所蔵）などの遺物もある。

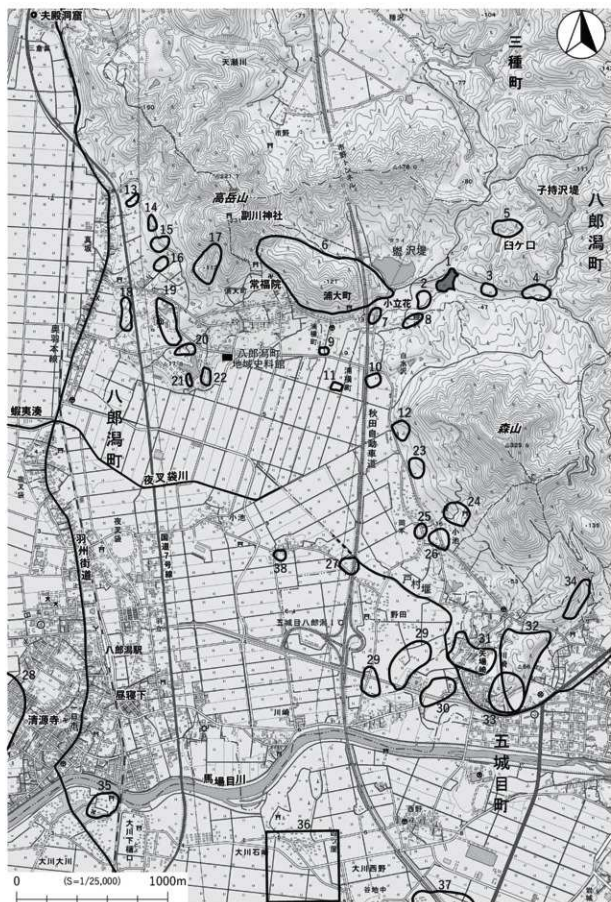
現在も耕作などで沢田遺跡及びその周辺から発見される遺物が、近くにある八郎潟町地域史料館に持ち込まれ保管されている。今回の発掘調査を契機として、史料館から遺物を借用し、その一部を図化（PEAKIT画像）し、第6・7図に掲載した。第6図12・13の文様構成には北陸方面からの影響が想定される。

沢田遺跡の南側に位置する塞ノ神遺跡（現在は塞ノ神II遺跡《22》として登録）は、平成12年に「塞ノ神農村公園」整備に伴う範囲確認調査が実施され、明確な縄文時代の遺構は確認できなかったが、沢田遺跡同様に中期の土器片が出土した。史料館に保管されていた塞ノ神遺跡採集遺物のうち石器3点を、第7図（22～24）に示した。22：石錐、23：石篋、24：楔形石器である。

町城の南東部、小池地区及び五城目町岡本に所在する下台遺跡《31》は、弘前大学人文社会学部による「八郎潟沿岸の縄文時代晩期末の様相解明」を目的とする発掘調査が平成25年に実施された。その結果、縄文時代晩期末の竪穴住居跡6軒等が検出され、東北では数少ない当該期の集落跡が確認された。

また詳細は不明だが、町城北西隅にあたる真坂字三倉鼻の「オドド洞窟」(夫殿洞窟)には貝塚があったことが昭和37年刊行の『秋田県史』（第1巻 古代・中世編）に記録されている。

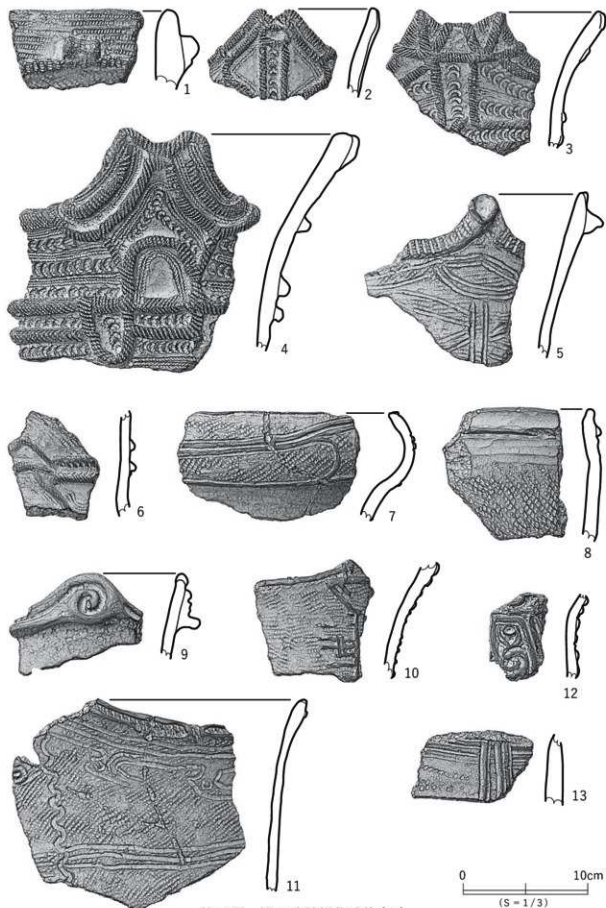
【弥生時代】五城目町野田の北遺跡《27》から後期の甕形土器片が出土しているにすぎない。周辺における弥生時代の遺跡分布は、八郎潟西岸にあたる男鹿市域でまとまりをもつことが知られ、当該域との差が明確である。



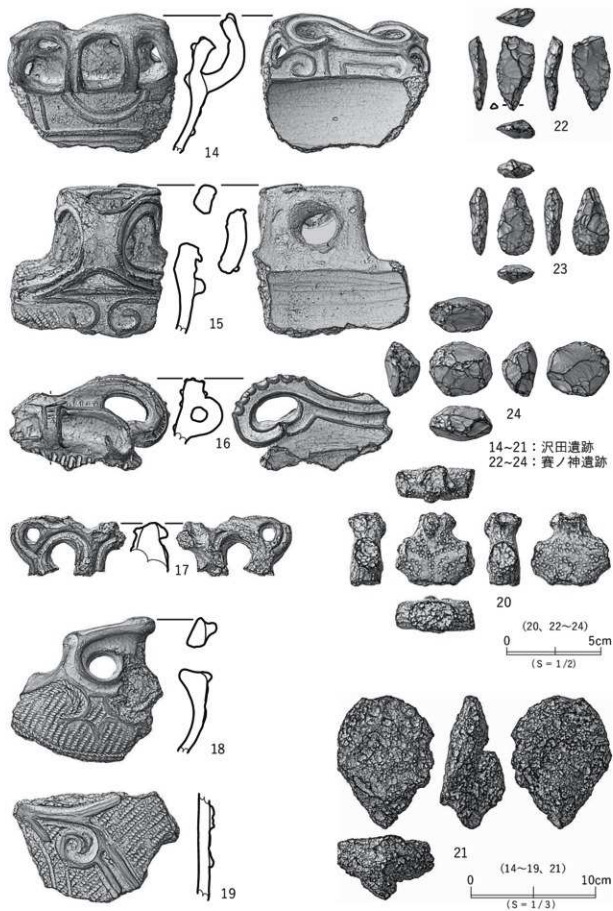
第5図 白ヶ口V遺跡と周辺の主な遺跡

第1表 白ヶ口V遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡地図番号	遺跡名	住所	種別	時期	遺構・遺物等	文献番号
1	363-27-56	白ヶ口V	八郎潟町浦大町字白ヶ口	散布地	縄文/古代/中世/近世	本書参照	
2	363-27-50	白ヶ口I	八郎潟町浦大町字白ヶ口	散布地	縄文	縄文土器(後期)、石器剥片	本書
3	363-27-51	白ヶ口II	八郎潟町浦大町字白ヶ口	散布地	縄文	石器剥片	
4	363-27-52	白ヶ口III	八郎潟町浦大町字白ヶ口	散布地	縄文	縄文土器(後期)、石器剥片	
5	363-27-53	白ヶ口IV	八郎潟町浦大町字白ヶ口	散布地	縄文	石器剥片	
6	363-27-24	浦城	八郎潟町浦大町字里ヶ久 五城目町浦横町字館ノ下	館跡	中世	空堀、郭、青磁、黄瀬戸、越前系陶器	12・26
7	361-25-49	小立花	五城目町浦大町字小立花	散布地	縄文/中世	石器剥片/陶磁器、珠洲系陶器	14
8	361-25-54	鑑沢	五城目町浦大町字鑑沢	散布地	縄文	石器剥片	27
9	361-25-58	館ノ下	五城目町浦横町字家ノ上	散布地	縄文/古代	縄文土器、石器剥片/土師器	27
10	361-25-50	山際道ノ下	五城目町浦横町字山際道ノ下	散布地	縄文/古代/中世	石器類/土師器/珠洲系陶器	14
11	361-25-62	暇ノ間	五城目町浦横町暇ノ間	散布地	縄文	石器剥片	27
12	361-25-5	東谷寺	五城目町小池字森山下	寺院跡	中世か	石造物	11・12
13	363-27-1	大沢I	八郎潟町真坂字大沢	散布地	縄文	縄文土器、石器剥片	27
14	363-27-2	大沢II	八郎潟町真坂字大沢	散布地	縄文	石器剥片	27
15	363-27-3	石塚I	八郎潟町真坂字石塚	散布地	縄文	縄文土器、石器剥片	27
16	363-27-6	石塚II	八郎潟町真坂字石塚	散布地	縄文	縄文土器、石器剥片	27
17	363-27-49	石塚III	八郎潟町真坂字石塚	館跡	中世	空堀、郭郭	13
18	363-27-10	沢田II	八郎潟町真坂字沢田	散布地	縄文	石器剥片	27
19	363-27-9	沢田I	八郎潟町真坂字沢田	散布地	縄文/古代	竪穴住居跡、縄文土器、石器、土偶/鉄斧	6・9
20	363-27-16	島谷崎	八郎潟町浦大町字島谷崎	散布地	縄文	石器剥片	2
21	363-27-17	塞ノ神I	八郎潟町浦大町字塞ノ神	散布地	縄文	石器剥片	27
22	363-27-18	塞ノ神II	八郎潟町浦大町字塞ノ神	散布地	縄文/古代	縄文土器、石器剥片/鉄斧、羽口	15
23	361-25-55	森山下	五城目町小池字森山下	散布地	縄文	石鏃	27
24	361-25-7	岡本城	五城目町小池字森山下	館跡	中世	空堀	11・13
25	361-25-56	家ノ下	五城目町小池岡本字家ノ下	散布地	縄文	石器剥片	27
26	361-25-9	岡本	五城目町小池字森山下	散布地	縄文	竪穴住居跡、縄文土器(後・晩期)、土偶、石器	11・13
27	361-25-51	北	五城目町野田字北	散布地	縄文/弥生/古代/中世	縄文土器(後・晩期)/弥生土器(後期)/土師器、須恵器/井戸跡、珠洲系陶器	16
28	363-27-44	押切城	八郎潟町字中嶋	館跡	中世	堀、板碑(貞和5年[1349]銘)	12・13
29	361-25-53	開防	五城目町小池字開防	集落跡・館跡	古代/中世	竪穴住居跡、竪穴柱建物跡、鍛冶炉/井戸跡	19・20
30	363-27-54	貝保	八郎潟町開崎字貝保	集落跡	古代	竪穴柱建物跡、鍛冶炉、大溝	20・23
31	363-27-55 361-25-10	下台	八郎潟町小池字岡本下台 五城目町岡本字下台	集落跡	縄文/中世	竪穴住居跡、縄文土器(晩期末)、土偶、石器/青磁	25
32	361-25-12	細越館	五城目町小池字岡本下台	窯跡・館跡	古代/中世	須恵器窯跡、土師器窯跡/郭面、空堀	11・19
33	361-25-11	細越	五城目町七倉	散布地	縄文	縄文土器(晩期)	27
34	361-25-13	神明前	五城目町字神明前	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)	27
35	361-25-2	大川城	五城目町大川字東屋布	館跡	中世	板碑	11
36	361-25-3	石崎	五城目町大川字樋口字道ノ下	城柵跡	古代	柵列、柱脚、木製品 土師器 須恵器 鉄製品 木製品	10・24
37	361-25-52	中谷地	五城目町大川谷地中谷地	集落跡	古代	竪穴柱建物跡、板材列、土師器、須恵器、木製祭祀具、漆絵文書	17
38	363-27-41	萱戸家群碑	八郎潟町小池字萱戸家	板碑	中世	板碑	18



第6図 沢田遺跡採集遺物(1)



第7図 沢田遺跡採集遺物(2)・賽ノ神遺跡採集石器

【古代】 奈良時代以降に遺跡数は急増する。町城南東部川崎地区の貝保遺跡《30》、隣接する開防遺跡《29》と細越館遺跡《32》、馬場目川南岸には石崎遺跡《36》と中谷地遺跡《37》が所在する。貝保・開防遺跡は鍛冶関連の集落跡、細越館遺跡は須恵器窯跡と土師器焼成の窯跡が認められる。石崎遺跡は、用水路中に露出していた径80cmの丸柱の発見を契機として、昭和42年から48年にかけて3次の発掘調査が実施された。その結果、柵列や築地土堀とされる遺構が検出され、同遺跡の調査成果を再検証した村上義直氏によれば、「秋田郡衙の可能性が高い」とする。石崎遺跡の東側に隣接する中谷地遺跡は、秋田自動車道建設に伴い平成11年に発掘調査が行われた。その結果、蛇行する小河川を利用した区画内に掘立柱建物跡等が検出され、河川跡からは大量の土器類とともに木製祭祀具も出土した。祭祀遺物と石崎遺跡との関係から、官衙的性格の強い祭祀遺跡と位置付けられる。

一方、町城北側の真坂・浦大町地区では製鉄・鍛冶に関する資料が見いだされている。先に紹介した沢田遺跡からは鉄滓（第7図21）が採取され、塞ノ神遺跡の範囲確認調査において、検出された竅穴状遺構内からフイゴの羽口や土師器が出土している。白ケ口V遺跡が位置する森山北麓には鉄滓が多く見つかる鐵塚（かたて）があったとの記述が、昭和11年に発行された『面湯村郷土史』にある。

また、古代との明確な根拠は示せないが、八郎湯に注ぐ夜叉袋川の河口にあたる「蝦夷湊」は、かつて馬場目川の河口であったとされ、阿倍比羅夫東征時の上陸地との伝説とともに語られている。

『八郎湯町史』によれば、大同2年（807）に、本遺跡東側の子持沢地区（第2図、白ケ口Ⅲ遺跡周辺か）に東谷寺が創建されたとする。ここは霊地として昭和21年以前まで耕地にされていなかったとも記述がある。

【中世】 城館跡として浦大町・真坂地区の浦城跡《6》と石塚Ⅲ遺跡《17》、森山南西麓の岡本城跡《24》、馬場目川河口付近の押切城跡《28》、大川城跡《35》が知られる。浦城跡は、高岳山東方の丘陵尾根部を利用し、東西方向に複数の郭面とそれぞれに帯郭が巡る山城である。その西限には深さ約9mの空堀が位置する。築城時期に関する時期は不明ながら、天正16年〔1584〕頃に安東氏に攻め込まれたことで落城したとされる。遺跡は現在NPO法人 浦城の歴史を伝える会による管理と手作りの整備が進められている。発掘調査の履歴はないが、採集された遺物は八郎湯町地域史料館に収蔵・展示されている。



左奥が高岳山、中央が浦城跡、右奥が白ケ口地区

〔200822 撮影、南西一〕

集落跡では、先に紹介の北遺跡《27》がある。馬場目川の旧流路によって形成された自然堤防の一角に占地する遺跡は、秋田自動車道建設に伴い平成11年に発掘調査が実施され、主たる時期を13世紀代とする井戸跡15基等が検出された。出土遺物には、中国産の青磁や白磁、国産の須恵器系陶器や古瀬戸碗がある。

また、八郎潟町の中世を語る上で欠くことができない資料として、板碑を初めとした石造物が挙げられる。萱戸家碑群《38》は、小池板碑群として古くから知られ、文化6年〔1809〕に現地に足を運んだ菅江真澄〔1754～1829〕は、日記『夷舎奴安装碑（ひなの遊び）に「関佛庵（石佛庵）」の周囲に環状に配置された石碑群の図絵と、その説明に「田の中をうかちて古碑を百あまり掘得たり」と記している。萱戸家碑群には現在、板碑を含む石碑が72基存在する。板碑には紀年銘が刻まれているものもあり、いずれも南北朝時代〔1336～1392〕北朝側の元号が認められる。なお、小池板碑群の保護施設（建屋）が平成30年11月に完成し、内部には板碑56基が納められている。

萱戸家碑群以外にも、町内には多くの中世石造物が分布する。遺跡登録分として、小池地区の中島で板碑5基、真坂・浦大町地区で板碑8基・五輪塔2基・宝篋印塔2基、夜叉袋地区で板碑10基、一日市・川崎地区で板碑5基がある。



保護施設内の小池板碑群
〔210330撮影〕

【近世】延享3年〔1746〕に著された『戸村堰縁起録』（参考文献4からの引用）には、小立花村内の地名に「白ケ沢」の表記があり、遺跡のある「白ケ口」の先行地名と見られる。小立花村は、慶長6年〔1601〕の『秋田実季侍分限（秋田家文書）』に、「卅八石六斗八升四合 湖東通 小立花村」として初出する。近藤甫寛〔1735～1809〕が寛政12年〔1800〕に久保田藩庁に献上した『領中六郡紀行』（後に『久保田領郡邑記』として周知）の「小立花村」には、「高八五石七斗五升・免六ッ・家居七戸・人三八口・馬五頭」とあり、宝永7年〔1710〕「浦大町付加村」との記述もある。

小立花村は明治9年〔1876〕に浦大町村に合併となり、明治11年〔1878〕の郡区町村編制法で浦大町村の小字として残ることとなった。明治22年〔1889〕の町村制施行に伴い、浦大町村は近隣6村と合併し面潟村の大字となった。昭和31年の八郎潟町誕生に伴い面潟村は消滅し、八郎潟町浦大町字小立花となる。しかし、その2年後に行われた旧面潟村地区の住民投票の結果、小立花は五城目町に編入され五城目町浦大町の小字となり、遺跡のある八郎潟町浦大町字白ケ口とは行政区画が異なることとなった。

ところで遺跡のある「白ケ口」が「白ケ沢」からの名称変更時期は明確ではない。ただし、前節で紹介した『面潟村適産調 浦大町部落』添付の絵図には、「白ケ口」の表記があり、遅くともその調査年である明治31年〔1898〕には浦大町字白ケ口となっていたようである。

【参考・引用文献】第1表の文献番号とも対応。

- 1 高岡尋常小学校1936『面湯村郷土史』
- 2 秋田県1960『秋田県史』考古編
- 3 秋田県1962『秋田県史』第1巻 古代・中世編
- 4 三浦鉄郎1964「雄物川及び馬場目川氾濫原の新田開発」『地理学評論』第37巻1号
- 5 奈良修介・豊島昂1967『秋田県の考古学』吉川弘文館
- 6 岩見誠夫1968「南秋田郡八郎潟町沢田遺跡調査報告」『秋大史学』第16号
- 7 内田武志・宮本常一1973「夷舎奴安装碑」『菅江真澄全集』第4巻 未来社
- 8 秋田県1973『土地分類基本調査 五城目』
- 9 秋田県教育委員会1974「鹿角大規模農道遺跡分布調査報告書 沢田遺跡発掘調査報告書」
- 10 五城目町教育委員会1975『石崎遺跡発掘調査報告 第1～3回合報』
- 11 五城目町史編纂委員会1975『五城目町史』五城目町
- 12 八郎潟町1977『八郎潟町史』
- 13 秋田県教育委員会1981『秋田県の中世城館』
- 14 秋田県教育委員会2000「小立花遺跡」「山際道ノ下遺跡」「遺跡詳細分布調査報告書」秋田県文化財調査報告書第308集
- 15 八郎潟町教育委員会2001『塞ノ神遺跡範囲確認調査報告書』
- 16 秋田県教育委員会2001『北遺跡』秋田県文化財調査報告書第315集
- 17 秋田県教育委員会2001『中谷地遺跡』秋田県文化財調査報告書第316集
- 18 八郎潟町教育委員会2001『八郎潟町の石碑 板碑・五輪塔・宝印塔編』
- 19 五城目町教育委員会2002『開防遺跡』五城目町埋蔵文化財調査報告書第8集
- 20 秋田県教育委員会2003『開防遺跡・貝保遺跡』秋田県文化財調査報告書第361集
- 21 柴田次雄2004『校訂解題 久保田領郡邑記』無明舎出版
- 22 秋田県埋蔵文化財センター 2012『真崎勇助著「雲根録」全五巻翻刻』
- 23 秋田県教育委員会2015『貝保遺跡（第2次）』秋田県文化財調査報告書第499集
- 24 村上義直2015「最北の郡衙石崎遺跡について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第29号
- 25 上條信彦2017『八郎潟沿岸における縄文時代晩期末の研究—下台遺跡発掘調査報告書—』
弘前大学人文社会学部北日本考古学研究中心
- 26 五十嵐祐介2017「浦城」『東北の名城を歩く 北東北編』吉川弘文館
- 27 秋田県教育庁文化財保護室『秋田県遺跡地図情報』<http://common3.pref.akita.jp/heritage-map/>

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

発掘調査は重機(0.45m²及び0.7m²クラスのバックホー)による表土除去から開始した。表土層(第I層、層厚20cm前後)は新たな水田の耕作土とするために、調査区外の特定箇所を集めることにした。第II層以下については遺物の散布状況や遺構の有無に注意を払いつつ、重機による除去を行った。その詳細は、第1章第3節の記載を参照のこと。

遺構・遺物の出土地点等の記録作成にあたり、グリッドを設定して実施した。方眼杭打設を含むその設定業務は、株式会社さくら技研(秋田市)に委託した。グリッド設定は、まず世界測地系平面直角座標第X系に整合する調査区内の任意の1点を水平・垂直方向の原点(HA50)とした。原点を通る座標北方向をHAライン、これに直交する東西方向を50ラインとする基準線を定め、ここから南北・東西方向に4m間隔で基準線を引き、北に進むごとに51・52・53…、南へは49・48・47…のアラビア数字を、西に進むごとにHB・HC・HD…、東へはGT・GS・GR…の二文字のアルファベットを付した。4m×4mの各グリッドは、その南東隅の交点をもって、例えば「HA50グリッド」とした(第10図上参照)。原点としたHA50のX座標は-3100.000、Y座標は-62200.000、標高21.058mである。

遺構等の検出作業にはジョレンや移植ゴテを利用して人力で進めた。当初地山土と想定していた第IV層が調査区外上位面からの流入土(再堆積層)であり、同層中から少量ながら剥片等が出土することが判明し、第IV層面の一部についても重機による掘削を行った箇所が存在する。第11図のサブトレンチ表示部などである。ただし、その掘削深度は、新たな水田面造成に伴う削平深度までとしており、下位の基盤層である第V層面まで到達したのは限定的である。従って第V層面を掘り込み面とする遺構や出土遺物の有無については全てを確認できているわけではない。

検出した遺構には、遺構種別を表すアルファベットと検出順を示す通し番号を組み合わせて、「SD01」のように呼称した(凡例参照)。その精査は確認・検出状況、土層断面、完掘状況等の段階を経て、各段階の写真撮影と図化を行った。

写真撮影は、八郎潟町が所有するデジタル一眼レフカメラ(ソニー製DSLR-A350、1,490万画素)を使用した。図化は全て手作業で実施し、1/20スケールでマイラーベースに記入し、土層注記なども筆記した。また遺物も、原則として全点を対象に出土地点の記録を手作業で実施した。遺構の図化を含むこれらの作業は、長さ4mの検尺(幅5cm、厚さ3cmの杉材、能代市くどうはじめ材木店製)を用いた。

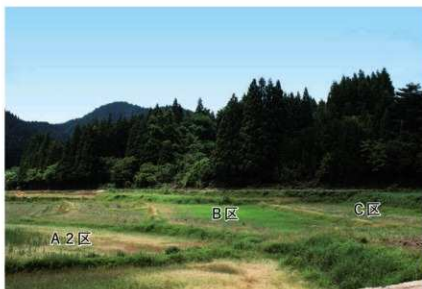
調査の過程において未炭化の木材が多数確認されたことを受けて、能代市にある秋田県立大学木材高度加工研究所(通称:木高研)の専門職員を招聘し、試料の実見と同定作業を依頼することにした。その結果については第3章第4節にまとめた。また、整理等作業については、第1章第4節を参照されたい。



上：浦城跡本丸東側から遺跡のある臼ヶ口地区を望む。手前に秋田自動車道、右奥が森山。中央奥（東側）から手前に延びる細長い沢の北側に遺跡（▶印）は位置する。（200902撮影、西→）

下：八郎潟町夜叉袋（町営弁天球場北側）から遺跡のある浦大町字臼ヶ口地区を望む。左奥が高岳山、隣接する一段低い山地が浦城跡。右奥が森山、隣接する一番低いところが臼ヶ口地区。撮影地（水田面）の標高は5m、大字にある「浦」が示すように、縄文時代には入り海のような景観が広がっていたのかもしれない。（210512撮影、西→）

第8図 遺跡遠景



上：ドローンによる全景写真
 (200613撮影、真上→)
 株式会社セコー提供

中：調査前
 (200619撮影、南→)

下：調査前
 (200622撮影、西→)

第9図 調査前の状況

第2節 基本層序

Ⅰ B区東側における基本層序（第10図下）

本遺跡の基本層序は、B区東側GR51グリッドでの土層観察をもとに表示する。

- 第Ⅰ層 褐色～暗褐色（10YR4/4～3/4）シルト質土。表土・水田耕作土、層厚20cm前後。
- 第Ⅱ層 灰褐色～褐灰色（7.5YR4/2～4/1）シルト質土。盛土・水田造成土、層厚20cm前後。
- 第Ⅲa層 黒褐色（10YR3/1）シルト質土。層厚25～30cm。
- 第Ⅲb層 褐灰色（10YR4/1）シルト質土。層厚5～10cm。
- 第Ⅲc層 黒褐色（10YR3/1～3/2）シルト質土。層厚15cm前後。
- 第Ⅳa層 青灰色（10BG6/1）粘質土。層厚5～10cm。Ⅲ層との層境は明瞭。
- 第Ⅳb層 青黒色（10BG2/1）シルト質粘土。黒褐色シルト質土を含む。層厚5～10cm。
- 第Ⅳc層 青灰色（10BG5/1）粘質土。層厚10～15cm。
- 第Ⅳd層 オリーブ黄色（7.5Y6/3）粘質土。第Ⅴ層由来の砂礫を含む。層厚5cm前後。
- 第Ⅳe層 青灰色（10BG6/1）粘質土。層厚5～10cm。
- 第Ⅳf層 青灰色（10BG5/1）粘質土。層厚5～10cm。
- 第Ⅳg層 暗褐色（7.5YR3/3）泥炭質土。第Ⅴ層由来の砂礫を含む。層厚15cm前後。
- 第Ⅴ層 明緑灰色（7.5GY7/1）船川層由来の泥岩を主とする砂礫層、基盤層。

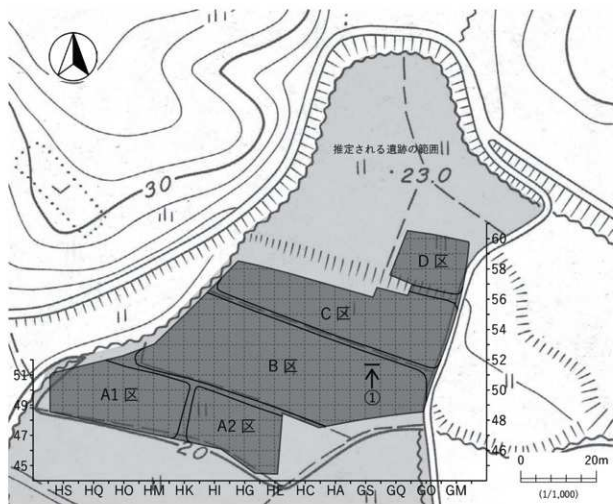
第Ⅲ層土は、黒褐色シルト質土に第Ⅳ層粘質土ブロックあるいは第Ⅴ層砂礫混入の有無、混入量により3細分（a～c）しているが、明確に第Ⅲc層が認められるのは、本観察地点の他、B区中央（HD50グリッド周辺）とC区西側（HE57グリッド周辺）及びS L 07上面（第21図②地点参照）に限られ、他地点では第Ⅲa・Ⅲb層のみの分布である。いずれも遺物包含層であり、縄文時代の土器・石器類から古代・中世・近世の遺物も混在する。このことから、第Ⅲ層が形成された時期には、近世が含まれることになる。

第Ⅳ層土は青灰色の粘質土、いわゆる「青ネバ」と称される強粘性土であり、第1章第3節で報告のとおり、当初は地山粘土層と想定していた。ところが、同層は基盤である第Ⅴ層砂礫層の上面に調査区外北側、丘陵縁辺からの流入土であることが推測されるに至った。

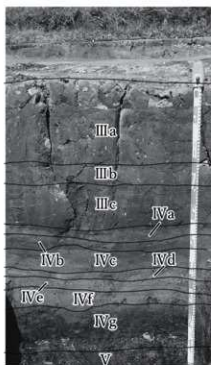
第Ⅳa・Ⅳb層は遺物包含層であり、縄文時代の土器・石器類が出土する。第Ⅳc層以下にも遺物は含まれるが、本観察地点で細分した層と他地点での出土層は明確に整合できない。第Ⅳg層の泥炭質土は本観察地点周辺でのみの確認であり、出土遺物はない。

第Ⅳ層出土の遺物は、縄文時代の土器・石器類に限られ古代以降の遺物は混在しない。なお、第Ⅳ層面は移植ゴテ等で精査をした直後は、鮮やかな青灰色を発しているが（第14図下写真など）、半日も経過すると酸化が進み黄褐色に変色する（第13図中写真など）。

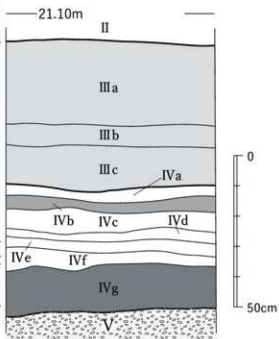
第Ⅲ・Ⅳ層の堆積状況は、地点毎に様々な様相を呈しており、遺跡の形成過程を復元する上で重要と判断したB～D区4箇所での観察記録を以下に示す。



グリッド配置・地区区分図



基本土層 B区東側、GR51グリッドで観察
上図①地点 (201006撮影、南→)



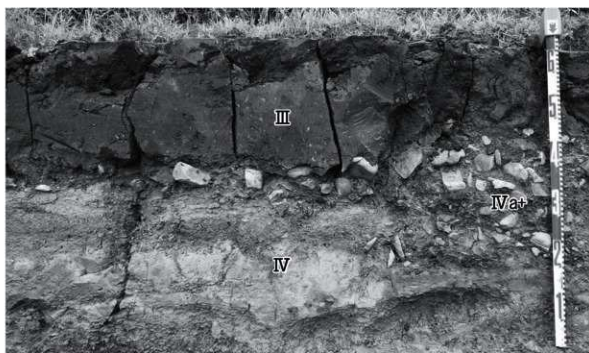
第 10 図 グリッド配置・地区区分図、基本土層図

2 B～D区における第Ⅲ・Ⅳ層の堆積状況

(1) C区北壁、第Ⅲ・Ⅳ層堆積状況 (第13図①地点 a-b間、②地点)

C区北壁で観察した第Ⅳ層は、その層理面が緩い弧状・波状を示している。これは斜面上位、北側からの水流による浸食と堆積の繰り返しにより形成されたと推測される。上記G R51グリッドで認められた黒褐色シルト質土を含む第Ⅳb相当層は確認できなかったことから、本地点での堆積終期は第Ⅳb層形成期以前とみられる。

また、上位面である第Ⅲ層と第Ⅳ層面の層理は明瞭に識別でき、第Ⅲ層形成の直前期において第Ⅳ層上面が広く削平を受けるような事象が起こっていたはずである。両層間には第Ⅴ層由来の砂礫の再堆積層 (Ⅳa+層、下写真の右側、第13図②地点) が挟在していることとも関係があるのかもしれない。



C区北壁 (第13図②地点) 土層断面

(200914撮影、南→)

(2) D区、第Ⅲ・Ⅳ層堆積状況 (第11図、第13図下)

調査区最上位にあたるD区では、第Ⅳ層面を精査したところ、黒褐色土の広がりや斑状に数多く検出された。確認調査時のトレンチK18 (第13図下) でも当初は堅穴住居跡のような遺構を想定して掘り下げを行ったが、人為的な痕跡は認められず、水流などの影響で第Ⅳ層面が挟られ凹状となったところに第Ⅲ層土が流入したと判断した。トレンチK18地点での第Ⅲ層土の厚さは1.2mに達する。

(3) B・C区西側、第Ⅲ・Ⅳ層堆積状況 (第11図、第14図～第17図)

B区・C区の西側においても、D区同様の黒褐色土の広がりや斑状に数多く検出された。ここでも遺構を想定して掘り下げを行ったが、明確に人為的な痕跡は確認できなかった。ただし、C区西端での土層堆積状況 (第14図下①地点) を見ると、単に第Ⅳ層層部に第Ⅲ層土が流入しただけでは説明のつかない様子が観察された。このことから、B区西側に北東-南西方向のサブトレンチ (幅3.5m、長さ24m、第11図) を設定し、第Ⅳ層面を掘り下げることで同層の堆積状況を確認することにした。

・B区サブトレンチ②地点（第15図）

②地点での第IV層は大きく3細分された（第IVx 1～3層）。粘質土（青ネバ）を主体とする第IV層内においてシルト質土が挟んでいるのは、B区東側の基本層序で示した第IVb層しかなく、第IVx 2層とした黒褐色シルト質土は同層由来と見られる。このなかにおいて②地点aでの観察から「心」字状に土層が変形していることは、第IVb層形成後に起こった地震等による地変と想定された。また、②地点b c間、dとした箇所では、砂礫混在層（第IVx 3層）が吹き上がったかのような、いわば噴砂のような状況を示している。その上面にあたる第III層内部の土層が攪拌された様子が観察されたことをあわせて見ると、地震等の発生時期は、第III層が堆積後あるいは堆積途中と言える。ただ、B区東側の基本層序観察地点では、第IV・III層とも自然な水平堆積を示していることから、地震等による土層の変形は限定的であったことになる。

・B区サブトレンチ③④地点（第16図）

③地点は、上記②地点から南西約4mに位置する。ここでも黒褐色シルト質土層（第IVx 2層）が変形した様子が観察されるが、②地点とは形状が異なり、球状・波状を呈する。

④地点は、③地点の南西約4mの位置にあたる。同地点では青ネバ層（第IVx 1層）が、めくれ上がり、第III層内に入り込んだ様子を呈している。このことから、土層の変形は第III層土が形成された後となるようである。

・B区サブトレンチ⑤～⑦地点（第17図）

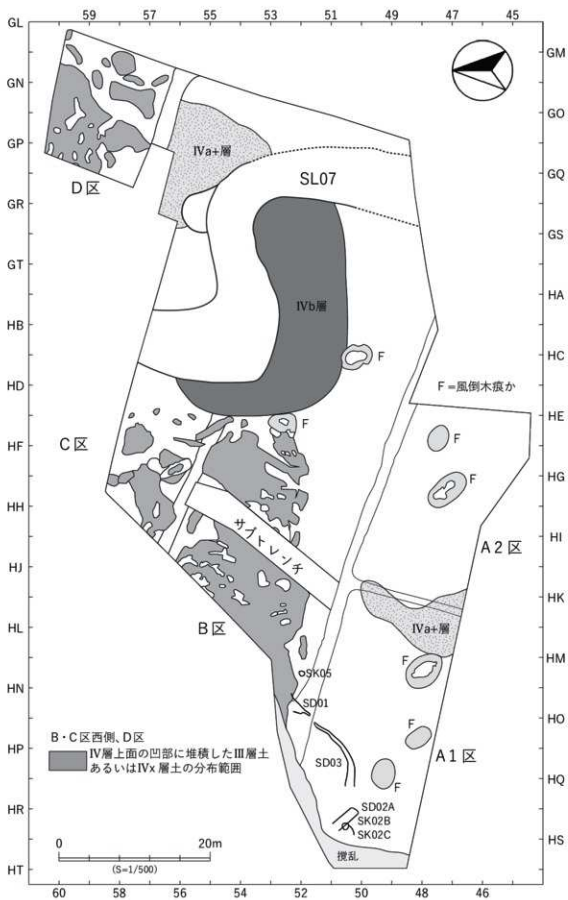
⑤地点は、上記③地点の南東側約4mに位置する。ここでも④地点と同様に黒褐色シルト質土層（第IVx 2層）がめくれ上がった状態で観察された。ただし、めくれ上がりの方向が、④地点では斜面上位、北側を向くのに対し、⑤地点では斜面下位、南側と逆方向である。なお、同土層面を精査する過程において、青ネバ層（第IVx 1相当層）から剥片が2点出土した。

⑥地点は、⑤地点の南西約4mに位置する。黒褐色シルト質土層（第IVx 2層）の堆積状況は、⑤地点より波状の振幅が大きい。

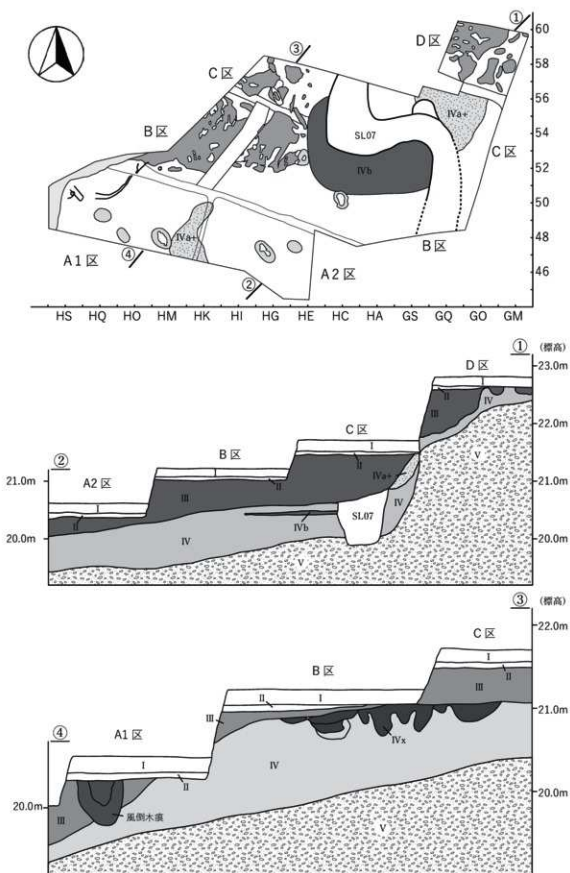
⑦地点は、⑥地点の南西約3mに位置する。ここでの堆積状況は、青ネバ層（第IVx 1層）と砂礫層（第IVx 3層）が波状を呈し、⑦地点写真左手前側では黒褐色シルト質土層（第IVx 2層）と第III層の黒褐～暗褐色シルト質土が混在する様子が観察された。

（4）B区HD50グリッド、第IV層堆積状況（第18図）

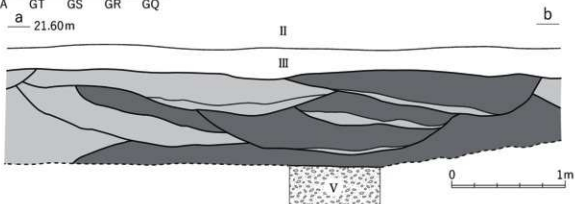
B区HD50グリッドでは、南北方向に長さ4m、幅1m程のサブトレンチを設定し、第IV層面を掘り下げて土層観察を行った。その結果、第IVb層由来の黒褐色シルト質土層（第IVx 2層）と青ネバ層（第IVx 1層）が互層に堆積（①地点）、あるいは前者が波状に堆積している（②③地点）様子が認められた。



第11図 第IV層面における遺構と土層の平面分布図



第 12 図 土層堆積模式図



第 13 図 C・D 区における第 III・IV 層堆積状況



B区西側第IV層面の状況（200925撮影、北西→）

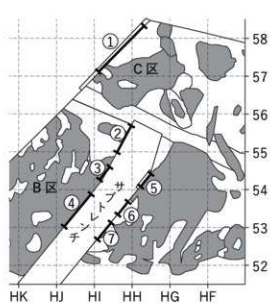


C区西側第IV層面の状況（200915撮影、西→）



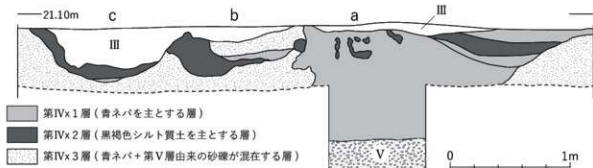
C区西端土層断面（第15図左上①地点、200911撮影、南→）

第14図 B・C区西側における第III・IV層堆積状況（1）



B区②地点 a 周辺土層断面
〔左図②地点北側、200831 撮影、南東→〕

断面図作成及び写真撮影地点



B区②地点土層断面図

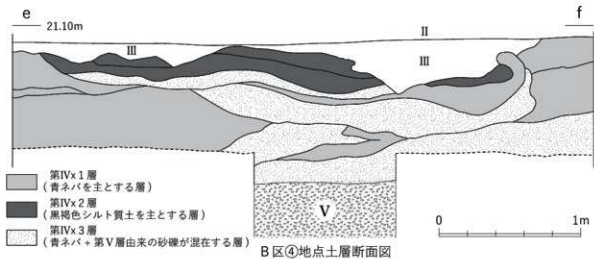


B区②地点土層断面〔200831 撮影、南→〕

第 15 図 B・C区西側における第III・IV層堆積状況 (2)



B区土層断面 (第15図左上③地点、200817撮影、南東→)



B区④地点土層断面 (200901撮影、南東→)

第16図 B・C区西側における第三・IV層堆積状況 (3)



B区⑤地点土層断面〔200817撮影、北西→〕

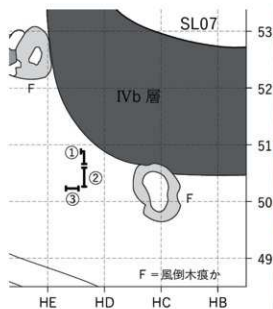


B区⑥地点土層断面〔200805撮影、北西→〕

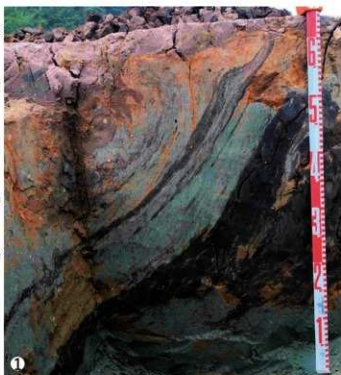


B区⑦地点土層断面〔200817撮影、北→〕

第17図 B・C区西側における第三・IV層堆積状況(4)



- ①地点 [200805撮影、西→]
②地点 [200916撮影、西→]
③地点 [200721撮影、南→]



第 18 図 B 区 HD50 グリッドにおける第IV層堆積状況

第3節 遺構と遺物

本節では検出された遺構と出土した遺物を、第IVb層出土遺物、S L07河川跡と出土遺物、検出遺構、遺構外出土遺物の順で紹介する。

I 第IVb層出土遺物（第11・12図、第19・20図）

第IVb層は、青灰色粘質土層（青ネバ）内に薄く堆積する黒褐色シルト質土層である。B・C区の中央から東側に分布し、後述するS L07河川に切り込まれている（第11・12図参照）。

第IVb層面上には第19図左上に示したように、A～Dの4地点から石器と縄文土器がややまとまって確認された。本遺跡出土の遺物は後述のように、原則として調査区外からの流入であるのに対し、本層出土の遺物のみが基本的に原位置を保っていると推測される。

(1) A地点（第19図、第20図④）

H C52グリッド内において約1 m四方の範囲内から石鏃1点（RQ2636、第19図1）と約180点の縄文土器片（RP2637～40）が確認された。縄文土器は2～3個体となりそうであるが、図上復元できたのは1個体（第19図2）のみであった。2は復元推定値で口径18cm、器高28cm、底径11cm、最大胴径20.5cmであり、外面に煤状炭化物が付着している。文様は、口縁上部と胴部中央に各2条の沈線が巡らされ、その区画内に長方形の沈線文が上下2段に5単位で配される。石鏃の法量は第2表を参照のこと。

(2) B地点（第20図①）

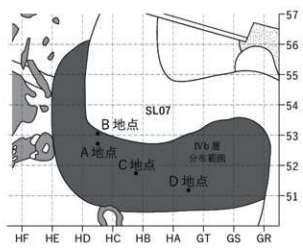
A地点の北約2 m、H C53グリッド内において10数点の縄文土器片（RP2741）が出土した。半割された底部片が背中合わせの状態を確認できた。復元個体（第20図3）は、胴下半～底部までであり、胴部無文、底部は摩耗により不明瞭であるがナデカ。底径は10.4cmである。

(3) C地点（第20図②）

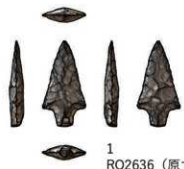
A地点の南東約7 m、H B51グリッド内において10数点の縄文土器片（RP2024）が出土した。深形土器の胴部片のみであり、復元はできなかった（第20図4）。4は地文に単節縄文LRが縦位回転施文されており、縄を結節したことによるS字状の痕跡が認められる。

(4) D地点（第20図③）

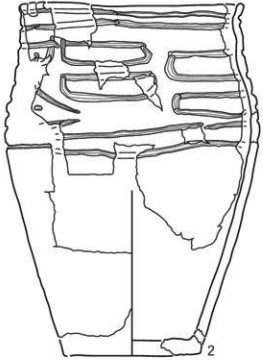
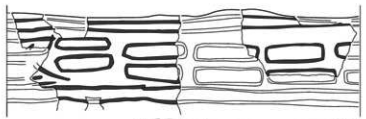
C地点の東側約8 m、G T51グリッド内において黒曜石製の楔形石器（RQ2145、第20図5）と約160点の縄文土器片（RP2146～53）が出土した。土器は一辺が3～4 cm程の小片の状態を確認され、かつ摩耗が著しく形状を復元できなかった。地文に単節縄文RLが施文される深鉢形土器と見られる。楔形石器の法量は第2表を参照のこと。



A地点RQ2636、RP2637~40出土状況
〔200825撮影、北→〕



1
RQ2636 (原寸大)

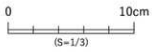


2
RP2637~40

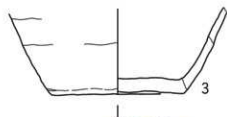


胴中央~下半部

口縁~胴中央部
(原寸の約1/3)



第19図 第IVb層出土遺物(1) A地点



- 3 B地点出土土器 (原寸の1/3)
 4 C地点出土土器 (原寸の約2/5)
 5 D地点RQ2145 (原寸大)

- ① B地点遺物出土状況 (第20図3)
 (200826撮影)
 ② C地点遺物出土状況 (第20図4)
 (200811撮影)
 ③ D地点遺物出土状況 (第20図5)
 (200812撮影)
 ④ A地点遺物取上状況 (200825撮影)

第20図 第IVb層出土土物 (2) B~D地点

2 S L07河川跡と出土遺物（第11・12図、第21図～第24図）

S L07河川跡は、B・C区中央～東側で検出された（第11図）。B区は東から西に向かって第III層面を掘り下げていたが、GTグリッドライン（第22図④地点c-d間）で幅6～7m、東西方向に延びる溝状の落ち込みが確認されたことから、西に向かって遡上する河川跡を想定した。ところが、HBグリッドライン（第21図②地点）以西を精査したところ、流路が北側に折れ曲がる形状となり、一方の下流部も両側に延びる、いわばS字クランク状の流路であることが判明した。

その規模は、上流側B区北壁での土層断面（第22図③地点a-b間）で計測すると上面幅8.5m、深さ0.9mとなる。ただし、同土層断面を精査したところ河川は一時期の浸食で形成されたのではなく、(旧) S L07E→S L07D→S L07C→S L07B→S L07A（新）の変遷を辿ることが推測された。

各河川内の堆積層は次の通り。S L07Eは第V層由来の砂礫を多く含む。S L07Dは第IVb相当層の黒褐色シルト質土を主体とする。S L07Cは第V層の砂礫層と第IVb相当層の黒褐色シルト質土が互層状態で確認された。S L07Bは第V層の砂礫層であるが、含まれる礫の粒径はS L07EやS L07C内の礫よりも全体的に小さい。S L07Aは第IVb相当層の黒褐色シルト質土流入した後、第V層の砂礫層が入り込んでいる。最も新しいS L07Aは、第III層面を切り込んでいることから、近世以降の浸食作用による開析と判断される。

土層断面は南北方向に設定したベルト（第21図②地点）でも観察しており、これに従えば、河川の開析時期は、第IV層の最上位である第IVa層が形成された後となる。③地点a-b間との比較で、②地点の河川（堆積土1～6層）はS L07Cに対応すると推測される。1層は第IV層粘質土の再堆積層。2層は第V層由来の砂礫に第IV層の粘質土が混在する層。3層は第IVb相当層の黒褐色シルト質土に砂礫が含まれる層。4層は第V層砂礫に黒褐色シルト質土と粘質土が混在する層。5層は主として第IVb相当層の黒褐色シルト質土で占められる層。6層は5層中に砂礫層が帯状に挟在する層。

S L07C形成段階には多くの自然木が流入しており（掘り上げられた流木は、第63図下写真参照）、その一部材の樹種同定結果については、次の第4節にまとめる。



S L07河川跡調査風景

(201001撮影、北→)

河川跡内からは、縄文土器片81点、石器・剥片類が130点が得られた。ここでは出土した縄文土器について報告し、石器・剥片類については、遺構外出土遺物の項目で一括して紹介する。

縄文土器（第24図6～15）

S L07出土の縄文土器は、第21図②地点で5層とした黒褐色～暗褐色シルト質土層内から多く確認された。14・15はS L07底面直上からの出土である。

6は、平縁で口縁上部が肥厚し、やや外反する深鉢形土器である。2本の沈線による「U」字状素文帯の外側に単節縄文RLを充填させる。7は、6から約1m離れた地点から出土した体部片であるが、6と同一個体とみられる。6・7ともに器厚5～6mm、外面の色調は黒褐色、煤状炭化物が付着している。

8は、2本の撚紐を用い一方は軸に右巻き、他方を左巻にした原体を回転施文した、網目状撚糸文とされる深鉢形土器片である。器厚7～8mm、外面の色調はにぶい黄橙である。

9は、S L07の西側、H E56第Ⅲ層出土であるが、胎土・器厚・色調から見れば8と同一個体であった可能性が高い。両者は約32m離れて出土した。

10は、鉢形土器の口縁部片であり、上部が「く」字状に短く外反する。少なくとも4条の並行する沈線が認められ、上部に単節縄文LRが残る。沈線は内面口縁下にも1条施文される。器厚5～6mm、外面の色調は暗褐～黒褐色で、内外面に煤状炭化物が付着する。

11も、鉢形土器の口縁部片である。口縁上部に3条、幅25mmの無文部下に2条の沈線が巡る。内面は横位の丁寧なミガキが認められる。器厚5～6mm、外面の色調はにぶい黄橙色である。

12は、直線的に外傾する鉢形土器の口縁部片である。8条の並行する沈線が認められ、内面口縁上端にも1条巡る。器厚5～6mm、外面の色調はにぶい黄褐色である。

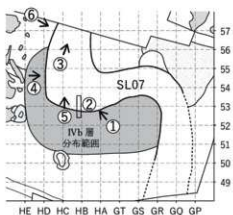
13は、鉢形土器の体部小片である。沈線の配置から、いわゆる変形工字文となるようである。沈線上に粘土粒の貼付が認められる。器厚5mm、外面の色調は赤色（現況は明褐色）、ベンガラ塗布の赤彩土器である。

14は、推定口径8.8cmの壺形土器の口縁～頸部片である。口縁上部には隆線貼付による2条の沈線が認められ、下位の沈線には径8mm程の粘土粒が付加される。沈線は内面口縁上部にも1条巡る。器厚5mm、外面の色調は黒褐色で、内外面に煤状炭化物が付着する。

15は、深鉢形土器の体部下半部片である。単節縄文LRのち体部最下半に縦位のハケメが認められる。内面は横位の丁寧なミガキである。器厚6～7mm、外面の色調は褐色、焼成良好である。15は14の南東約1m地点から出土した。

なお、各遺物の河川内での出土位置と取上番号は次のとおり。6：G T53グリッド、RP2552。7：G T53グリッド、RP2551。8：G R54グリッド、RP3873。9：RP2414。10：G R53グリッド、RP3872。11：H B55グリッド、RP3812。12：H B55グリッド、RP3834。13：H B56グリッド、RP3474。14：G T53グリッド、RP2555。15：G T53グリッド、RP2559。

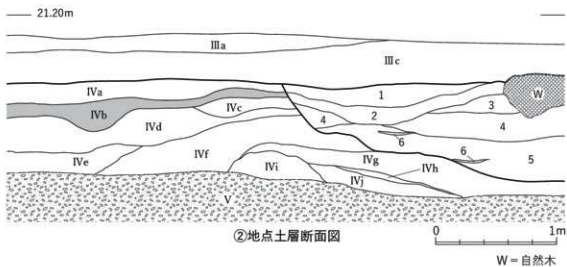
6・7は中期末、8・9は後期前葉頃、10～15は晩期末と見られる。



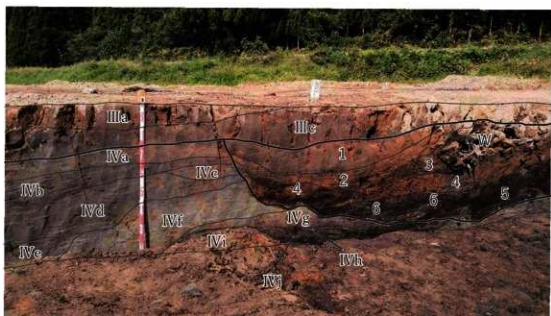
断面図作成及び写真撮影地点



①地点から (200903撮影、南東→)

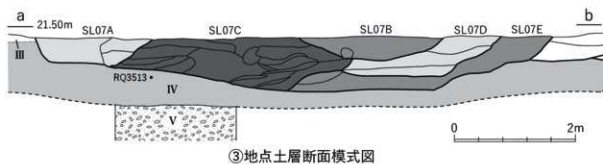


②地点土層断面図



②地点土層断面 (200930撮影、東→)

第21図 SL07河川跡(1)



第 22 図 SL07 河川跡 (2)

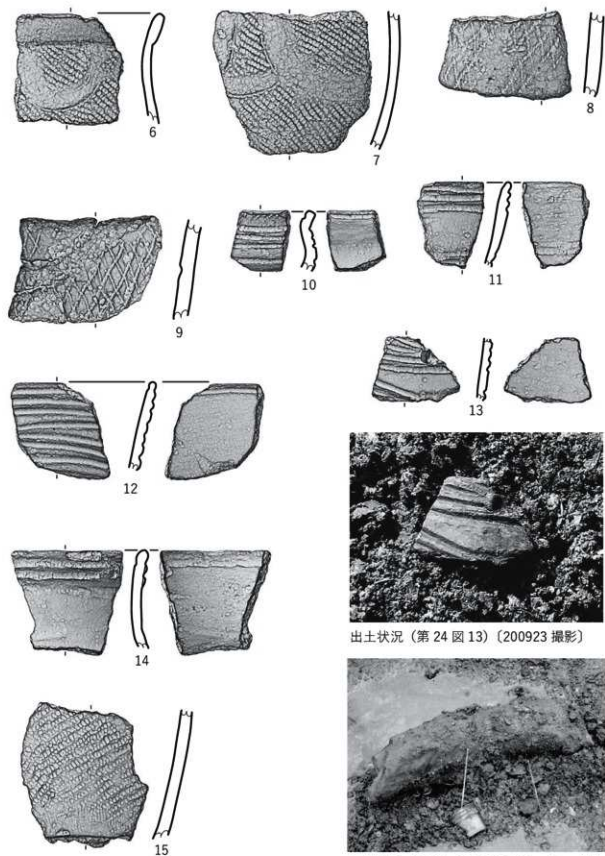


⑤地点から〔201002撮影、南→〕



⑥地点から〔201001撮影、北南→〕

第 23 図 SL07 河川跡 (3)



出土状況 (第 24 図 13) (200923 撮影)

出土状況 (手前左が第 24 図 14、奥の木材は樹種同定 No. 3 試料) (200821 撮影)

第 24 図 SL07 河川跡出土縄文土器

3 検出遺構（第11図、第25・26図）

検出された遺構は調査区西側、A1・B区の溝跡3条、土坑3基である。各遺構は表土である第1層直下で確認され、堆積土層の観察とあわせ、いずれも近世以降の構築と判断した。

SD01溝跡

B区西端、HN51・52グリッドで検出された。北東－南西方向に延び、確認できた長さは3.2m、幅は0.3～1.2m、深さは0.2mである。溝内埋土は、第III層の再堆積層と判断した。遺物は確認面上から、縄文土器片と鉄滓が出土した。

SD02A溝跡、SK02B土坑、SK02C土坑

A1区西端、HR50グリッドで検出された。当初は北西－南東方向に延びる溝跡として精査を行っていたが、その西側において別の遺構の存在が判明し、最終的には3遺構が重複していたことが確認された。出土遺物はない。

SD02Aは、確認できた長さ3.7m、幅1.25m、深さは0.3m、堆積土（1層）は第III層の再堆積土を主とし、第IV層の粘質土ブロックと炭化物を含む。

SK02Bは、SD02AとSK02Cを切り込んで構築される。径0.9m程の円形を呈し、深さは0.2mである。堆積土（2層）は、SD02Aの1層と酷似するが、第IV層粘質土ブロックの混入が1層よりも少ないことから判別された。

SK02Cは、長さ1.5m以上となるが、全体形状や規模は不明である。SK02Bに切り込まれているが、SD02Aとの重複関係は不明である。堆積土（3層）は、SK02Bの2層と酷似するが、第IV層粘質土ブロックの混入が2層よりも少ないことから分別された。

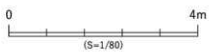
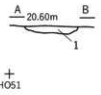
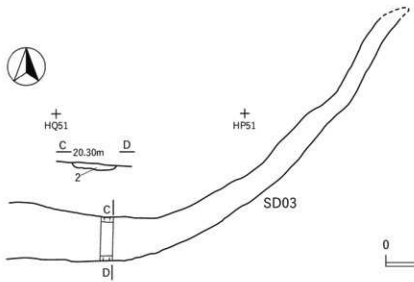
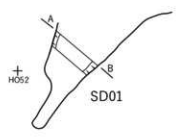
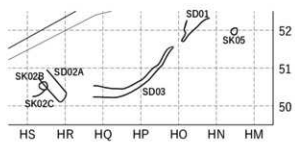
SD03溝跡

A1区中央から西側、HO～HQ50・51グリッドで検出された。北東－南西方向に延び、確認できた長さは10.5mである。幅は0.4～1.15m、深さ0.1～0.15mである。SD03北東側に隣接してSD08が位置し、本来は一連の溝であった可能性が高い。出土遺物はない。

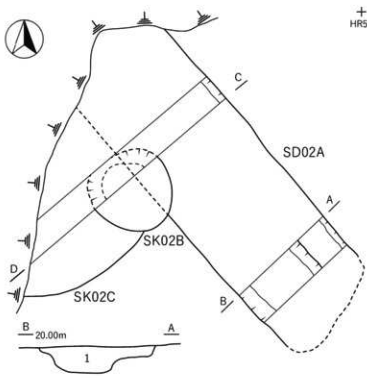
SK05土坑

B区西端、HM51・52グリッドで検出された。第1層面除去後に焼土・炭化物を含む径1m程の広がり認められ、近くから鉄滓や炉壁等も出土していたことから、当初は製鉄関連の遺構を予測していた。その規模は、南北方向の長さ80cm、東西幅65cmの略円形を呈し、深さは15cmである。堆積土は第III層由来の黒褐色シルト質土に焼土・炭化物を多く含む層（1・3層）と第IV層由来の粘質土に焼土・炭化物が少量混在する層（2層）に分けられる。1層は3層より焼土・炭化物の混入度合いがやや低い。

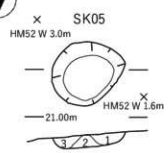
壁面内側に火熱を受けたような痕跡がないこと、出土遺物が認められないことから、当初想定していた製鉄関連の施設ではないと判断した。



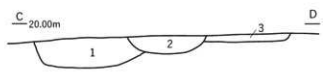
+ H551



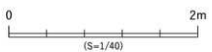
+ HR51



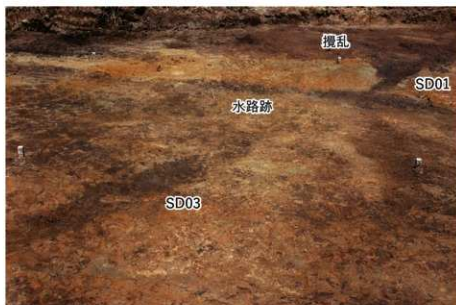
+ H550



+ HR50



第25図 検出遺構(1)



SD01・03溝跡
遺構検出状況
〔200730撮影、南→〕
SD01・03間、東西方向
の溝は旧水田の水路跡



SD02A溝跡
SK02B・C土坑
遺構検出状況
〔200717撮影、南→〕



SK05土坑
遺構検出状況
〔200915撮影、南→〕

第 26 図 検出遺構 (2)

4 遺構外出土遺物（第28図～第60図）

本遺跡から出土した遺物は、試掘調査、確認調査および表採分を含め下記のとおりである。

種別	点数	重量 (g)
石槍	1	6
石鏃	3	3
楔形石器	20	325
石筥	25	2,091
削器	85	2,802
搔器	21	1,051
石錐	3	180
鋸歯緑石器	1	20
ノッチ	12	292
石核	500	67,345
剥片	2,667	54,428
砕片	193	246
磨製石斧	3	403
敲石	24	4,731
石錘	1	493
台石	1	6,670
砥石	1	293
分割礫	76	10,471
原石	52	34,623
合計	3,689	186,483

	点数	重量 (g)
総計	4,802	212,938

種別	器種	点数	重量 (g)
縄文土器	深鉢・鉢類	352	7,509
土師器	甕	21	292
	坏	95	748
須恵器	甕	21	502
	壺	10	182
磁器	青磁	7	290
	甕	4	236
須恵器系陶器	壺	5	142
	槽鉢	16	604
土製品	土錘	1	6
近世陶磁器	碗・皿・瓶類	114	939
	槽鉢	9	349
合計		655	11,799

種別	器種	点数	重量 (g)
金属製品	鉄製品	8	531
	鉄滓	418	13,740
	銭貨	4	11
木製品	漆器椀	2	12
	箸・板状・曲物 底板など	9	118
自然遺物	馬歯	3	79
	種実	13	51
	化石	1	114
合計		458	14,656

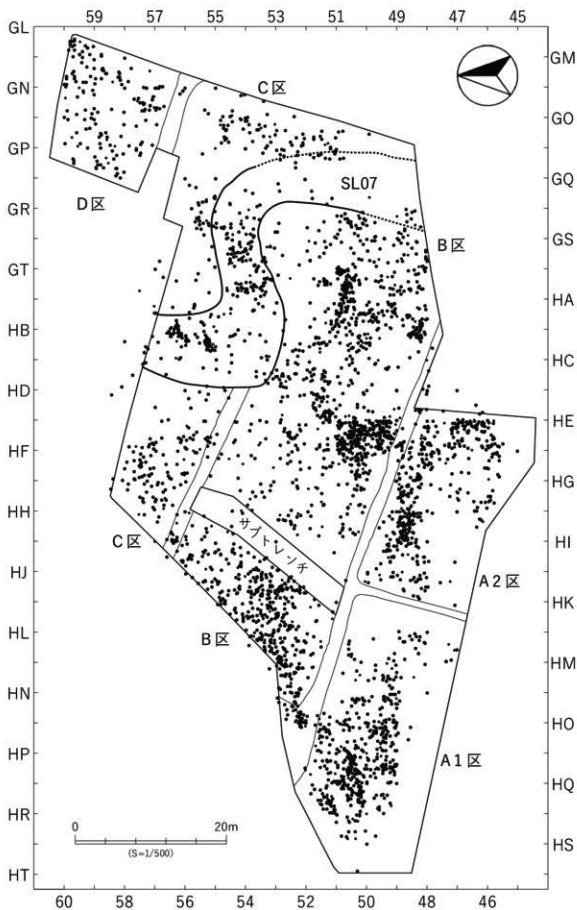
出土した遺物は、第27図に示したように調査区全域に及んでいる。これらの遺物は、前項で報告のとおり、第IVb層面から確認された縄文土器、石器を除くと、S L07河川跡内出土を含め、調査区外北側の丘陵部緑辺部からの自然流入と推測している。以下では、縄文時代の石器類、古代以降の遺物に分けて紹介する。

なお、出土の縄文土器は、第IVb層面、S L07河川跡、試掘・確認調査、表採分を除くと、第II～III層内204点、第IV層内25点を確認している。これらの多くは、流入に伴うローリングの影響等から摩滅、小片化し、器面の状態を明瞭に観察できない土器片である。このことから、縄文土器の図示は、先の第IVb層面とS L07河川跡出土で代表させることとした。遺構外の土器片の多くは、地文・胎土をみる限りでは後期前葉頃に属するようである。

(1) 縄文時代の石器類（第28図～第56図）

出土した石器類は、試掘・確認調査及び表採分を含め3,689点、重量にして186.483kgである。遺物総点数のうち石器類は、全体の77% (3,689/4,802×100≒76.8) を占める。また、礫石器類（磨製石斧、敲石、石錘、台石、砥石）・分割礫・原石を除いた石器群総数3,531点に対する剥片石器数171点の割合、すなわち剥片石器製品の保有率は4.8% (171/3,531×100≒4.84) である。

出土位置をみれば、明確に第IV層内と判断されたのは96点である。土層断面上で確認できたものとして、第22図③地点断面の剥片（RQ3513）は、S L07河川跡底面下の第IV層内出土である。



第 27 図 遺物出土地点図

石器石材については、礫石器類と原石、分割礫を除く剥片石器類3,531点のうち、鉄石英1点、黒曜石6点であり、他は全て珪質頁岩と見られる。

①石槍（第28図16）

1点のみ出土。16は、先端部・基部欠損、両面調整で平坦加工により薄く仕上げられている。緑辺が細かく鋸歯状を呈しており、そうした特徴は縄文時代草創期に見られるが、本石器が草創期に帰属するかどうかは不明である。B区中央、第18図②地点から西に約4 m、HE50グリッド第Ⅲ層出土である。

②石鏃（第28図17・18）

第Ⅳb層A地点（第19図1）分を含め3点出土。17は凸基有茎鏃、18は凹基無茎鏃である。18は鉄石英製。図左側基部が右側に比べて鋭鋭となって左右非対称であることから嘴状石器の可能性はある。鉄石英製の嘴状石器は県内でも横手市八木遺跡など縄文時代後期～晩期に多く見られる。17は表採、18はB区西端、HK53グリッド第Ⅲ層出土である。

③楔形石器（第28図19～23）

第Ⅳb層D地点（第20図5）分を含め20点出土。平面形状は、紡錘（19）・円形（20）・方形（21～23）状がある。19の紡錘状の下端部が点打面であるほかは、すべて線打面で潰れ痕があり階段状剥離が認められる。大ききからは石核ではなく、利器として用いられた可能性が高い。

④石篋（第29図24～第32図47）

25点出土。形態は短冊形、撥形、ワラジ形がある。素材は縦長～横長幅広剥片で素材剥片の主要剥離面を大きく残すものが多い。縦長剥片を素材とする場合は縦位、横長幅広剥片の場合は横位、矩形剥片の場合は縦・横位双方認められる。主要剥離面を大きく残す場合は、片面（石器正面、素材剥片の背面側）が全面加工、石器裏面（素材剥片の腹面側）が周辺加工を施しているもの（24・25等）と、裏面側に加工が及んでいない片面加工のもの（32・37）がある。剥片の湾曲が加工によって修正されず、石器縦断面が弧状を呈するものが一定量認められる。31・37のように刃部再生も見られる。刃部が未加工で素材剥片の緑辺が保持されているものがある（38・39等）。これらはトランシェ様石器として分類することも可能であり、一次剥離による鋭い緑辺を上において図示したが、ここでは石篋の一形態を含めた。



石篋出土状況（第29図24）

〔200709撮影〕

未成品も一定量存在する。珪質頁岩の採掘と石器製作が集中的に行われた山本郡三種町の上岩川遺跡群でも石筥未成品がまとまって出土しており対比可能である。上岩川遺跡群は、鹿渡Ⅱ遺跡、樋向Ⅰ遺跡、樋向Ⅱ遺跡、樋向Ⅲ遺跡、大沢Ⅰ遺跡、大沢Ⅱ遺跡の6遺跡で構成され、本遺跡の北北東約10kmに位置する。

⑤ 削器 (第33図48～第36図79)

85点出土。矩形～横長幅広剥片を素材として主に側縁側に裏面から急斜度な二次加工を施して刃部が作出される。素材剥片の形状を整えない不定形なものが多い。50は右側縁が表面から、左側縁が裏面から二次加工が施される錯交調整となっている。

⑥ 搔器 (第37図80～第38図93)

21点出土。縦長～矩形剥片を素材として、剥片端部を中心に急角度の二次加工により刃部が作出されている。刃部は直線状～弧状を呈し、石器側縁にまで加工が及ぶものもある。

⑦ 石錐 (第39図94～96)

3点出土。横長幅広く片を素材とし、端部に錐部が作出されており、つまみ部と明確に区別される銀杏形のものも多く、紡錘状のものは見られない。

⑧ 鋸歯縁石器・ノッチ (第39図97～100)

削器の一種であるが、二次加工により、二カ所以上挟りが連続するものを鋸歯縁石器(97)、一カ所のみ挟りが作出されるものをノッチ(98～100)とした。前者は図示した1点、後者は12点出土。矩形～横長幅広剥片素材である。98は石筥の破損品の刃部側に挟りが入れられノッチとして転用されたものと判断した。

⑨ 石核 (第40図101～第49図137)

石核として抽出したのは500点であり、原石・分割礫を除く出土石器の14% ($500/3,561 \times 100 = 14$)を占める。

石核は素材の違いにより、A類:礫、B類:剥片、C類:分割礫、D類:素材不明の4つに分類。A・B類ともに同程度認められる。

珪質頁岩は原石自体が片手で支えられないほど大きいものが多いため、原石をそのまま石核にするのではなく、大形厚な剥片を剥離して石核の素材とすることが多い。

同様の理由で分割礫となる場合もある。

剥片と分割礫の区別は、後者が背面に残された礫面の状態によりほぼ半割されたことが明らかなものに限定した。また、分割礫の場合、主要剥離面がポジ面やネガ面とならず、平坦になる場合が多いことも判断基準の一つとなる。

さらに、石核を剥片剥離技法の特徴により次の1～7類に分類した。

1類：両設打面石核

石核の上下両端に打面を設定。打面調整・打縁調整といった石核調整が施され、複数の石刃が剥離されている。石核調整が施されるのは原則的に1類のみである。

珪化の進んだ良質な珪質頁岩を素材としており、後期旧石器時代の所産とされても違和感がない。ただ、東北地方の珪質頁岩地帯では縄文時代草創期以降、石刃技法が連綿と続いている。本遺跡では後期旧石器時代の石器が出土していないことから、本類型の石核も縄文時代に帰属するとしても問題は無い。

2類：単設打面石核

打面作出されるものとされないものがある。寸詰まりの縦長剥片～横長幅広剥片（矩形剥片）が剥離される。

形状等からa～c類に細分。a類：サイコロ状となるものが多い。矩形剥片を連続剥離しており、石核を消耗しつくした感のあるものが目立つ。その結果としてサイコロ状となるのであろう。b類：剥片素材の主要剥離面を作業面として貝殻状剥片が連続剥離される石核も一定量認められる。これは後期旧石器時代の米ヶ森技法に類するが、東北地方日本海側の珪質頁岩地帯では縄文時代でも一般的に認められる。c類は前二者に含まれないものである。

3類：90度打面転位石核

打面が作出されるものとされないものがある。2a類と同様、矩形剥片を連続剥離するが、石核を消耗し尽くして剥片が量産される傾向にある。剥離される剥片の末端はヒンジフラクチャーとなる場合が多い。形状はサイコロ状を中心とするが多様である。

4類：求心状剥離石核

打面が作出されるものとされないものがある。石核裏面を打面、正面を作業面とし、中心に向かって連続剥離を行う。2・3類に比べより幅広で厚みのある剥片が剥離される傾向にある。剥片端部がヒンジフラクチャーになるものが一定量ある。

求心状であると認識するには本来三枚以上の剥離面が認められないと判断できないが、ここでは二枚でも剥離軸が中心に向かっているものは、90度打面転位を除いて本類型に分類した。

5類：交互剥離石核

打面が作出されるものとされないものがある。2b類や4類に近いが、打面と作業面を入れ替えながら連続的に剥片が剥離される石核で、最終形状はチョッパー（両刃礫器）状となる。剥片形態は4類と同様。

6類：単剥離石核

打面作出は行われず、一枚のみ剥離面がある石核。寸詰まりの縦長剥片～横長幅広剥片が剥離される。A類の場合、「一発コア」とも俗称され、石材の質を確認するための剥離と考えられる向きがあるが、

定かではない。黒曜石や玉髄質の珪質頁岩等にとくに特徴的に認められる。A類の場合、剥がされた剥片の背面は礫面で厚みがあり、定形的な石器素材には適さないが、例えば直径20cm以上の大形礫から剥離された大形剥片の場合は石核・石器の素材になりうる。

7類：両極剥離石核

両極打法による石核で、一般的に打面作出は行わない。楔形石器に類するため、両者の識別は困難である。「楔形石器とは何か」という問題も孕んでおり一筋縄ではいかない。ここでは、男鹿産黒曜石に見られるような小礫素材で紡錘状の形態となるものや、剥片素材で方形を呈し、両極剥離縁辺が刃部のように直線的もしくは弧状となる定形的なものを楔形石器とし、それ以外の両極打法の痕跡が認められるものを石核7類とした。剥離される剥片は薄手で主要剥離面のポジ面が発達しない縦長～幅広剥片である。

以上のように石核素材と剥片剥離技法の特徴による細分を行い、その組み合わせとして、A-1類、B-2c類・・・といった具合に石核を類型化した。下表に分類ごとの点数を示す。

分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数
A-1	2	B-2a	2	C-2	1	D-2c	2
A-2	1	B-2b	53	C-2a	2	D-3	37
A-2b	1	B-2c	24	C-2b	2	D-4	5
A-2c	14	B-3	83	C-2c	9	D-5	6
A-3	87	B-4	25	C-3	26	D類計	50
A-4	9	B-4a	1	C-4	2		
A-5	15	B-5	28	C-5	4		
A-6	9	B-6	29	C-6	7		
A-7	2	B-7	11	C-7	1		
A類計	140	B類計	256	C類計	54	総計	500

⑩剥片・碎片（第50図138～第53図170）

剥片・碎片は2,860点確認され、出土石器の78% (2,860/3,689×100=77.5) を占める。剥片と碎片は、剥離軸長（剥離方向を垂直においた場合の長さ）が2cm以上を剥片、2cm未満は碎片とした。碎片の点数は193点であった。

剥片出土状況



左：B区HN51第Ⅱ層（第51図156、黒曜石製）〔200713撮影〕 右：D区GM58第Ⅲ層〔200820撮影〕

剥片には、石刃状のもの（長幅比2:1以上で稜線と縁辺が平行）から、縦長剥片（長幅比2:1以上）、寸詰まりの縦長剥片（おおよそ長幅比1.5:1～2:1未満）、矩形剥片（おおよそ長幅比1:1）、横長幅広剥片（おおよそ長幅比1:2以上）があるが、とくに矩形、横長幅広の不定形剥片が多い。

これらの中には石筥などの両面調整体加工時に生じる調整剥片も見られることから、未成品の出土と合わせて遺跡（周辺）で二次加工が行われていたと考えて間違いないだろう。ほかに石刃核を準備するための稜付剥片もわずかだが認められる。A-1類石核と対応するものだろう。

不定形な剥片には二次加工が部分的に施される「二次加工ある剥片」や、微細な剥離痕が縁辺に認められる「微細剥離痕ある剥片」も多くみられる。二次加工ある剥片と削器の違いは、加工が連続的に（少なくとも一側縁の1/3以上）施されているか否かで区別し、1/3未満であれば二次加工ある剥片とした。微細剥離痕ある剥片は、従来「使用痕ある剥片」とされたものであるが、微細剥離が使用による刃こぼれか、その他の要因による剥離であるかは不明瞭であるため、本報告では機能を類推させない「微細剥離痕ある剥片」とした。

この他、両極打法により剥取された「両極剥片」が認められる（154・155）。両極打法による剥片の形態的特徴は、打面が線状もしくは点状で厚さが1mm以下と薄い場合が多く、バルブが発達しない反面、リングの間隔が密で凹凸が際立つ。小型薄手剥片石器の素材である可能性もあるが、利器として用いられた楔形石器の使用に伴い生じた剥片である場合も考えられる。

⑪磨製石斧（第54図171～173）

3点出土。敲打後に全面が研磨された定角式のもので占められる。すべて刃部や基部が欠損している。173は、欠損面に両極剥離痕が認められることから楔形石器への転用品と考えられる。

⑫敲石（第54図174～第56図）

24点出土。球状・砲弾状の円礫を素材とする。硬質で緻密な珪質頁岩の利用頻度が高いのが本遺跡の特徴である。敲打面は礫の両端や周縁を回るものもあり、破損品も目立ち（178）、使用頻度が高い。

⑬石錘

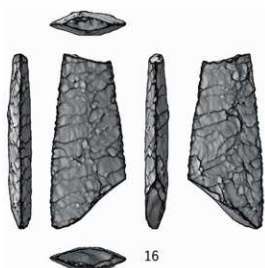
1点出土。長さ11.5cm、幅10.0cm、最大厚3.5cmの扁平な円礫の長軸端2辺に打ち欠きが認められる。重量は493g。A2区HG48グリッド第Ⅲ層出土である。

⑭砥石

1点出土。長さ16.1cm、幅4.9cm、最大厚3.5cm、重量293g、2面に砥面をもつ。確認調査トレンチK18（本調査時のD区）の第Ⅲ層出土である。

⑮台石

1点出土。長さ27.8cm、幅18.8cm、最大厚13.1cm、重量6670gである。略直方体の形状を示し、最も広い1面に砥面と敲打痕が認められる。C区GR55グリッド第Ⅳ層出土の1点である。（85頁に続く）



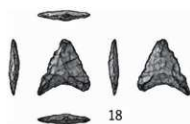
16



19

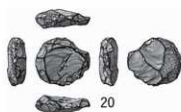


17



18

16 : 石槍
17・18 : 石鏃
19 : 楔形石器



20



21

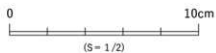


22



23

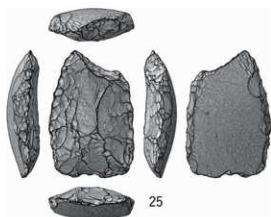
20~23 : 楔形石器



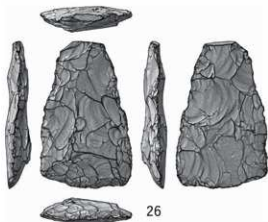
第 28 図 出土石器 (1) 石槍・石鏃・楔形石器



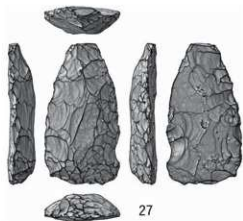
24



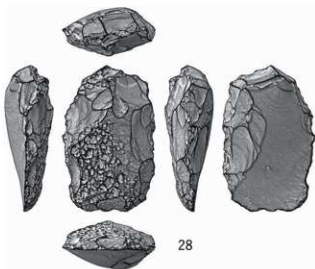
25



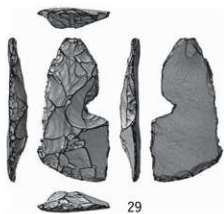
26



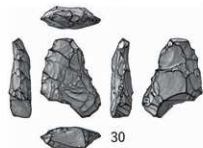
27



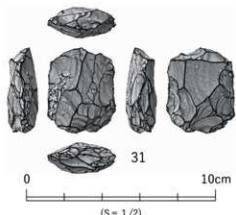
28



29



30

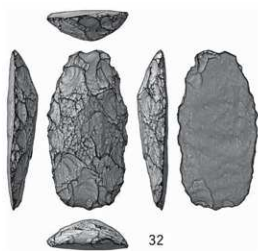


31

0 10cm

(S=1/2)

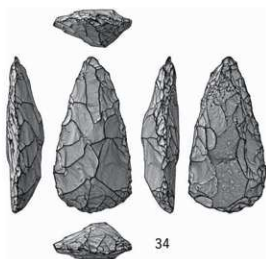
第29図 出土石器(2) 石鏡(1)



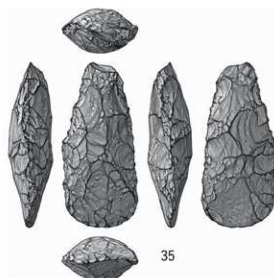
32



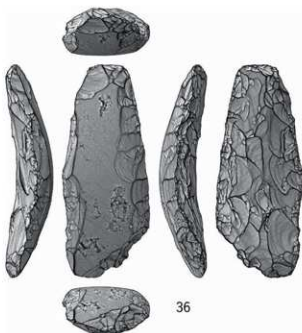
33



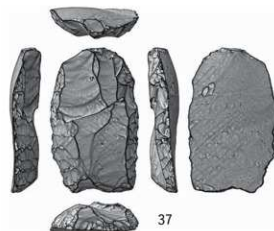
34



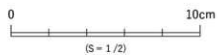
35



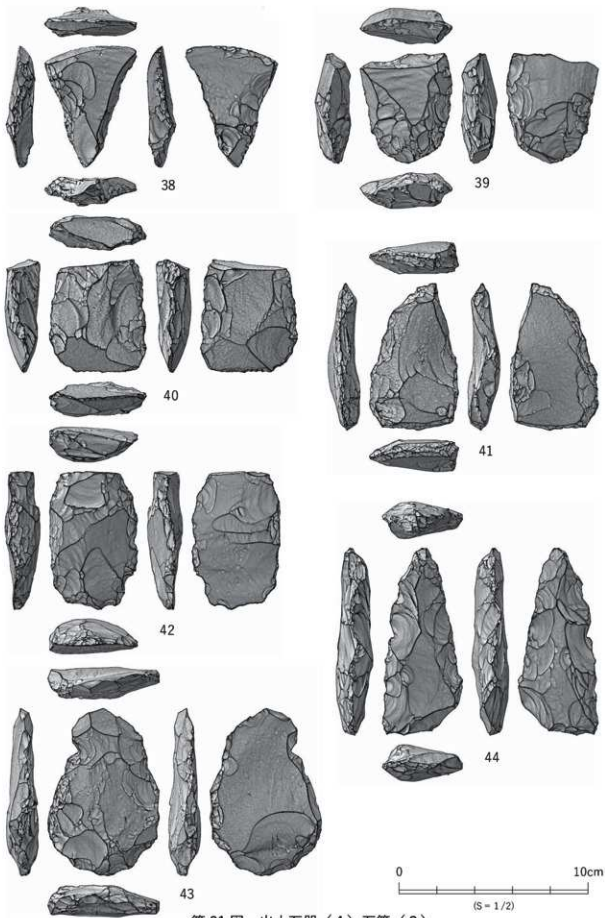
36



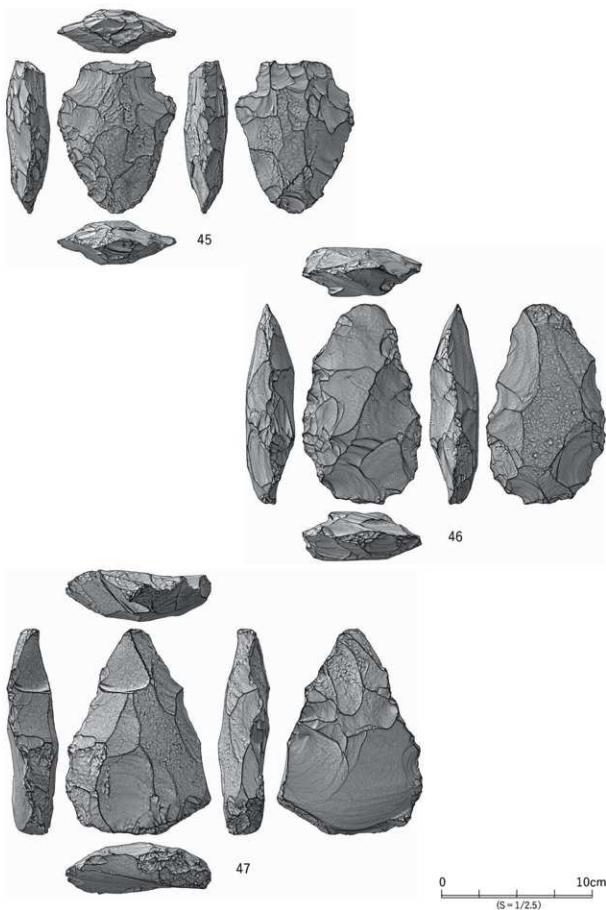
37



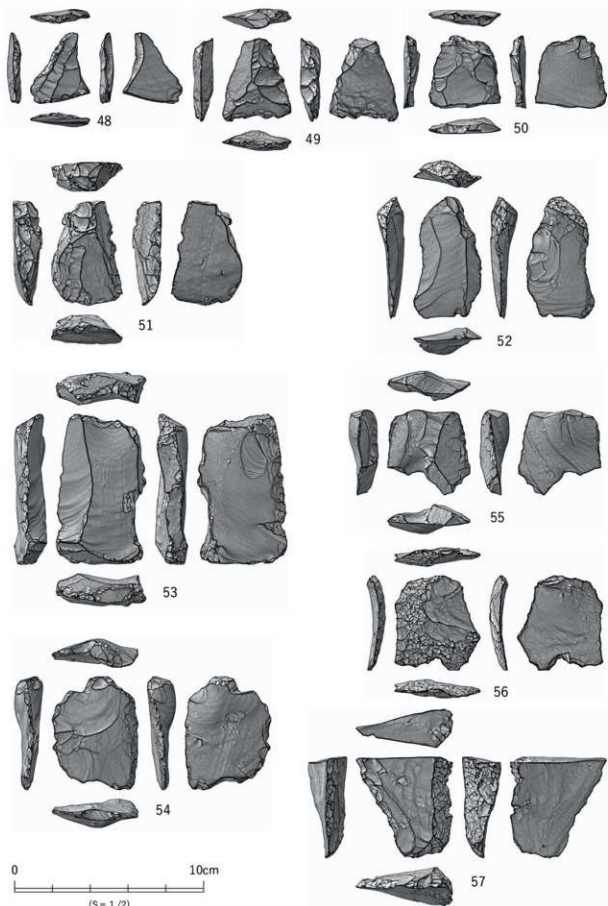
第30図 出土石器(3) 石筥(2)



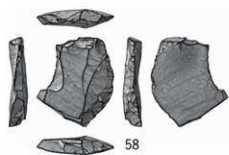
第31圖 出土石器(4) 石鏃(3)



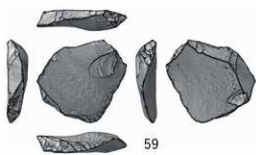
第 32 図 出土石器 (5) 石篋 (4)



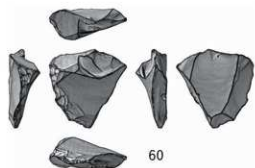
第33图 出土石器(6) 削器(1)



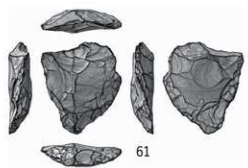
58



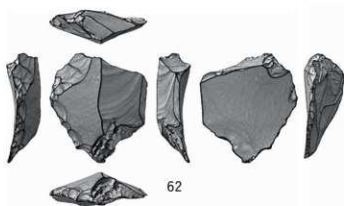
59



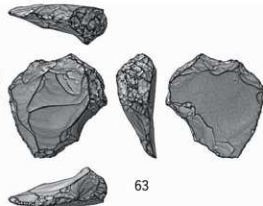
60



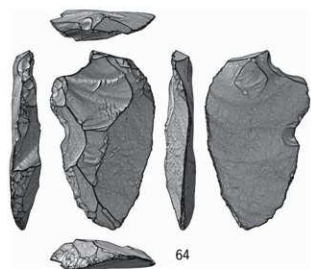
61



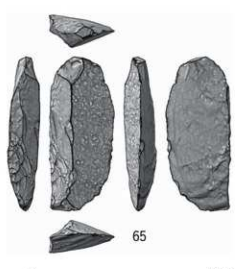
62



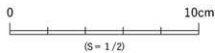
63



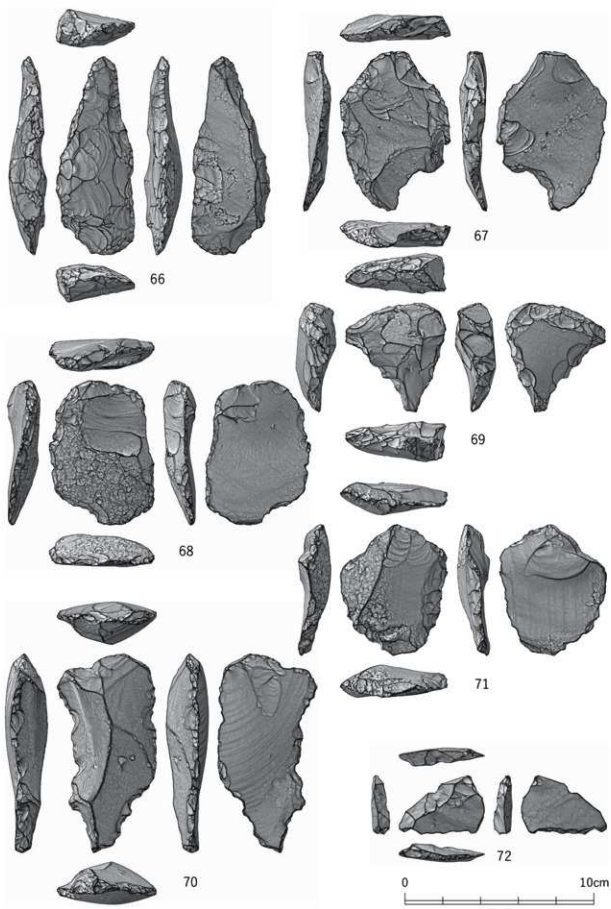
64



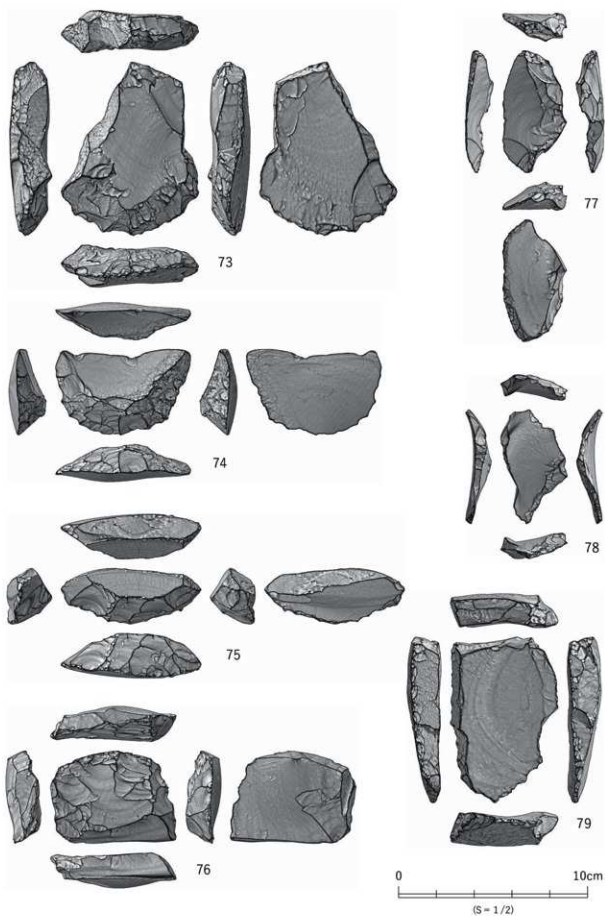
65



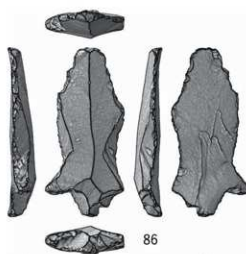
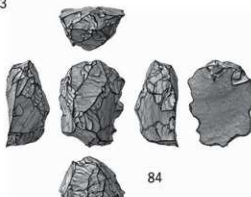
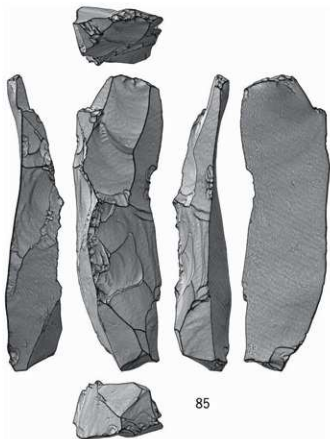
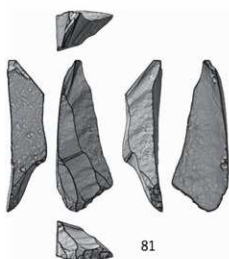
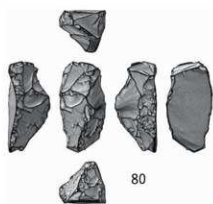
第 34 图 出土石器 (7) 削器 (2)



第35圖 出土石器(8) 削器(3)

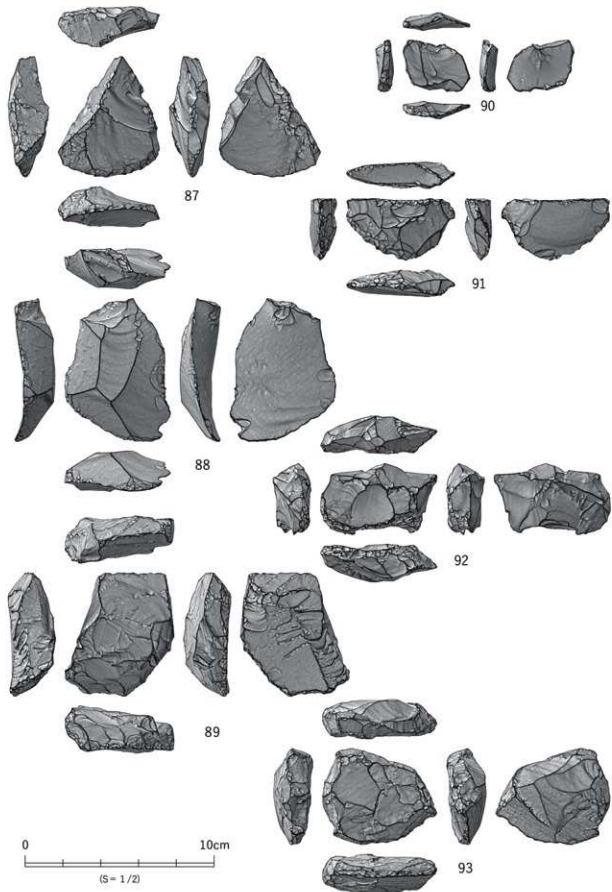


第 36 図 出土石器 (9) 削器 (4)

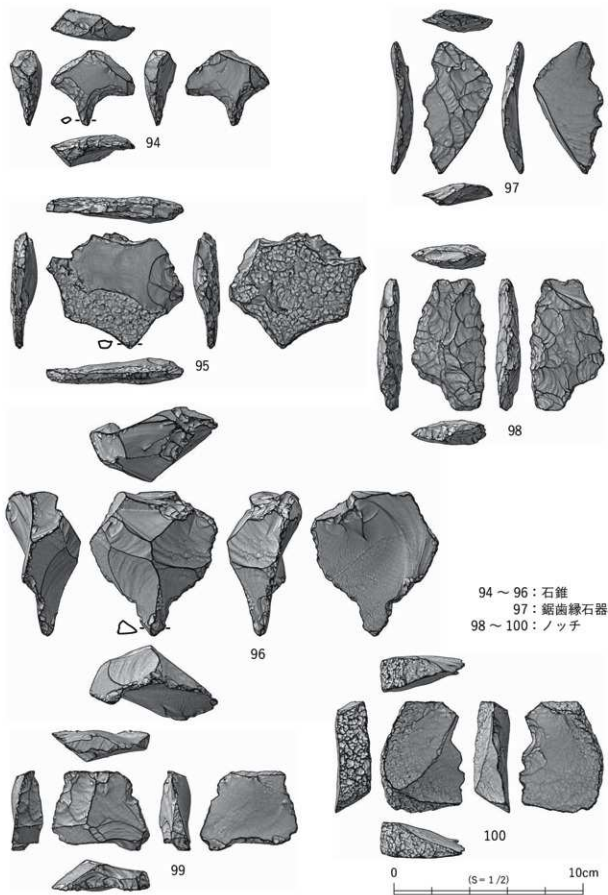


(S = 1/2)

第 37 図 出土石器 (10) 挿器 (1)

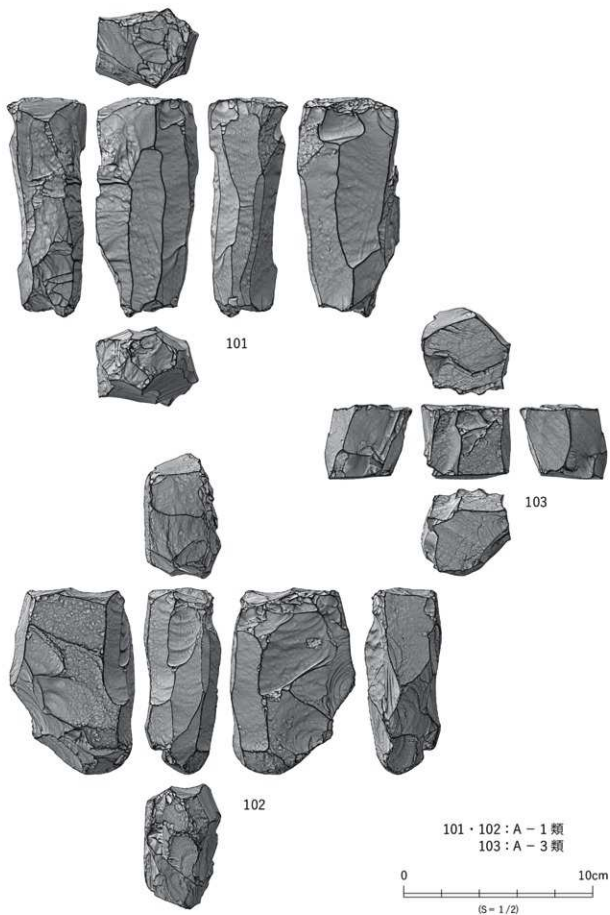


第 38 图 出土石器 (11) 搔器 (2)

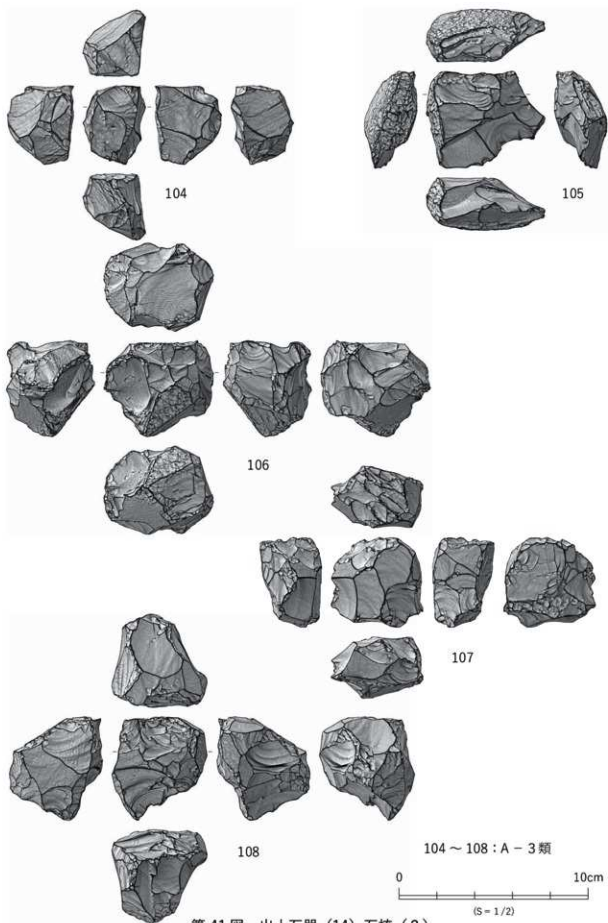


94～96：石錐
 97：鋸齒縁石器
 98～100：ノッチ

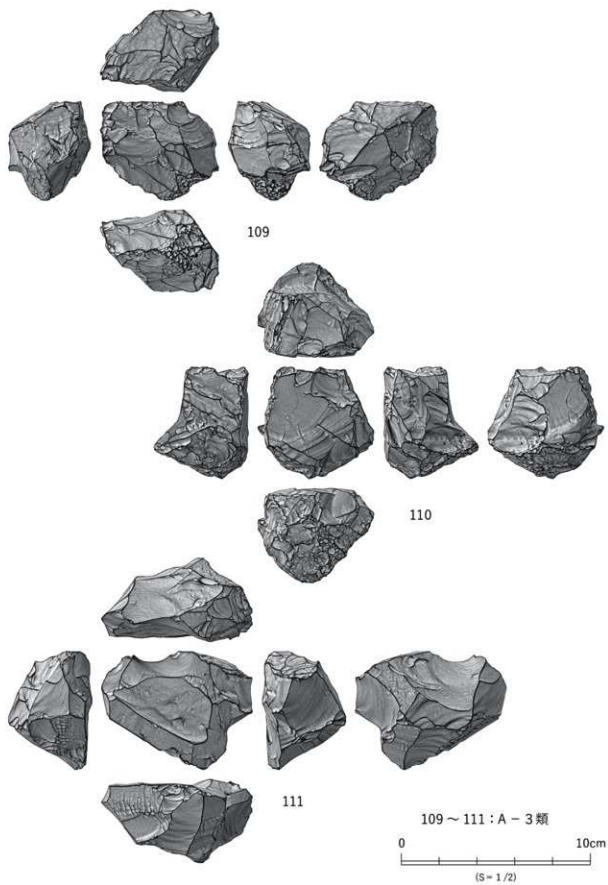
第 39 図 出土石器(12) 石錐・鋸齒縁石器・ノッチ



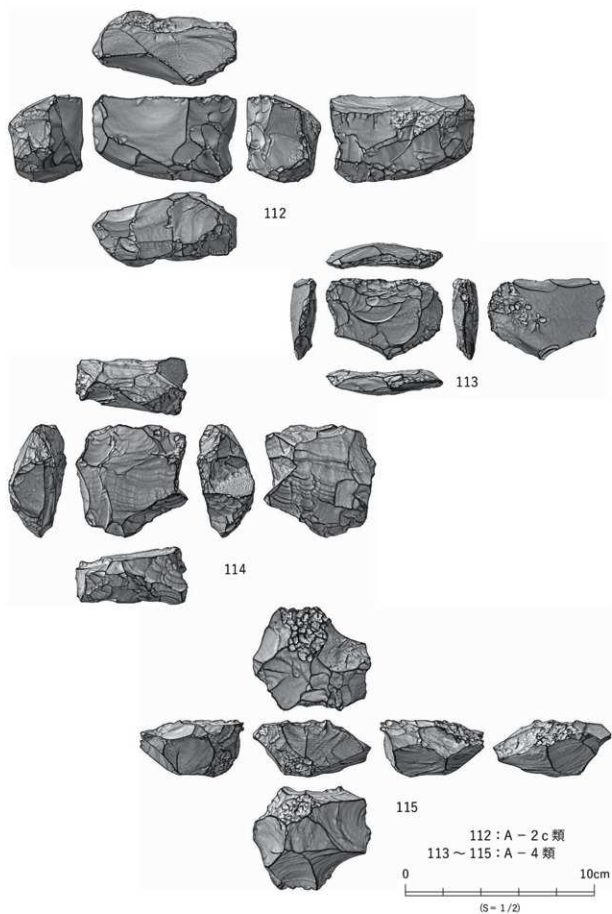
第 40 図 出土石器 (13) 石核 (1)



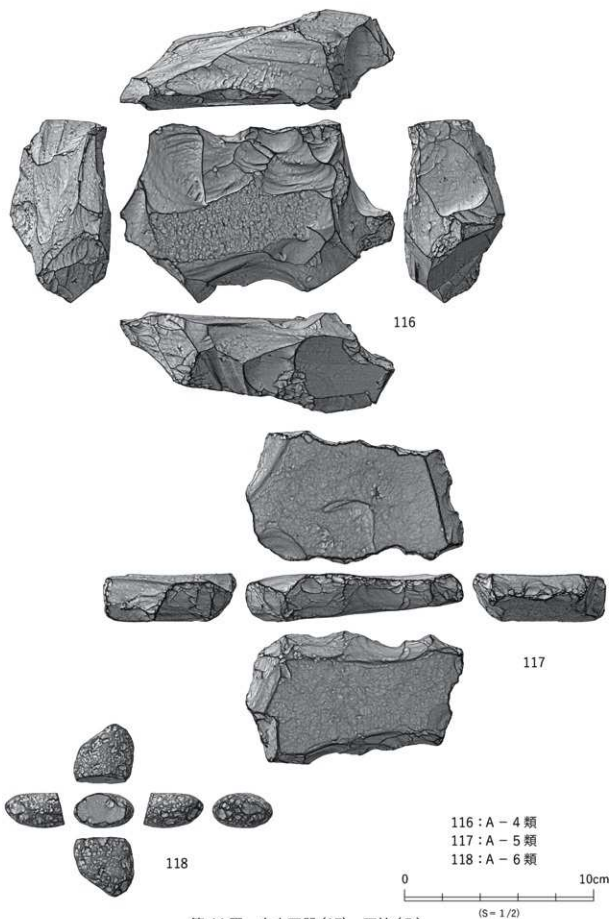
第 41 図 出土石器 (14) 石核 (2)



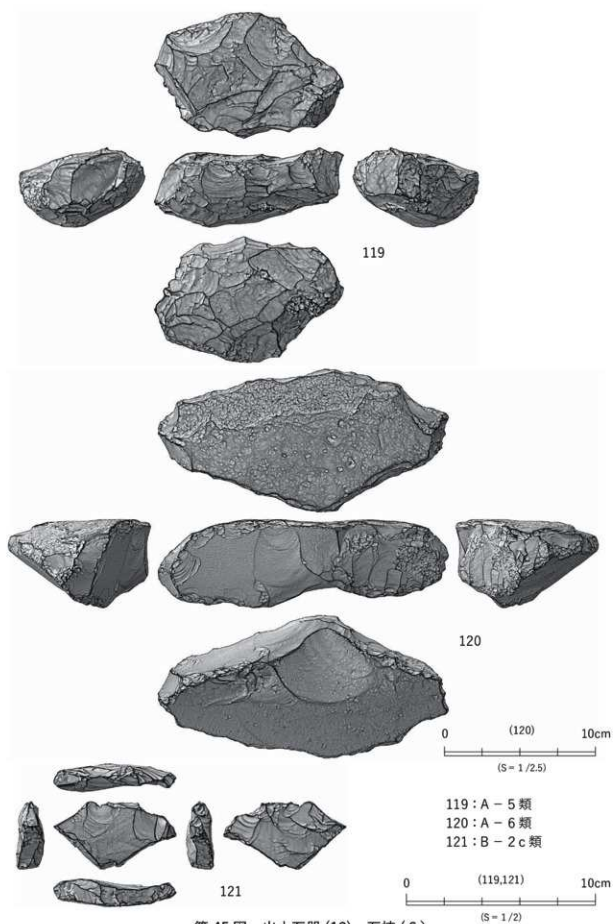
第 42 図 出土石器 (15) 石核 (3)



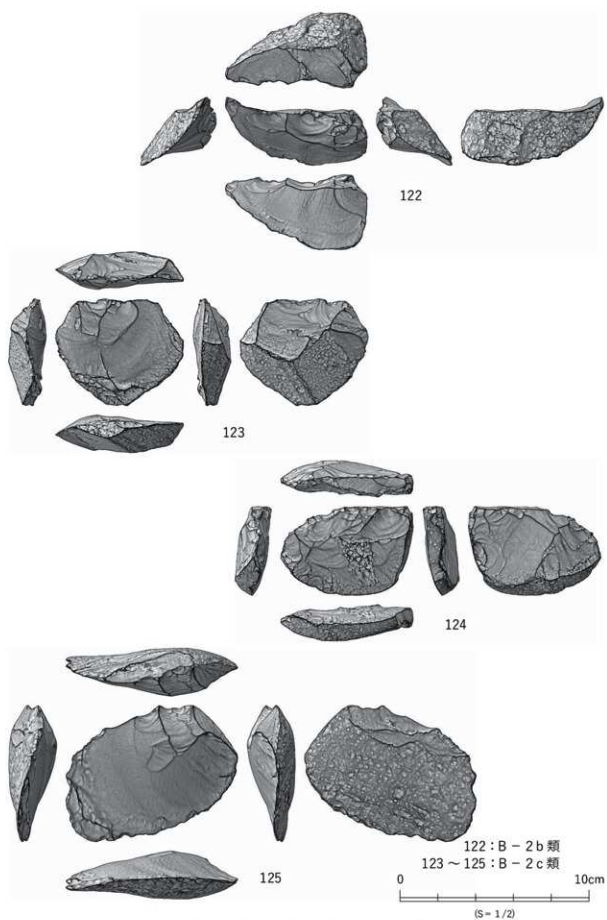
第43圖 出土石器(16) 石核(4)



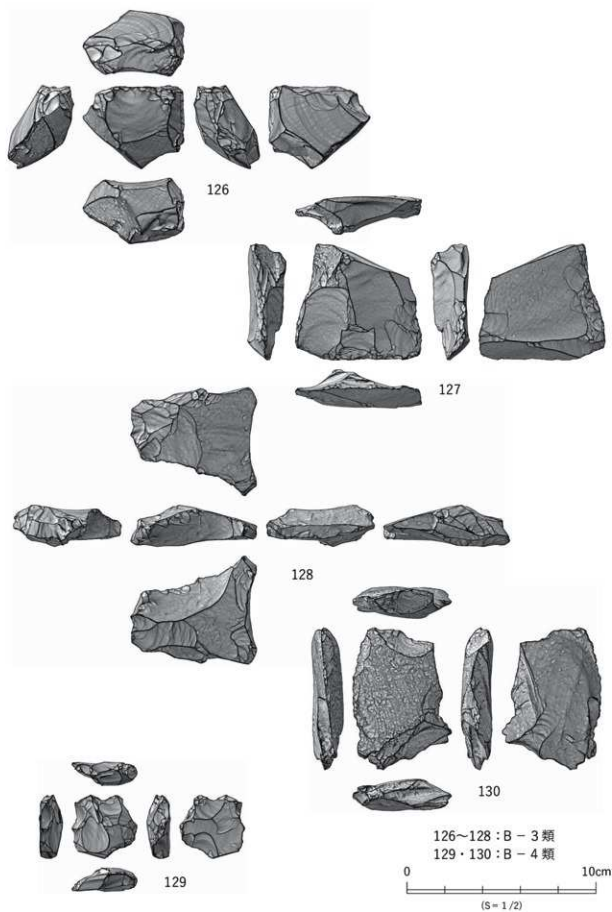
第 44 圖 出土石器 (17) 石核 (5)



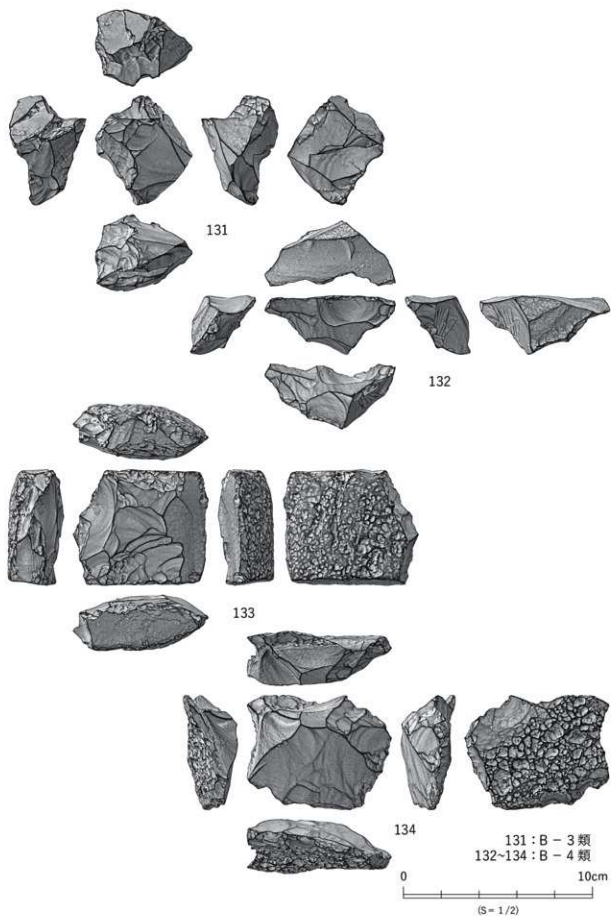
第 45 図 出土石器 (18) 石核 (6)



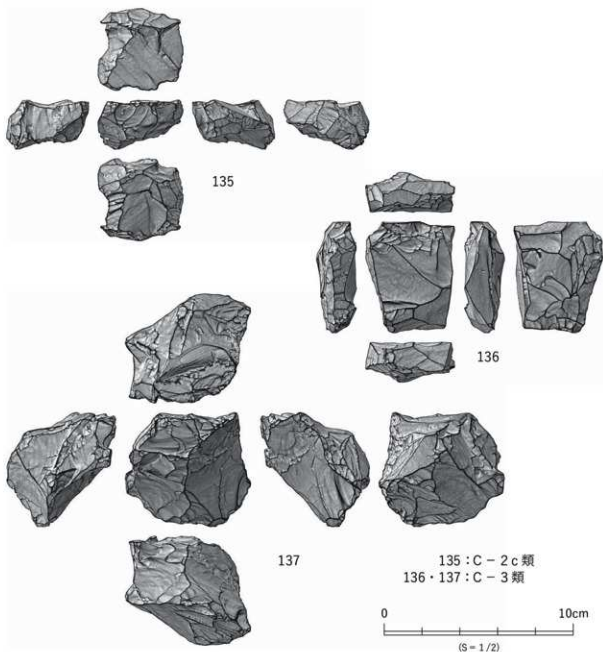
第46図 出土石器(19) 石核(7)



第47図 出土石器(20) 石核(8)



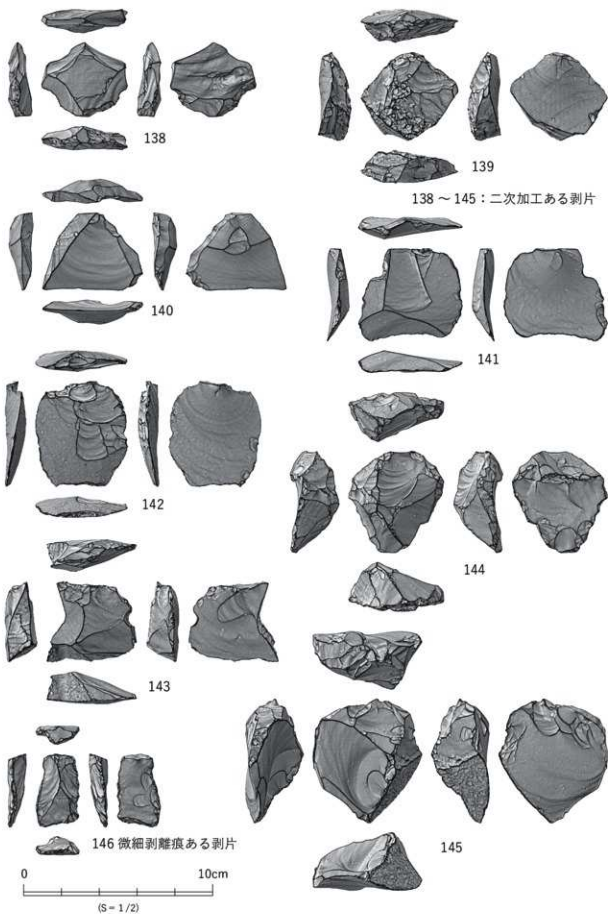
第 48 図 出土石器 (21) 石核 (9)



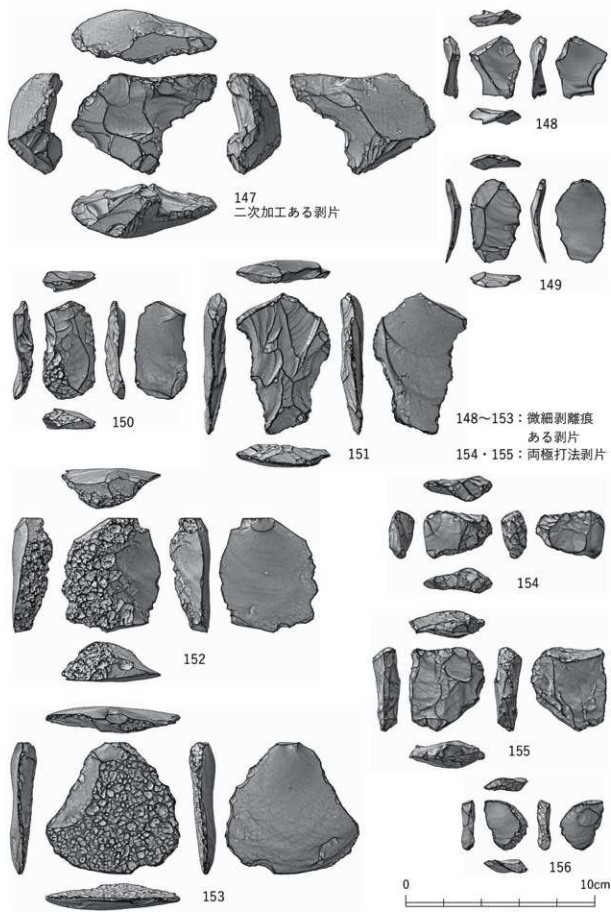
A2区HH48 グリッド
第III層面遺物出土状況
(200722撮影、東→)



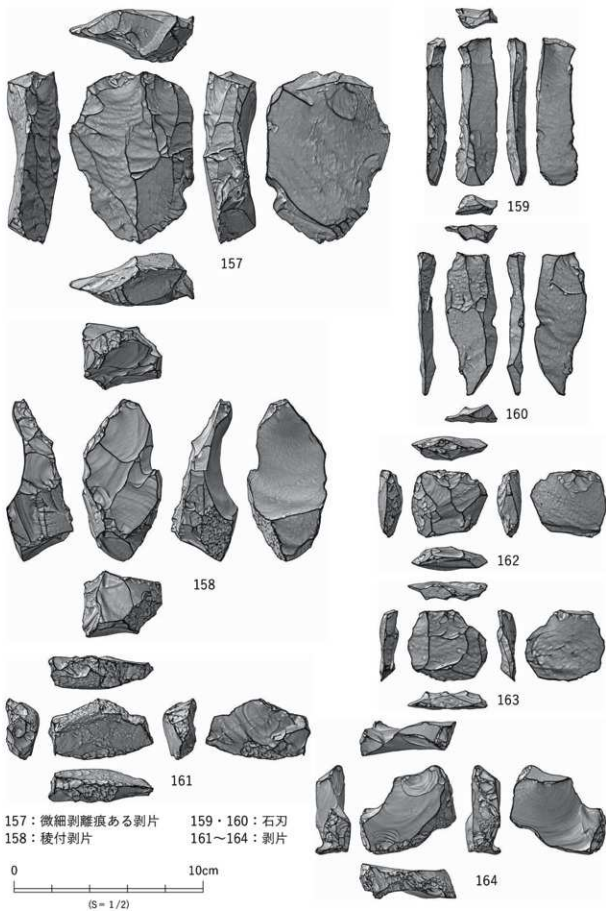
第49図 出土石器(22) 石核(10)



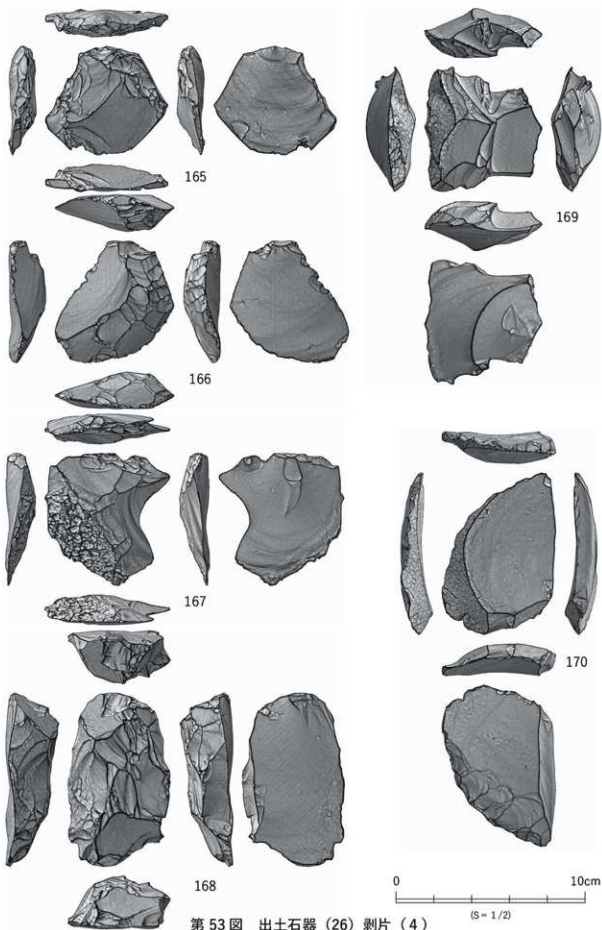
第50図 出土石器(23) 剥片(1)



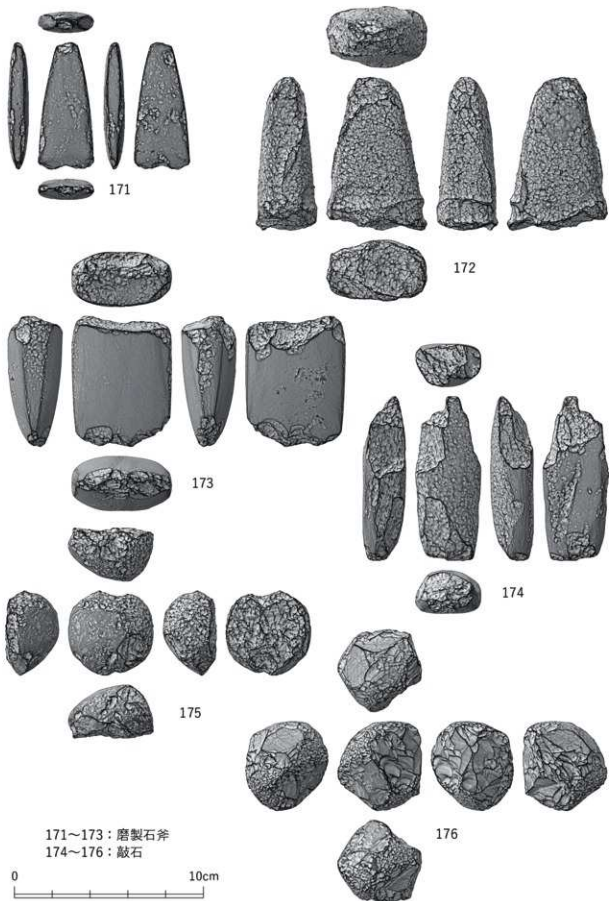
第 51 図 出土石器 (24) 剥片 (2)



第 52 図 出土石器 (25) 剥片 (3)



第 53 图 出土石器 (26) 剥片 (4)

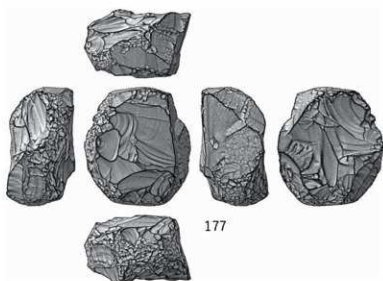


171~173: 磨製石斧
174~176: 敲石

0 10cm

(S=1/2)

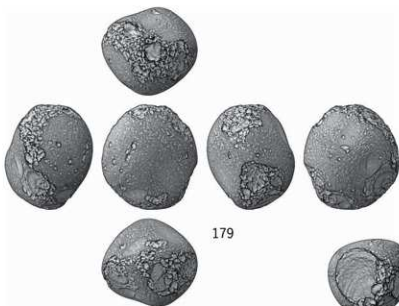
第 54 図 出土石器 (27) 磨製石斧・敲石 (1)



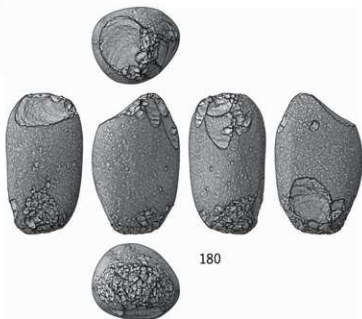
177



178



179



180



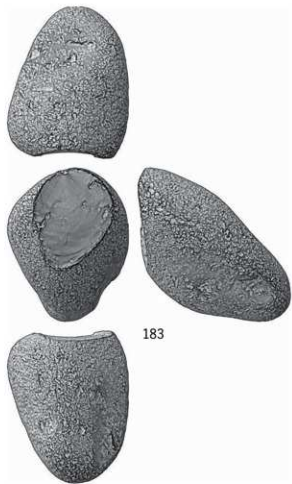
第 55 図 出土石器 (28) 敲石 (2)



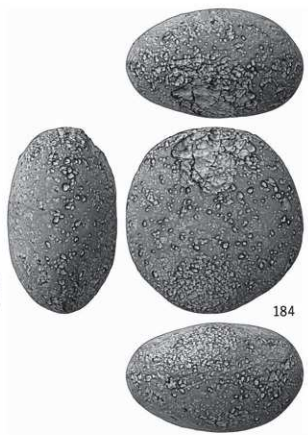
181



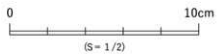
182



183



184



第 56 図 出土石器 (29) 敲石 (3)

第2表 報告書掲載石器観察表(1)

報告書 掲載番号	出土位置	層序 遺構	遺物取上 番号	器 種	法量 (mm)			重さ (g)	委託 番号	備 考	
					最大長	最大幅	最大厚				
第7図	22			石 錐	39.0	20.1	8.0	6	224	塞ノ神道跡採集	
第7図	23			石 籠	35.8	19.4	9.6	6	223		
第7図	24			楔形石器	28.6	33.2	18.4	20	225		
第19図	1	HC52	IVb	2636	石 鏃	22.6	11.3	3.5	1	53	
第20図	5	GT51	IVb	2145	楔形石器	25.8	10.4	3.6	1	52	黒曜石製
第28図	16	HE50	III	1833	石 槍	46.0	19.9	6.0	6	59	
第28図	17	表採		4978	石 鏃	22.1	8.3	4.1	1	56	
第28図	18	HK53	III	2909	石 鏃	14.2	13.4	2.3	1	54	鉄石英製
第28図	19	HJ53	III	2971	楔形石器	16.4	13.0	6.8	1	55	
第28図	20	表採		4976	楔形石器	25.2	28.6	9.7	7	62	
第28図	21	HH57	III	2777	楔形石器	22.9	28.8	9.9	8	64	
第28図	22	HB48	III	1163	楔形石器	41.8	34.0	15.7	22	91	
第28図	23	HH48	III	759	楔形石器	48.7	48.4	23.5	53	140	
第29図	24	HH56	III	328	石 籠	76.9	33.1	12.9	39	117	
第29図	25	GS51	III	315	石 籠	67.0	45.0	16.6	55	143	
第29図	26	HK52	III	3337	石 籠	77.5	48.3	13.2	47	129	
第29図	27	HE46	III	1395-1	石 籠	74.3	39.7	14.4	46	128	
第29図	28	HL48	III	868	石 籠	77.0	49.0	25.4	93	181	
第29図	29	表採		4683	石 籠	75.7	38.3	10.7	26	98	
第29図	30	GP51	III	3762	石 籠	41.7	31.6	11.5	12	70	
第29図	31	HE46	III	1388	石 籠	44.9	36.2	16.0	26	97	破損後折損面加工
第30図	32	HH56	III	338	石 籠	84.4	42.6	15.8	57	144	
第30図	33	HD52	III	2602	石 籠	89.7	33.3	13.1	44	123	
第30図	34	HE50	III	1641	石 籠	82.2	41.3	19.8	57	146	
第30図	35	HN49	III	1	石 籠	87.0	40.1	23.1	75	171	
第30図	36	HE50	III	1718	石 籠	112.0	46.0	19.4	110	189	刃部再加工
第30図	37	表採		4559	石 籠	76.2	46.5	15.2	63	155	刃部再加工
第31図	38	HM50	II	56	石 籠	63.7	48.8	14.0	34	110	トランシェ様
第31図	39	HE48	III	302	石 籠	57.8	48.5	17.9	52	137	トランシェ様
第31図	40	HH52	III	530	石 籠	59.3	51.2	17.4	53	139	トランシェ様
第31図	41	HB51	III	1797	石籠未成品	77.3	47.0	15.7	58	149	
第31図	42	HE49	III	1541	石籠未成品	72.8	46.5	18.4	70	164	
第31図	43	表採		4573	石籠未成品	88.0	58.8	16.8	81	176	
第31図	44	HO52		4974	石籠未成品	98.9	42.4	18.9	71	166	
第32図	45	表採		4973	石籠未成品	100.5	78.4	28.4	194	210	
第32図	46	GS54	SL07	2576-1	石籠未成品	132.2	78.8	32.0	312	213	
第32図	47	HK53	III	2896	石籠未成品	135.8	95.7	31.5	377	218	
第33図	48	表採		3929	削 器	37.0	31.2	6.7	7	61	
第33図	49	GT54	SL07	2463	削 器	43.8	36.1	10.1	15	76	
第33図	50	GT54	SL07	2484	削 器	38.1	37.6	8.2	11	68	鎖交剥離
第33図	51	表採		4070	削 器	55.1	37.4	15.0	34	112	
第33図	52	HE49	III	1214	削 器	63.7	35.7	13.6	21	87	トランシェ様
第33図	53	HJ54	III	2871	削 器	79.2	47.4	16.4	72	167	
第33図	54	表採		4672	削 器	59.6	45.3	14.2	33	108	
第33図	55	GS51	III	2026	削 器	44.9	43.5	14.8	23	95	

第2表 報告書掲載石器観察表(2)

報告書 掲載番号	出土位置	層序 遺構	遺物取上 番号	器 種	法量 (mm)			重さ (g)	委託 番号	備 考	
					最大長	最大幅	最大厚				
第33図	56	確認調査	K11III	5037	削器	49.8	45.1	7.2	14	75	
第33図	57	GR54	III	2206	削器	53.2	50.9	19.9	43	122	
第34図	58	HH50	III	1581	削器	47.0	40.5	9.0	17	79	
第34図	59	HF49	III	1139	削器	43.5	47.2	10.7	22	90	
第34図	60	表採		4794	削器	41.2	40.7	15.8	18	84	
第34図	61	HG56	III	3113	削器	48.2	42.3	11.9	22	92	
第34図	62	HA50	III	2071	削器	57.5	51.5	16.7	38	116	
第34図	63	HE47	III	1414	削器	54.7	52.0	20.9	43	121	
第34図	64	HA50	III	1944	削器	94.5	55.4	16.2	70	165	
第34図	65	GL58	III	3592-1	削器	81.3	34.2	15.9	45	127	
第35図	66	HH48	III	738	削器	104.6	41.4	19.7	73	170	
第35図	67	HG48	III	1352	削器	84.0	58.1	13.7	57	145	ノッチあり
第35図	68	表採		4576	削器	75.9	55.4	16.9	63	156	
第35図	69	HO49	III	391	削器	57.5	53.1	20.4	49	133	
第35図	70	表採		4609	削器	104.5	52.4	22.2	103	185	
第35図	71	HB50	III	1892	削器	69.1	56.7	16.8	53	141	
第35図	72	表採		4245	削器	30.7	45.0	9.1	10	67	
第36図	73	表採		4217	削器	91.6	72.5	21.2	143	197	
第36図	74	HE48	III	1094	削器	45.2	71.2	19.2	49	135	
第36図	75	表採		4692	削器	29.1	73.9	23.5	44	124	
第36図	76	HE49	III	1451	削器	48.6	66.3	17.4	64	159	
第36図	77	HA50	IV	1923	削器	33.5	64.2	14.0	21	88	
第36図	78	HD48	III	1114	削器	34.8	60.0	9.8	13	71	
第36図	79	表採		4001	削器	56.6	87.3	17.1	104	186	
第37図	80	HH48	III	752	挿器	47.8	24.3	21.8	23	94	
第37図	81	表採		4471	挿器	79.9	29.8	18.6	33	107	
第37図	82	HF49	III	1343	挿器	54.1	22.3	10.8	12	69	
第37図	83	HO49	III	77	挿器	38.8	32.0	14.1	18	81	
第37図	84	HE45	III	1433	挿器	45.8	34.6	21.8	39	118	
第37図	85	HD57	IV	4979	挿器	156.4	47.4	29.4	191	209	稜付石刃素材
第37図	86	GS54	SL07	3807	挿器	89.2	41.7	12.6	40	119	
第38図	87	HB57	III	2305	挿器	63.5	53.5	21.2	52	138	
第38図	88	GL59	III	3567	挿器	75.4	55.9	18.7	66	161	
第38図	89	表採		4996	挿器	65.0	57.5	23.4	92	180	
第38図	90	HB50	III	316	挿器	27.0	35.3	8.4	8	63	
第38図	91	表採		4761	挿器	32.4	57.4	14.0	28	100	
第38図	92	HB48	III	1152	挿器	37.4	61.5	19.6	45	125	
第38図	93	表採		5090	挿器	50.7	60.5	19.6	69	163	
第39図	94	HG45	III	1304	石錐	39.6	44.1	16.1	17	78	
第39図	95	HO51	II	431	石錐	61.1	72.4	13.2	49	134	
第39図	96	表採		4215	石錐	76.3	67.4	32.5	114	191	
第39図	97	表採		5055	鋸歯緑石器	69.4	36.8	8.3	20	85	
第39図	98	表採		3883	ノッチ	69.4	39.2	12.9	34	111	
第39図	99	HH49	III	690	ノッチ	41.7	51.5	15.4	33	106	
第39図	100	表採		5014-1	ノッチ	58.6	44.3	17.6	48	132	

第2表 報告書掲載石器観察表(3)

報告書 掲載番号	出土位置	層序 遺構	遺物取上 番号	器 種	法量 (mm)			重さ (g)	委託 番号	備 考	
					最大長	最大幅	最大厚				
第40図	101	表採	4975	石核 A-1類	115.8	54.2	41.6	318	214		
第40図	102	HK54	Ⅲ	3467	石核 A-1類	98.4	40.5	65.7	329	216	
第40図	103	HK54	Ⅲ	2893	石核 A-3類	39.2	46.8	41.4	114	190	
第41図	104	HG48	Ⅲ	874	石核 A-3類	41.2	33.0	34.9	48	131	
第41図	105	HE55	Ⅲ	3191	石核 A-3類	51.1	62.5	26.4	76	172	
第41図	106	HL53	Ⅲ	3183	石核 A-3類	50.5	57.8	45.3	131	194	
第41図	107	HB49	Ⅲ	2098-1	石核 A-3類	47.5	48.5	31.7	80	175	
第41図	108	表採		4604	石核 A-3類	54.6	50.2	48.1	118	192	
第42図	109	HE52	Ⅲ	919	石核 A-3類	52.1	62.6	43.2	137	196	
第42図	110	表採		4307	石核 A-3類	58.9	61.3	49.6	174	205	
第42図	111	HH56	Ⅲ	3123-1	石核 A-3類	62.5	79.8	42.1	169	202	
第43図	112	GO54	Ⅲ	3643	石核 A-2c類	45.9	76.0	38.7	160	201	
第43図	113	確認調査	K14	5022-4	石核 A-4類	59.4	59.1	27.9	107	187	
第43図	114	表採		3973	石核 A-4類	42.9	61.7	13.5	37	114	
第43図	115	表採		4753	石核 A-4類	29.8	62.2	52.5	92	179	
第44図	116	HG50	Ⅲ	349	石核 A-4類	96.6	145.1	53.2	654	220	
第44図	117	GS53	Ⅳ	2517	石核 A-5類	25.2	114.9	70.2	230	211	
第44図	118	HF48	Ⅲ	1136	石核 A-6類	18.2	31.6	29.5	21	86	黒曜石製
第45図	119	GM58	Ⅳ	3569	石核 A-5類	41.9	99.9	66.2	273	212	
第45図	120	GT53	SL07	3741	石核 A-6類	58.3	191.4	91.7	1040	222	
第45図	121	表採		5000	石核 B-2c類	35.5	64.7	14.1	30	104	
第46図	122	HB48	Ⅲ	1172	石核 B-2b類	35.8	74.8	29.6	61	151	
第46図	123	表採		3906	石核 B-2c類	56.3	67.5	18.8	61	153	
第46図	124	HP49	Ⅲ	636	石核 B-2c類	46.8	70.0	15.9	60	150	
第46図	125	GR55	Ⅲ	2270	石核 B-2c類	71.7	90.7	24.9	125	193	
第47図	126	表採		4303	石核 B-3類	43.8	53.4	28.9	72	168	
第47図	127	GS54	SL07	3793	石核 B-3類	61.2	66.7	19.9	66	162	
第47図	128	表採		4470	石核 B-3類	21.5	66.5	57.0	63	154	
第47図	129	HA50	Ⅲ	1942	石核 B-4類	33.4	34.2	12.0	13	72	
第47図	130	HE49	Ⅲ	1276	石核 B-4類	74.9	52.1	16.1	64	157	
第48図	131	表採		4165	石核 B-3類	57.6	51.1	39.9	79	174	
第48図	132	表採		4119	石核 B-4類	61.0	71.4	28.7	169	203	
第48図	133	GP51	Ⅲ	3772	石核 B-4類	30.8	68.9	28.0	42	120	
第48図	134	表採		4148	石核 B-4類	60.2	76.2	26.1	109	188	
第49図	135	表採		4020	石核 C-2c類	25.9	44.9	40.4	47	130	
第49図	136	HA56	SL07	2564	石核 C-3類	58.4	47.0	20.3	65	160	
第49図	137	表採		4994	石核 C-3類	60.2	66.3	54.1	173	204	
第50図	138	GR55	Ⅲ	2596	二次加工剥片	39.1	45.3	12.1	18	83	
第50図	139	HF50	Ⅲ	1745	二次加工剥片	46.4	51.3	15.9	37	113	
第50図	140	GM58	Ⅳ	3580	二次加工剥片	41.0	52.9	11.9	21	89	
第50図	141	表採		4238	二次加工剥片	48.6	54.9	9.8	22	93	
第50図	142	HD51	Ⅲ	2644	二次加工剥片	55.3	48.8	10.7	27	99	
第50図	143	HD49	Ⅲ	2635	二次加工剥片	42.4	47.5	16.8	30	103	
第50図	144	表採		4209	二次加工剥片	53.6	50.3	22.9	51	136	
第50図	145	GR50	Ⅲ	2044	二次加工剥片	65.5	57.5	29.2	87	177	
第50図	146	HG56	Ⅲ	3396	微細剥離痕剥片	38.3	22.9	9.6	8	65	

第2表 報告書掲載石器観察表(4)

報告書 掲載番号	出土位置	層序 遺構	遺物取上 番号	器 種	法量 (mm)			重さ (g)	委託 番号	備 考	
					最大長	最大幅	最大厚				
第51図	147	HG49	Ⅲ	295	二次加工剥片	53.3	76.6	27.7	73	169	
第51図	148	HJ53	Ⅲ	2966	微細剥離痕剥片	32.8	26.9	7.8	4	58	黒曜石製
第51図	149	表採		3919	微細剥離痕剥片	43.9	26.5	5.2	5	60	
第51図	150	HJ54	Ⅲ	3242-1	微細剥離痕剥片	51.7	27.7	9.4	14	74	
第51図	151	表採		4052	微細剥離痕剥片	74.7	49.7	11.7	37	115	
第51図	152	GL59	Ⅲ	2437	微細剥離痕剥片	60.3	52.2	20.9	57	148	
第51図	153	HE50	Ⅲ	1828	微細剥離痕剥片	69.5	70.7	13.3	57	147	
第51図	154	HH49	Ⅲ	292	剥 片	25.2	36.0	12.6	10	66	両極打法
第51図	155	HJ53	Ⅲ	2954	剥 片	44.1	39.7	12.5	24	96	両極打法
第51図	156	HN51	Ⅱ	196	剥 片	26.1	22.8	6.7	3	57	黒曜石製
第52図	157	表採		4660	微細剥離痕剥片	90.5	65.7	26.8	154	200	
第52図	158	HD51	Ⅲ	2666	剥 片	85.4	41.9	33.9	88	178	稜付剥片
第52図	159	GO58	Ⅲ	2413	剥 片	78.0	21.9	9.8	17	80	石刃
第52図	160	HD57	Ⅳ	4980	剥 片	75.2	27.4	8.8	15	77	石刃
第52図	161	GT48	Ⅲ	1059	剥 片	32.1	55.3	16.4	30	102	被熱
第52図	162	HE50	Ⅲ	1653-1	剥 片	35.2	39.9	12.6	18	82	
第52図	163	HE55	Ⅲ	3155	剥 片	37.6	41.9	9.8	14	73	
第52図	164	HP50	Ⅲ	455	剥 片	46.7	50.8	17.9	31	105	黒曜石製
第53図	165	GL59	Ⅲ	2439	剥 片	57.2	64.5	13.3	45	126	
第53図	166	GO53	Ⅲ	3674	剥 片	64.2	62.7	18.9	61	152	
第53図	167	表採		5091	剥 片	69.4	66.0	15.2	53	142	
第53図	168	GQ55	Ⅲ	2266	剥 片	91.2	53.9	27.2	132	195	
第53図	169	表採		4164	剥 片	61.6	65.6	25.6	76	173	
第53図	170	HH47	Ⅲ	286	剥 片	59.9	85.2	15.4	67	101	
第54図	171	表採		4977	磨製石斧	66.7	29.3	11.0	33	109	
第54図	172	HM52	Ⅲ	1078	磨製石斧	80.8	53.0	31.6	190	208	
第54図	173	HE45	Ⅲ	1420	磨製石斧	68.9	52.8	28.6	180	206	楔形石器に転用
第54図	174	HJ48	Ⅲ	843	敲 石	86.5	34.6	22.6	101	184	
第54図	175	HE45	Ⅲ	1429	敲 石	44.6	44.9	28.1	64	158	
第54図	176	表採		4993	敲 石	47.1	44.4	42.9	97	183	
第55図	177	HG46	Ⅲ	1297	敲 石	62.3	56.1	34.0	148	199	
第55図	178	表採		4469	敲 石	64.8	44.0	32.1	96	182	
第55図	179	HA50	Ⅲ	1909	敲 石	55.2	50.3	45.4	145	198	
第55図	180	HB54	SL07	3499	敲 石	74.0	46.1	40.4	182	207	
第56図	181	GT50	Ⅲ	1985	敲 石	76.8	61.2	54.5	357	217	
第56図	182	HA52	Ⅳ	2472	敲 石	89.0	52.0	47.9	320	215	
第56図	183	GT53	SL07	2685	敲 石	81.0	64.0	72.3	378	219	
第56図	184	HC51	Ⅳ	2658	敲 石	98.0	93.2	57.6	696	221	

⑯原石・分割礫

本遺跡が珪質頁岩産地遺跡であることを示す特徴として、調査区内において膨大な数の珪質頁岩原石が出土している。多くの原石は超円礫～亜円礫である。これらが意図的に入手されたものなのか、自然のものなのかは、二次的移動を被っているため判断しがたい。三種町上岩川遺跡群では原石の集積場所が確認されているので、本来そうした遺情があったのかもしれない。

また、原石が意図的に半割された剥離痕跡を残す分割礫が一定量存在する。これらはC類石核の素材として位置付けられる可能性があるが、これ以上の言及はできない。

(2) 古代以降の遺物 (第57図～第60図)

縄文時代以外の出土遺物には、古代の土師器・須恵器、中世の青磁・陶器・銭貨、近世の陶磁器・銭貨がある。土製品、木製品、鉄製品・鉄滓については、帰属時期を特定することができず、古代以降として次に報告する。これらの遺物は第Ⅱ～Ⅲ層内出土に限られ、S L 07河川跡及び第Ⅳ層内からの確認はない。

①土師器 (第57図185・186)

116点確認された。坏類が95点、甕類が21点である。185はD区GN57グリッド第Ⅲ層出土で、唯一全体形状が復元された坏である。推定口径13cm、器高4.7cm、底径5.3cm、底面に回転糸切り痕をもつ。体部の器厚は4mm、色調は明黄褐色を呈する。186はB区西端、H I 56グリッド第Ⅲ層出土であり、外面にタタキ目を残す甕である。内面は摩耗のため調整不明である。器厚は9～15mm、色調はにぶい黄褐色である。未報告分を含め各破片を観察する限りでは、9世紀代に属すると判断される。

②須恵器 (第57図187・188)

31点確認された。いずれも甕あるいは壺の破片であり、坏類は未確認である。うち甕2点を図示した。187はA1区、H L 50グリッド第Ⅱ層出土である。外面を平行タタキ、内面ナデ、甕破片を円盤状に再加工した可能性もある。器厚10～11mm。188はC区H E 55グリッド第Ⅲ層出土である。外面平行タタキ、内面平行アテ具痕が明瞭に認められる。器厚6～8mm。2点とも外面の色調は、暗青灰色を呈する。土師器同様に未報告分を含め、いずれも9世紀代に収まる。

③青磁 (第59図203～207)

7点確認された。いずれも中国産の青磁碗とみられる。203はB区東側G T 50グリッド第Ⅲ層出土の口縁部片である。上端がやや外反する形状を示し、内面には片影蓮華文がみられる。器厚は5mm、釉の発色は緑灰色を呈する。204は表採の体部片であり、内面に縦位2本1組の分割線が入る。器厚は5～8mm、釉の発色は暗オリーブ色を呈する。



青磁出土状況 (第59図206) (200820撮影)

205はB区西南部HM52グリッド第Ⅲ層出土であり、内外無文の高台部片である。高台部置付及びその内部は露胎であり、高台部径は5.2cm。色調は露胎部で褐灰色、軸の発色は緑灰色を呈する。

206はD区北東隅、GL59グリッド第Ⅲ層出土であり、内面見込みに片影蓮華文がみられる。高台部径5.8cm、軸の発色は灰オリーブ色を呈する。207はA1区HL49グリッド第Ⅱ層出土の高台部片である。全面施釉後に内面見込みの軸を環状に削っている。高台部置付及びその内部は露胎であり、高台部径5.3cm。色調は露胎部でにぶい黄橙色、軸の発色は灰オリーブ色を呈する。その残存形状から意図的な打ち欠きが行われたと推測される。

203～206は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で12世紀後半～13世紀前半、207は15世紀前半～16世紀代か。

④須恵器系陶器（第59図208～210）

25点確認された。甕4点、壺5点、播鉢16点である。うち3点を図示した。208はA1区HP52グリッド第Ⅱ層出土であり、外面に右下がりの平行タタキ目をもつ甕である。器厚15～20mm、色調は灰色である。外面の一部が削られ平滑となっていることから、砥石等の工具として再利用された可能性もある。209・210は播鉢である。209は表採であり、2cm幅に11本の卸目が入る。器厚9～14mm、色調は灰白色である。210はB区西南部HM52グリッド第Ⅲ層出土であり、内面全体に卸目が入り2cmあたり7本である。器厚10～17mm、色調は灰色である。時期的には13世紀以降であろうが、詳細は不明である。

⑤近世陶磁器（第60図211～213）

123点確認された。小片で器種が判然としない個体もあるが、播鉢9点、他は碗・皿・瓶類であろう。211は確認調査トレンチK7第Ⅱ層出土の瀬戸・美濃（志野焼）皿である。高台部径は推定4.8cm、色調は浅黄橙色、16世紀末～17世紀前半（大窯Ⅴ期）か。212は確認調査トレンチK12第Ⅲ層出土の肥前の皿である。見込みに砂目積み痕が4点みられる。高台部径は4.0cm、色調は露胎部が明褐色、釉薬は灰黄色である。1600～1630年代か。213はB区東側HA51グリッド第Ⅲb層下位出土（第60図写真参照）の波佐見焼小皿である。見込みに蛇目軸はぎが見られる。高台部径は4.2cm、色調は露胎部がにぶい黄橙色、釉薬は灰白色である。18世紀代（肥前Ⅳ期、1690～1780年代）。

⑥土製品（第57図189）

土製品は土師質、細管状の土鍾が1点出土した。190はB区HE49グリッド第Ⅲ層出土であり、現存長3.3cm、外径1.3～1.5cm、内径0.6～0.7cm、重量6g、色調は灰黄褐色である。帰属時期は古代あるいは中世以降としか言えない。

⑦木製品（第57図190～193）

木製品は11点確認された。漆器椀2点、棒状・管状木製品6点、板状・円盤状木製品3点である。うち次の4点を図示した。190はC区GR55グリッド第Ⅲ層出土の中実柱状高台をもつ漆器椀である。内外面に朱漆が塗布され、底径5.0cm、その厚さは1.6cmである。191はC区東側第Ⅲ層出土の箸と見られる。現存長12.5cm、厚さ・幅は0.5～0.7cm、下端部0.4cmと細くなる。5～6面に面取りされる。

192はB区東側GT49グリッド第Ⅲ層出土の箱形をなす木製品の側板であろう。長さ10.8cm、幅4.0cm、厚0.7cmである。193はD区北東隅、GM59グリッド第Ⅲ層出土の曲物底板と推定される円盤状の木製品である。復元径は9.6cm、厚さは1.0cmである。191～193はスギ材である。

⑧鉄製品（第57図194）

出土した鉄製品は8点である。多くは近代～現代の釘・鋸、火箸等と見られる。近世以前と目されるのは、雁股鐵と称される鉄鐵のみである。195はB区東側GR50グリッド第Ⅲ層出土であり、先端部が二股「Y」字形に分かれ、その内側に刃が付けられており、飛ぶ鳥や走っている獲物の足を射切るために用いられたとされる。現存する長さ5.2cm、幅2.2cm、厚さ0.8cm、重量7gである。図示面下端部断面は、略方形で一辺0.3～0.4cmである。

⑨鉄滓・炉壁（第58図195～202）

出土した鉄滓類は、試掘・確認調査、表採分を含め418点、重量にして13.740kgであった。出土層位は第Ⅱ～Ⅲ層内に限られ、全体の87%（355点／表採分を除く409点×100＝86.7）がHライン以西から得られた。詳細な分類は行っていないが、いずれも第一次工程である製鉄（製錬）に関係した鉄滓、炉壁に限られ、第二次工程となる鍛冶段階（精錬）の鉄滓は含まれていないようである。鉄滓のうち磁着するのは70点、2.717kg含まれていた。本書には、うち8点を図示（PEAKIT画像表示）した。

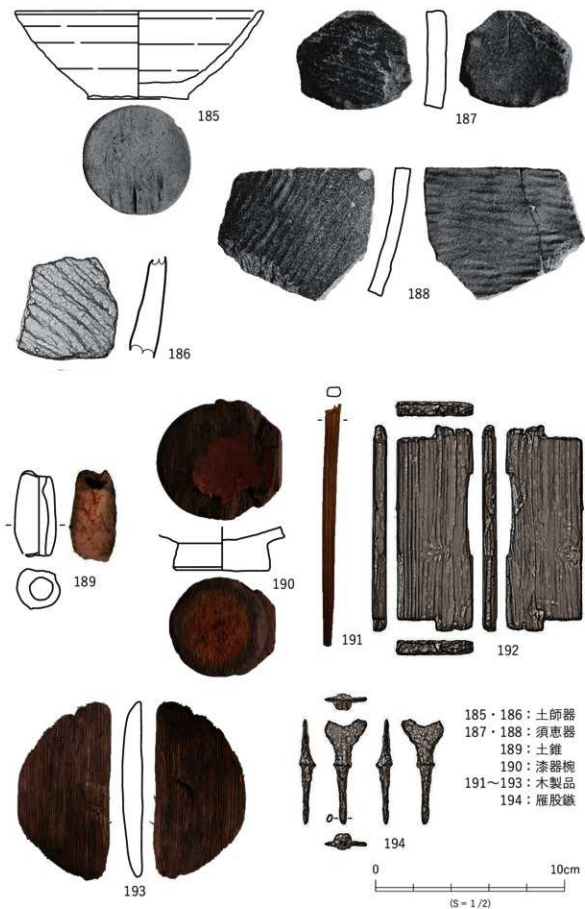
195・197・201は鉄滓のうち、炉外に排出された流出滓であり、201のc面には工具痕が認められる。196・198～200・202は炉壁である。各炉壁はa面が製鉄炉内側、c面が炉外側となる。202のf面は、意図的に打ち割られた破面であり、鉄塊を取り出す際に付された痕跡と見られる。炉壁内側には小礫混じりの砂質土が主体的に付着している。

出土位置は、195がA2区HH48グリッド、196がB区東HK54グリッド、197がA1区HP49グリッド、198がC区東GN54グリッド、199・202がD区東GM59グリッド、200がB区西HI56グリッド、201がB区東HL52グリッドであり、いずれも第Ⅲ層内出土である。

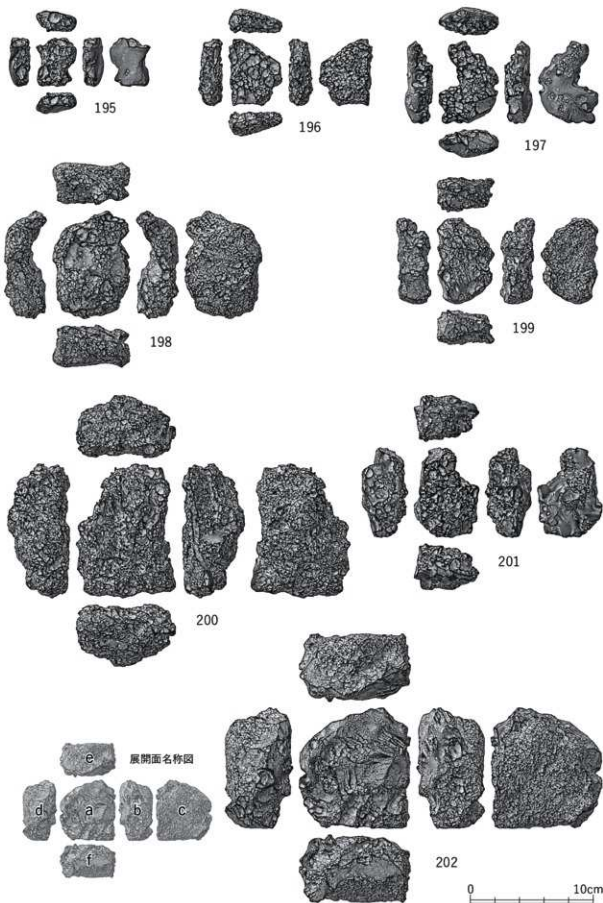
⑩銭貨（第60図214～217）

4点出土した。214は、C区HD55グリッド第Ⅲ層出土の「元豊通寶」である。外径24～25mm、銭厚は1.1mm、215～217は「寛永通寶」である。215はB区GS52グリッド第Ⅲ層出土で外径23mm、銭厚は0.9mm。216はA1区HN50グリッド第Ⅱ層出土で外径23mm、銭厚は1.1mm。217はB区HI53グリッド第Ⅲ層出土で外径28mm、銭厚は0.8mmである。

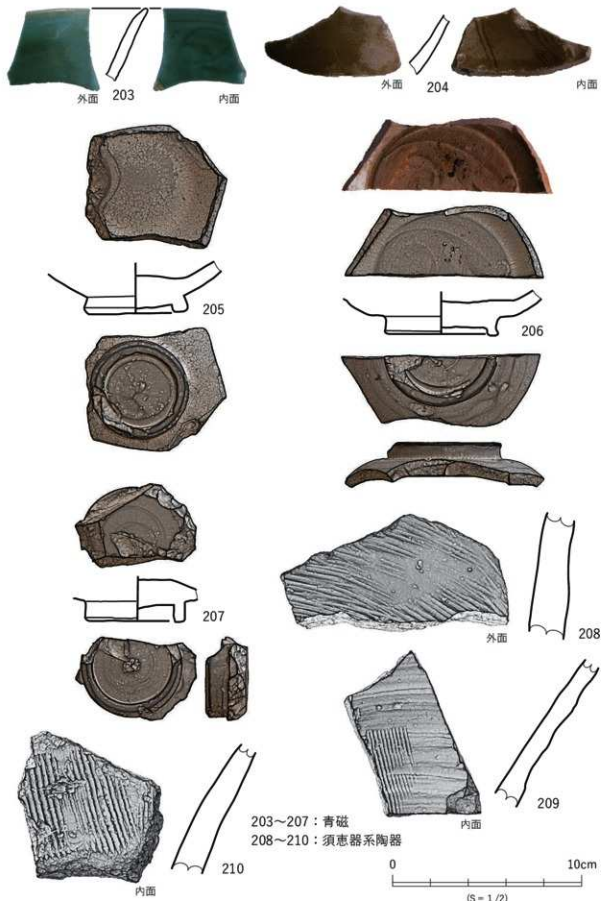
元豊通寶は中国北宋1078年を初鑄とする渡来銭であるが、銭厚や裏面の摩耗状態からみれば、中国銭を日本国内で鑄写した模鑄銭の可能性が高い。



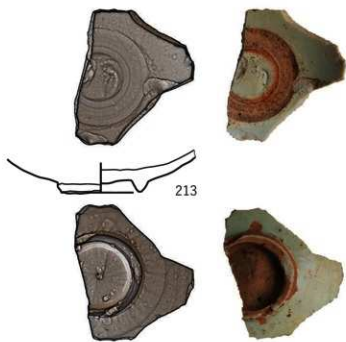
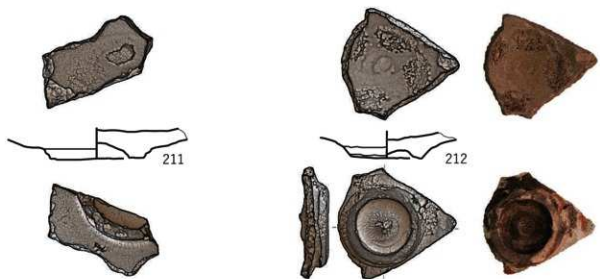
第 57 図 古代以降の出土遺物 (1) 土師器・須恵器・土製品・木製品・鉄製品



第 58 図 古代以降の出土遺物（2）鉄滓・炉壁



第 59 図 古代以降の出土遺物 (3) 青磁・須恵器系陶器



0 (211~213) 10cm
 (S-1/2)



左図(第60図213)遺物出土状況(200817撮影)

(214~217:原寸)



第60図 古代以降の出土遺物(4) 陶磁器・銭貨

第4節 樹種同定

出土材の樹種同定は、秋田県立大学木材高度加工研究所助教の工藤佳氏に依頼し、その組織構造観察を行った結果を次に掲載する。

1 方法

のみとカッター、金づちを用いて、試料から小ブロックを採取した。かみそりを用いて、木口面、柾目面、板目面ができるように小ブロックをトリミングした。スライディングマイクロームを用いて30～120 μm厚の木口面、柾目面、板目面切片をそれぞれ作製し、ガムクロラールで封入した。光学顕微鏡を用いて解剖学的特徴を観察し、写真を撮影した。光学顕微鏡レベルの解剖学的な観察からは主に属レベルまで樹種を同定することが可能である。組織観察と森林総合研究所の日本産材木材データベース (<http://f030091.ffpri.affrc.go.jp/>) を用いて、樹種を同定した。解剖学的特徴や用語の表記は、広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト、針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リストに従い、分類群は APG 植物分類法に従った。

2 結果

調査を行った14点のうち、同定不能(No.11)の1点を除く13点の樹種同定の結果、マツ科モミ属(1点)、ムクロジ科カエデ属(1点)、カバノキ科クマシデ属クマシデ節(1点)、カバノキ科クマシデ属イヌシデ節(1点)、ブナ科クリ属(3点)、カツラ科カツラ属(1点)、ウコギ科ハリギリ属(1点)、ニレ科ケヤキ属ケヤキ(4点)が同定された。識別結果を下表にまとめた。また、識別根拠は下記の通りである。

試料番号	識別番号	樹種識別結果	試料採取日
HA53 SL07 200821	1	カツラ科カツラ属	2020年8月26日
HA53 SL07 200821	2	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	2020年8月26日
GT53 SL07 200821	3	ウコギ科ハリギリ属	2020年8月26日
HA53 SL07 200821	4	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	2020年8月26日
HA53 SL07 200821	5	ムクロジ科カエデ属	2020年8月26日
HB55 SL07 201007	6	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	2020年10月7日
HB55 SL07 201007	7	カバノキ科クマシデ属イヌシデ節	2020年10月7日
HC53 SL07 201007	8	ブナ科クリ属クリ	2020年10月7日
GS53 SL07 201007	9	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	2020年10月7日
GR54 SL07 201007	10	ブナ科クリ属クリ	2020年10月7日
GS53 IVb層 201007	11	同定不能(樹皮)	2020年10月7日
HB53 SL07 201007	12	ブナ科クリ属クリ	2020年10月7日
GT54 SL07 201007	13	カバノキ科クマシデ属クマシデ節	2020年10月7日
HG55 IV層 201007	14	マツ科モミ属	2020年10月7日

(1) モミ属 *Abies*; マツ科 Pinaceae (第61図 写真①~③)

針葉樹材。垂直および水平樹脂道は認められなかった。仮道管にらせん肥厚は認められなかった。放射仮道管は認められなかった。放射柔細胞の壁は厚く、じゅず状末端壁が認められた。分野壁孔は、スギ型で1~4個/分野であった。また、放射組織の上下辺縁部には、不規則な形の放射柔細胞が認められた。

(2) カエデ属 *Acer*; ムクロジ科 Sapindaceae (同写真④~⑥)

広葉樹散孔材。道管は単せん孔を持ち、道管相互壁厚は交互状であった。道管要素にらせん肥厚が認められた。放射組織は1~5列でほぼ同性であった。

(3) クマシデ属クマシデ節 *Carpinus* sect. *Distegocarpus*; カバノキ科 Betulaceae (同写真⑦~⑨)

広葉樹散孔材。道管は階段せん孔を持ち、段数は10以下であった。道管相互壁孔は交互状で、道管要素にらせん肥厚が認められた。放射組織は1~3列で、同性~異性(多列部平伏細胞、辺縁部1直立/方形細胞高)であった。放射柔細胞中に結晶が認められた。

(4) イクマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus*; カバノキ科 Betulaceae (同写真⑩~⑫)

広葉樹散孔材。道管は単せん孔を持ち、道管相互壁孔は交互状であった。放射組織は1~3列で、同性~異性(多列部平伏細胞、辺縁部1直立/方形細胞高)であった。放射柔細胞中に結晶が認められた。

(5) クリ属 *Castanea crenata*; ブナ科 Fagaceae (同写真⑬~⑮)

広葉樹環孔材。道管は単せん孔を持ち、孔圏外道管は火炎状に配列していた。放射組織は単列、同性ですべて平伏細胞であった。

(6) カツラ属 *Cercidiphyllum*; カツラ科 Cercidiphyllaceae (同写真⑯~⑲)

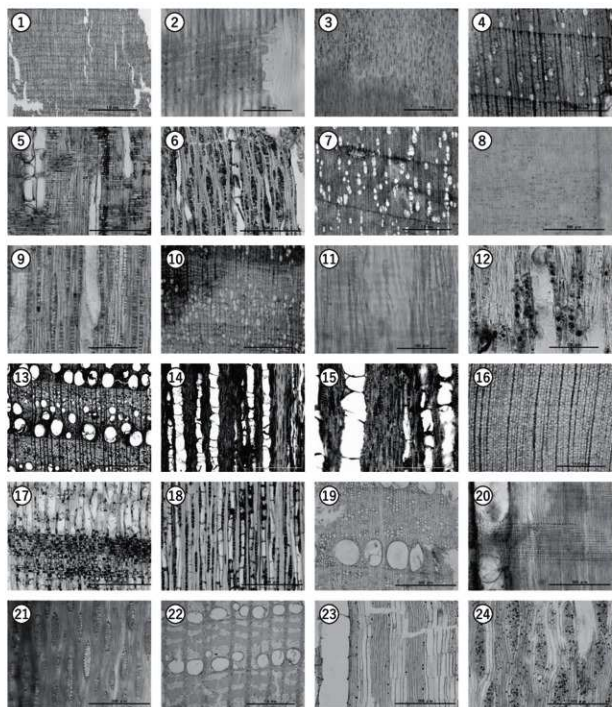
広葉樹散孔材。道管は階段せん孔で、段数は20~40であった。道管相互壁孔は階段状であった。放射組織は1~3列であり、多列部平伏細胞、辺縁部2~4直立/方形細胞高であった。

(7) ハリギリ属 *Kalopanax*; ウコギ科 Araliaceae (同写真⑳~㉑)

広葉樹環孔材。道管は単せん孔を持つ。孔圏道管は単列であった。孔圏外道管は接線状に配列し、らせん肥厚は認められなかった。大きな放射組織は普通4~10列で、多列部平伏細胞、辺縁部1直立/方形細胞高であった。

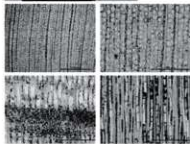
(8) ケヤキ属ケヤキ *Zelkova serrata*; ニレ科 Ulmaceae (同写真㉒~㉓)

広葉樹環孔材。道管は単せん孔を持つ。孔圏道管は、主に単列であった。孔圏外道管は接線状、斜線状に配列し、らせん肥厚が認められた。大きな放射組織は普通4~10列であり、異性(多列部平伏細胞、辺縁部1直立/方形細胞高)であった。放射組織の上下端の細胞に結晶が認められた。



第 61 図 出土材の顕微鏡写真

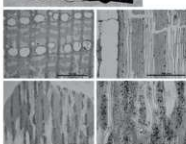
試料番号：No.1 HA53 SL07 200821
 識別結果：カツラ科カツラ属



・広葉樹環孔材
 ・道管は散孔状をもち (径20~40)
 ・道管は広葉樹は散孔状
 ・マクロニスあり → 放射線維は1~2列で異性

No.1

試料番号：No.2 HA53 SL07 200821
 識別結果：ニレ科ケヤキ属ケヤキ



・広葉樹環孔材
 ・道管は半せん孔を持つ → 小道管にらせん肥厚あり
 ・放射線維は異性、上下辺縁部に結晶を含む細胞あり

No.2

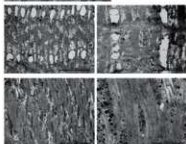
試料番号：No.3 GT53 SL07 200821
 識別結果：ウコギ科ハリギリ属



・広葉樹環孔材
 ・道管は半せん孔を持つ → 小道管にらせん肥厚なし
 ・放射線維は異性

No.3

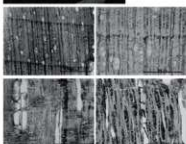
試料番号：No.4 HA53 SL07 200821
 識別結果：ニレ科ケヤキ属ケヤキ



・広葉樹環孔材
 ・道管は半せん孔を持つ → 小道管にらせん肥厚あり
 ・放射線維は異性、上下辺縁部に結晶を含む細胞あり

No.4

試料番号：No.5 HA53 SL07 200821
 識別結果：ムクロジ科カエデ属



・広葉樹環孔材
 ・道管は半せん孔を持つ → 道管基部にらせん肥厚あり
 ・放射線維は異性

No.5

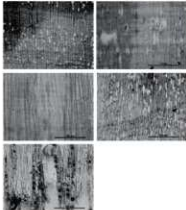
試料番号：No.6 HB55 SL07 201007
 識別結果：ニレ科ケヤキ属ケヤキ



・広葉樹環孔材
 ・道管は半せん孔を持つ → 小道管にらせん肥厚あり
 ・放射線維は異性、上下辺縁部に結晶を含む細胞あり

No.6

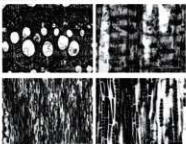
試料番号：No.7 HB55 SL07 201007
 識別結果：カバノキ科クマシダ属イヌシダ節



・広葉樹散孔材
 ・道管は半せん孔を持つ → 道管相互環孔は交互状
 ・道管基部全体にらせん肥厚あり → 放射線維は1~3列
 ・放射線維は同性ないし異性で多列層平状細胞で
 高維管化(立)の細胞あり → 放射線維中に結晶あり

No.7

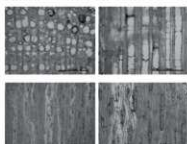
試料番号：No.8 HCS3 SL07 201007
 識別結果：ブナ科クリ属クリ



・広葉樹環孔材
 ・道管は半せん孔を持つ → 孔間外道管は大英状に配列
 ・放射線維は同性で単列
 (材色は黒色であった)

No.8

試料番号：No.9 GS53 SL07 201007
 識別結果：ニレ科ケヤキ属ケヤキ

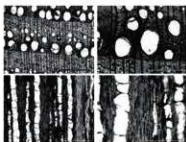


・広葉樹環孔材
 ・道管は半せん孔を持つ → 小道管にらせん肥厚あり
 ・放射線維は異性、上下辺縁部に結晶を含む細胞あり

No.9

第 62 図 樹種同定結果 (1)

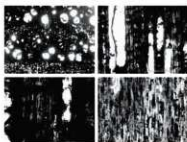
試料番号：No.10 GR54 SL07 201007
 識別結果：ブナ科タリ属タリ



- ・広葉樹類木材
- ・透管は草せん孔を持つ → 孔間外透管は大夫状に配列
- ・放射線維は同径で単列
 (材色は黒色であった)

No.10

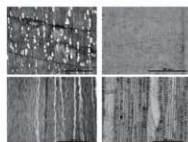
試料番号：No.12 HB53 SL07 201007
 識別結果：ブナ科タリ属タリキ属ケヤキ



- ・広葉樹類木材
- ・透管は草せん孔を持つ → 孔間外透管は大夫状に配列
- ・放射線維は同径で単列
 (材色は黒色であった)

No.12

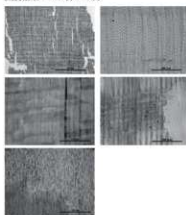
試料番号：No.13 GT54 SL07 201007
 識別結果：カバノキ科タマシバ属タマシバ節



- ・広葉樹類木材
- ・透管は階段せん孔を持つ (径数は10以下)
- ・透管相互せん孔は交互状
- ・放射線維は単列
- ・放射線維は同径ないし異径で
 多数の管状細胞、同径の管状細胞

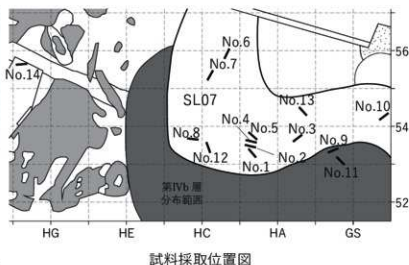
No.13

試料番号：No.14 HG55 IV層 201007
 識別結果：マツ科モミ属



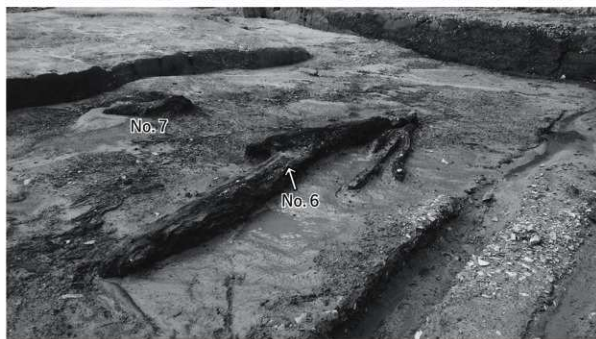
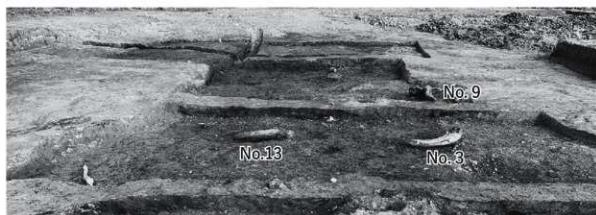
- ・針葉樹材
- ・樹脂道は存在しない → 樹脂道は存在しない
- ・仮透管に草せん孔理は存在しない
- ・心材管はスギ型で1~4径の管
- ・放射線維は1径で本根葉を持つ

No.14



SL07内(第21図②地点周辺)から掘り上げられた自然木
 (200819撮影)

第 63 図 樹種同定結果 (2)、試料採取位置 (1)



上：〔200930撮影、北東→〕中：〔201002撮影、西→〕下：〔201006撮影、南→〕

第 64 図 試料採取位置（2）

第4章 総括

白ケ口V遺跡の発掘調査で得られた資料は、縄文時代、古代、中世、近世・近代と長期間に及ぶ遺物であり遺構であった。ただし、調査区内における先人の痕跡は、第IVb層面上で確認された縄文時代後期前葉期の土器数個体と石器2点、近世・近代に作られた溝や土坑でのみ跡付けが可能であり、その他の圧倒的多数の遺物群とは、北側丘陵縁辺部から洪水等により二次的に移動させられた可能性が高いと推測した。従って本遺跡とは、試掘・確認調査段階で想定していた縄文時代後期頃の石器製作の生産地そのものではなく、石器製作に関連した遺物包含地という微妙な位置づけとも言えよう。

現在、遺跡のある白ケ口地区は、農作業用の小屋を除くと集落・家屋は存在せず、常に人々が行き交う土地ではない。しかも沢地を利用した水田を除くと、屋敷地や耕地を確保するような広い場も見当たらない。しかしながら発掘調査の結果、縄文時代のみならず、古代、中世、近世・近代と断続的ではあるが、間違いなく調査区外の丘陵縁辺部には先人の足跡が刻まれていたのである。

杉や松等の山林が広がる白ケ口地区に人々を引きつけ続けた要因とは何なのか。縄文時代と古代以降に分けて考察すると共に、遺跡が形成された過程と時期についても推察したい。

第1節 縄文時代

本遺跡から出土した縄文時代の遺物は、総数の84%（土器352+石器3,689=4,041点/総数4,802点×100≒84.1）、重量比では90%を超す（土器7,509+石器186,483=193,992kg/総重量212,938kg×100≒91.1）。ただし遺構の検出は一切なく、前述のように第IVb層出土の一部を例外として調査区外北側から流入した遺物で占められる特徴をもつ。

1 珪質頁岩産地とその特徴

白ケ口V遺跡を取り囲む丘陵部の基盤となる地層は、第4図に示したように泥岩を主とする船川層（msF）であり、その東側には珪質頁岩の女川層（ShO）が縦走する。出土した石器類は、礫石器を除くと黒曜石の石器・剥片が6点、鉄石英の石鏃が1点確認できるのみで、他は珪質頁岩で占められる。遺跡内から出土した原石は重円礫～円礫が多く、女川層から産出された珪質頁岩が河川の開析により洗い出された結果、脆弱部が削り落とされて転石となったものが選択的に入手された可能性を指摘できる。それらを石器原料として集中的な石器製作が行われているようである。

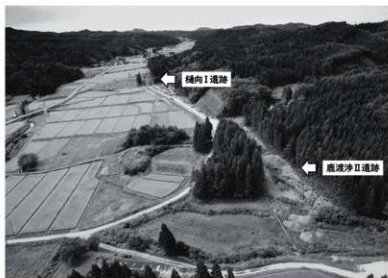
秋田県内の珪質頁岩は、おおよそ三種類の石質に分けられる。

A類：地殻変動や熱流の影響により石質内部が変成作用の結果オパール化し玉髓質となるもの。

B類：珪化作用が進行し、表面が滑らかになるもの。

C類：珪化作用が進行せず、表面が粗いもの。

このうちA類は、鹿渡渉II遺跡、樋向I・II・III遺跡、大沢I・II遺跡の6遺跡からなる三種町上岩川遺跡群のある地域で人頭大～直径1m以上の巨礫まで産出することが知られている（吉川2012）。



上：樋向1遺跡出土の頁岩原石（A類）、高さ・幅とも40cm程（060710撮影）
左：上岩川遺跡群空撮写真、遺跡の景観は白ケ口と酷似する

2枚：秋田県埋蔵文化財センター提供（060906撮影、北東→）

直径5cmほどの小礫であれば他にも、米代川・子吉川流域や男鹿半島、田沢湖東岸などでも分布が確認される。B類も秋田県内では分布が県北沿岸部を中心に、米代川中下流域、三種川流域、子吉川下流域、雄物川中下流域、田沢湖東岸などでまとまった分布域がある。C類はより広く全県的に分布が確認される。珪化の度合いは沿岸部ほど高く、内陸部にいくに従って低くなる。

礫面の特徴の中で、とくにB類中にはクレーター状になるものがある。これは山形県の秦昭繁氏の教示によれば、凝灰岩層中で形成されたノジュールで、山形県最上川中上流域で多く産出されるといふ。また、ラミナの発達しているものが一定量認められる。同様に秦氏によれば、ラミナの発達は外からの流れの影響をあまり受けない静かな海底で形成されたと推定される珪質頁岩に見られ、秋田県沿岸部における珪質頁岩の特徴であるという。

2 剥片剥離技術の特徴

本遺跡は原産地遺跡的な性格が強いため、石核のパラエティが豊富で、礫面を残すものが多い。ここでは石核と剥片から本遺跡の剥片剥離技術の特徴を検討する。

50頁、石核の分類と点数で示したように、出土した石核の類型で最も多いのはA-3類（87点）、ついでB-3類（83点）であり、この2類型が群を抜いている。ついでD-3類（37点）、B-6類（29点）、B-5類（28点）、C-3類（26点）、B-4類（25点）と続く。

基本的に原石もしくは部厚な剥片を石核素材として90度打面転位を頻繁に繰り返して、矩形～横長幅広剥片を連続的に生産する剥片剥離技術が本遺跡の主体となっていることが分かる。

剥片剥離技術別（1～7類）にしてみると、両設打面により縦長剥片を剥離する1類は2点のみ、単設打面により矩形～横長幅広剥片もしくは貝殻状剥片を剥離する2類は111点、90度打面転位により矩形～横長幅広剥片を剥離する3類は233点、求心状剥離により横長幅広剥片を剥離する4類は42点、打面と作業面を交互に入れ替えて矩形～横長幅広剥片を剥離する5類は53点、原石や剥片素材石核に1回のみ剥片剥離を行う6類は45点、両極打法による7類が14点となる。

一般的な縄文時代遺跡では3類に次いで4・5類が多い。これらは石核原料を徹底的に消費し尽くすために採られる技術である。一方、本遺跡では3類に次いで2類や6類が特徴的に多く認められる。この2者は4・5類とは反対に、原料に対して剥片剥離をあまり行わず浪費家的である。こうした剥片剥離のあり方は原石の豊富な石材産地遺跡に多く見られ、本遺跡もそうした特徴を備えたものと言える。

注意しなければならないのは、これらの分類はそれぞれ排他的な関係にあるのではなく、剥片剥離の進行による石核形状の変化などに対応して、類型間を移行していくものと推察されることである。たとえば、両設打面のA-1類の剥片剥離が進行して石核が小さくなるにつれ、90度打面転位の3類に移行するといったことが考えられる。

また、一つの原石を分割してC-1類とC-2類が生み出される場合や、A-3類によって得られた剥片を素材としたB-2 c類石核によって更なる剥片剥離が遂行される場合など、多様な剥片剥離工程があっただろう。石核素材において、礫素材A類が140点なのに対して剥片素材B類が256点と、A類の約1.8倍になるのは、礫素材石核から剥離された剥片は石核素材にもなったことを反映しているのかもしれない。

つまり、接合例などにより直接そのことを示す資料はないものの、資料の観察からは石核類型どうしは排他的ではなく、複数の類型の組み合わせさせた剥片剥離工程を想定することができる。

以上に見たように、本石器群はきわめて原産地遺跡的な様相が色濃いと言える。

3 出土石器から見た臼ケロV遺跡の時期と性格

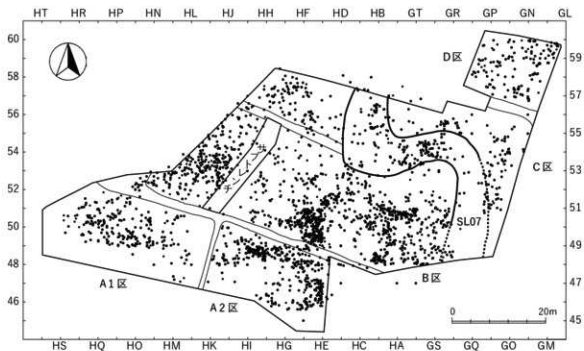
石器は原位置を保っておらず、二次的堆積物中の出土であることから、調査区より標高の高い場所から流されてきたものである。よって、平面分布から遺跡の性格を検討することは叶わないため、出土石器のみからの検討となる。

数多くの石核や剥片類、製品・石器未成品の状態から、本遺跡は集落跡というよりも石器製作跡の性格が色濃いように見受けられる。とくに石籠未成品がままとまっていることから、石籠製作が中心の一つだったと推測される。

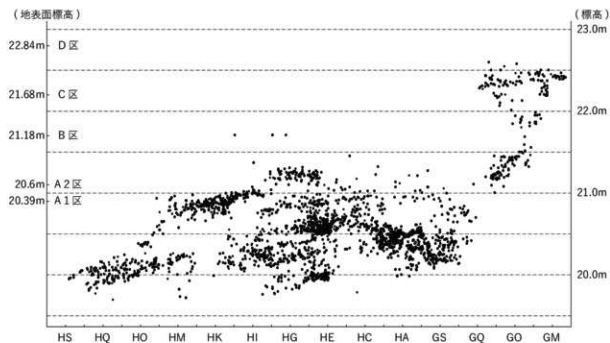
珪質頁岩の原石・石核の礫面の状態からは、円礫～亜円礫が多く、角礫～超角礫は見られない。礫の稜線には自然の衝撃痕・剥離痕が多くみられ、人為的な剥離との区別が難しいもの（偽石器）もある。以上から石器石材獲得地は露頭やその直下ではなく、露頭よりいくぶん下流にあったものと推定される。上流から流されてきた転石を原料として石器製作作業が遂行されたのだろう。

一方で、出土している数多くの原石が人為的に製作地へ持ち込まれたものなのかどうかは判断できない。三種町上岩川遺跡群を参照にすると、採掘した原石を一括保管する場合もあったであろうと考えられる。これら原石が人為的に持ち込まれたものだとすれば、遺跡の本来あった場所に、段丘礫層中に転礫として包含される珪質頁岩の入手を目的とした採掘跡跡が眠っている可能性を否定できない。

上岩川遺跡群では、遺跡直下の段丘礫層中に豊富に亜角礫～亜円礫～円礫の珪質頁岩原石が含まれていた。遺跡周辺の女川層を含む地層中にどれほどの珪質頁岩が包含されているのかを把握することにより、採掘遺跡としての可能性を検討することができる。



第 65 图 出土石器平面分布图



第 66 图 出土石器垂直分布图



上：調査区外北東側
 (D区東側隣接地)
 法面の状況
 [200709撮影、西→]

中：調査区外北東側
 (D区東側隣接地)
 礫の散布状況
 [200714撮影]

下：調査区外南東側
 (B区東端南側)
 第V層上面の状況
 [200714撮影]



第 67 図 調査区外礫層・礫の分布状況

時期について、出土土器は中期末、後期前葉、晩期末頃であるが、石器についてはどうであろうか。石器形態で時期が分かるものはあまりないが、石槍は縄文時代草創期～早期といった古い様相を示している可能性がある。前述した嘴状石器の可能性があるものも含めた石鏃は形態や法量から後～晩期の可能性がある。一方で石筥・石錐は形態・法量から前期と推定される。

石刃関連資料をみると、東北地方で石刃技法がもっとも発達するのは中期末～後期初頭であり、原産地遺跡で石刃の集中生産が見られる。本遺跡もそうした側面があったのかもしれない。

以上から推定される遺跡の時期は、縄文時代草創期～早期（石槍）、前期（石筥製作関連資料）、中期末～後期初頭（石刃関連資料）、後～晩期（石鏃）と断続的ではあるが連綿と認められる。

とくに本遺跡の特徴となるのは、前期の所産と推定される石筥等の石器製作地としての性格である。前に見たように剥片石器製品保有率は4.8%であった。参考までに上岩川遺跡群の同保有率を見ると0.01%であるので、居住の痕跡がほとんど皆無な上岩川遺跡群よりは白ヶ口V遺跡の方が製品遺存率は高く、石器製作に特化したというのではなく道具の使用を伴う活動もいくらかはなされていたと言えよう。

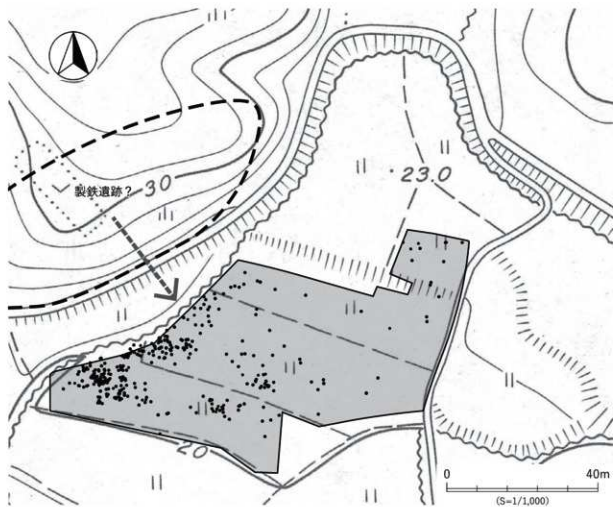
ただ、前期以外にも中期末、後期前葉、晩期末頃の土器が少量ながら出土していることから、ある程度の時期幅をもった短期的な居住地であった可能性が高く、石核・剥片類にはそうした時期のものも含まれているため、前期の原石採掘・石器製作地にほぼ限定される上岩川遺跡群との製品保有率の単純比較により本遺跡の性格付けをすることは慎重であらねばならない。

馬場目川流域を含む本地域は石器原料となる珪質頁岩が分布することが近年分かっている。白ヶ口V遺跡の発見は、そうした石材環境に対して縄文時代の人々が積極的に働きかけていたことを明らかにしたものと重要である。今後、周辺の縄文時代遺跡との比較検討を通じて、本地域における石器石材としての珪質頁岩資源の利用と流通の実態を解明する上でも貴重な遺跡となる。

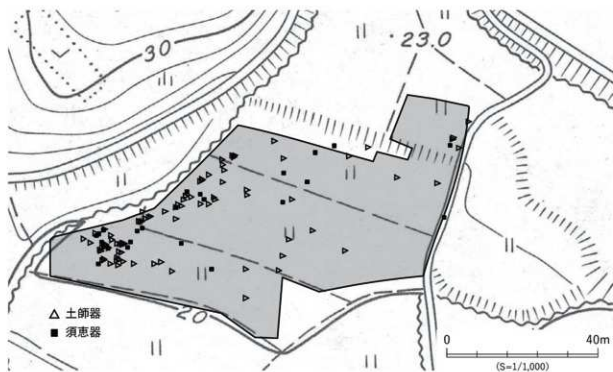
第2節 古代以降

縄文時代以後、この地周辺に人々の足跡が刻まれるのは、平安時代の9世紀に入ってからとなる。次いで時期の明確な遺物は、12世紀後半～13世紀前半頃の中国産青磁碗、国産の須恵器系陶器は14世紀以降か。青磁は15世紀前半～16世紀代にも認められる。続いて16世紀末～17世紀前半の国産陶器、18世紀以降の国産陶磁器となる。近世の遺物は肥前IV期（1690～1780年代）の陶磁器が主体を占めるようである（大橋2004）。古代から近世に至る時期の遺物数は多くはないが、断続的に丘陵緑辺部が利用されていたことが判る。

その一方で、土製品、木製品、鉄製品（雁股鐵）、鉄滓類については帰属時期を明瞭にできなかった。ただし、木製品のうち内外面に朱漆が塗布される漆器椀（第57図190）は、近世に属する可能性が高いと思われる。それは本遺跡の南西約6.5kmに所在する井川町浜井川の洲崎遺跡から出土した中世（13世紀後半～16世紀末頃）の漆器椀・蓋・皿67個体のうち、内外面朱漆は碗2個体のみであり、他の多くは両面黒漆で仕上げられていることからの推測である。以下では、特徴的な出土遺物に焦点をあてて分析を試みる。



第 68 図 鉄滓の出土分布図



第 69 図 土師器、須恵器の出土分布図

1 製鉄炉は古代か中世か（第68・69図）

調査区内からは418点、総重量13.74kgもの鉄滓類が発見された。出土した鉄滓類を見る限り、それは製鉄炉の炉壁片や炉内滓、流動滓といった製錬滓のみであり、明確に鍛冶に係わる遺物（碗形滓等）は認められなかった。

また遺物の分布（第68図）を考慮すれば、製鉄に係わる生産地が調査区外北東側の丘陵緑辺部にあったと想定される。ただし、その操業時期は不明と言わざるを得ない。

本遺跡の北北西約4kmに所在する三種町鯉川的小林遺跡では、10世紀前後の製鉄炉3基、鍛冶炉が検出され、製鉄から鍛冶までの一貫した鉄生産・鉄器生産が行われている。また、同遺跡の北側に隣接する三種町鹿渡の堂の下遺跡では製鉄炉（精錬炉）、鍛冶炉と共に溶解炉も検出されており、鉄生産から鍛冶、鑄造に係わる一大生産地であることが判明している。その時期は12世紀後半を中心とするようである。また時期は不明ながら、本遺跡の北北西約2.2km、浦城跡の北約1.7kmにある三種町天瀬川の市野寺沢遺跡では多量の鉄滓が採集されている。

日本海沿岸部、南から由利地域－秋田平野－八郎潟東岸－米代川河口域には、堂の下遺跡の事例を除くと9～10世紀の製鉄遺跡が点在すること、本遺跡出土の土石器・須恵器の分布が鉄滓の分布と酷似すること（第69図）、中世以降の出土遺物が石器群と同様に調査区内全域に点在することも考慮して、白ケ口地内での鉄生産は9世紀代と推定しておきたい。

その前提に立てば、9～10世紀代の鍛冶関連の集落跡である開防遺跡（第5図29）や貝保遺跡（同30）に鉄素材を供給した生産地候補として白ケ口が加えられたことになる。また、時期は不明確ながら本遺跡と同じ浦大町地内に所在する沢田遺跡（第5図19、採集品の碗形滓（第7図21）や塞ノ神遺跡（第5図22、フイゴ羽口出土）への鉄素材供給も想起されるのである。

なお、雨翌日の現場内を見渡すと、排水路内に筋状に取り残された黒色の砂粒（砂鉄）が認められることからすれば、丘陵地に原料となる砂鉄層が存在していたことも推測される。

2 雁股鉄の出土（第70図）

出土した鉄製品のうち、近世以前に属するとみられるのは雁股鉄1点である。前述のとおり雁股鉄とは、先端部が二股となる特異な形状を示し、飛ぶ鳥や走る獲物の足を射切るために使用されたようである（註1・2）。管見の限り、秋田県内では次の7遺跡から9点の出土例がある。

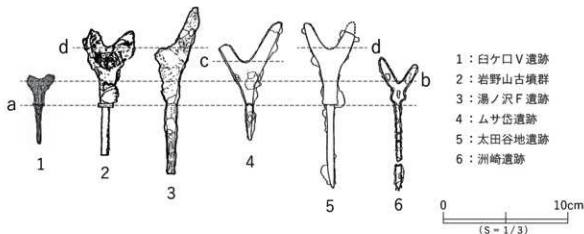
①秋田市寺内の秋田城跡3点（鶴ノ木地区第54次調査区、S D 993溝跡、10世紀代か／大畑地区第56次調査区、S I 1102竪穴住居跡、8世紀後半／大畑地区第60次調査区、S I 1215竪穴住居跡、9世紀中頃）、②秋田市御所野の湯ノ沢F遺跡（25号墓、9世紀後半）、③五城目町上樋口の岩野山古墳群（A 2号墳、9世紀前半）、④大館市比内町の片貝遺跡（S I 150竪穴建物跡、9世紀後半～末）、⑤能代市浅内のムサ岱遺跡（遺構外、10世紀）、⑥鹿角市花輪の太田谷地館跡（S I 74竪穴住居跡、11世紀）、⑦井川町浜井川の洲崎遺跡（S E 243井戸跡、15～16世紀か）。

③の岩野山古墳群（秋田県指定史跡）は、本遺跡から森山を挟んで南南東方向約4.2kmに位置し、第2章第2節の歴史的環境で紹介した中谷地遺跡（第5図37）からは東約1.2kmにあたる。

①～⑥は古代（8世紀後半～11世紀）、⑦が中世である。秋田城跡と片貝遺跡を除く5点を第70図に示したが、先端部の形状から見れば古代が幅広く、中世は棒状を成しているようである。また、軸

部と刃部の接点（第70図 a ライン）から刃部内側最低位（同 b～d ライン）までの長さを比較すれば、本遺跡出土の雁股鎌とは中世に属するのかもしれない。

なお、古代である 2・3・5 は d ラインに揃うことから製作上の規格性が存在していたことをうかがわせる。



第70図 秋田県内出土の雁股鎌

3 中国産青磁の出土が意味すること

本遺跡からは小片を含むものの、7点（個体）の青磁碗が出土した。うち6点は12世紀後半～13世紀前半代の中国・龍泉窯系とされる磁器碗であり、当地には鎌倉時代に入ってからもたらされたと想定される。通常の中世遺跡において青磁類が出土する頻度は低い。ただし、八郎潟東岸地区は例外的に多く、五城目野野田の北遺跡（第5図27）では12世紀後半～14世紀後半の白磁6点、青磁9点が出土し、井川町洲崎遺跡では72点の青磁が確認されている。それでも青磁等の貿易陶磁が出土する遺跡の性格は、単なる集落に留まることはないのである。とすれば、本遺跡周辺に何があったのか。

『八郎潟町史』によれば、白ケ口の東側に隣接する小字に「子持沢」があり、ここに東谷寺があったとされる（八郎潟町1977）。現在、八郎潟町一日市にある清源寺（第5図内左下）は、寺伝によれば天正8年（1580）、脇本城主（鹿鹿市）の安東愛季（1539～87）が前年に不運の最期をとげた浦城（第5図6）城主、三浦盛永の嫡男である三浦盛季（押切城（第5図28）城主）を弔うために、押切村にあった草庵を「石頭院」として開創したとされる。草庵の前身とは「かつて森山の奥にあり、浦城と共に兵火で焼かれた真言宗盛徳山東谷寺の瑞天上人が結んだ」とされる（大坂1996・1999）。

一方で高岳山麓、浦城下に位置する八郎潟町浦大町の常福院は、三浦盛永の祈願所であったが、その開創は子持沢にあった東谷寺とされる。東谷寺に安置されていた慈覚大師の作と伝わる薬師如来を勧進して常福院の本尊したというのが、昭和20年の火災で焼失した（秋田魁新報社1997）。

いずれにしろ、本遺跡の東方約600mの子持沢地内（白ケ口III遺跡周辺か）は東谷寺にまつわる霊地として昭和21年まで耕地化されなかったこと、いずれも信仰の山として知られる高岳山、森山の存在とその位置関係も考慮すれば当地周辺に宗教施設あるいはそれに関連する施設が存在していた可能性は高く、ここに納められていた青磁が調査区内に入り込んだとの推測ができる。

第3節 遺跡形成過程と時期

白ケロV遺跡は近世以降の検出遺構を除けば遺物のみの出土であることから、遺跡の主な性格としては遺物包含地あるいは散布地との位置づけができる。ただし通例の散布地とは、たとえば集落の外縁にあって人為的な活動に伴い遺跡内に遺物が残されるというイメージであろう。ところが本遺跡の場合、縄文時代後期前葉と近世以降の限定された時期を除くと、調査区外北側の丘陵縁辺部に存在したであろう縄文時代（遅くとも前期～晩期）、古代（9世紀代）、中世（13～16世紀）、近世（主として18世紀代）の石器製作や鉄生産の場、宗教関連施設、集落内に残された遺物が、洪水や地滑り等の営力によって本遺跡内に流入・移動したと考えられる。『広辞苑』によると「営力」とは、「地形を変化させる力。水・風・氷河・動物などの作用による外的営力と、地震・火山活動・地殻運動などの作用による内的営力とがある」とされる（新村1976）。

調査時の土層観察や遺物の出土層序、および調査後に地理学・地質学の専門家から得た教示を加えることで、本遺跡地が形成された過程と時期がある程度復元できそうである。想定される形成時期順に整理する。

1 第IV層とS L 07河川の形成（第71図）

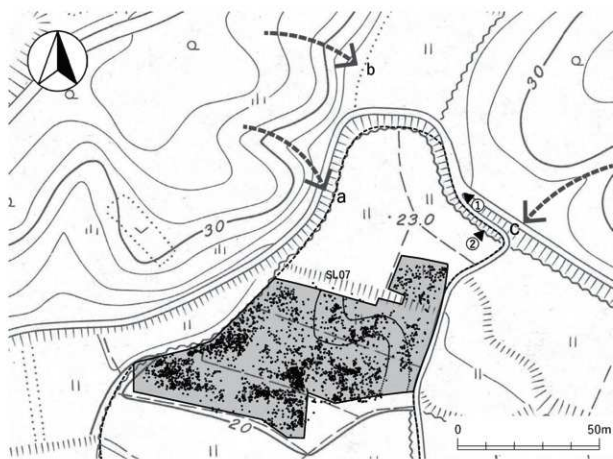
新第三紀中新世後期（およそ1000万～500万年前）に形成された船川層と呼ばれる泥岩を主とする基盤層（第V層）の上位に堆積するのが第IV層土である。第IV層土は、一見すると基盤層と同じ地山土のようであるが、前述までのとおり本層は北側丘陵部から流入土である可能性が高い。現在の地形を見れば、第71図に示したa b c地点等を経由した可能性もあろう。

第IV層はB区東側では7層（第10図、第IV a～g層）に細分したが、大きくは①青灰色粘土層（第IV a・c層など）、②青灰色粘土に第V層砂礫土が混在する層（第IV d層など）、③青黒色～黒褐色シルト質土層（第IV b層）の3層に大別される。第IV層の形成始期は不明瞭だが、第IV b層形成前の状況から観察する。

(1) C区北壁面にみる第IV層の形成

C区北壁面、第13図a～b間には、第V層面上に「青色粘土（青ネバ）を主とする層」と「第V層由来の礫層を多く含む層」と表記した2種類の土層（第IV層）が認められた。上記の第IV層3大別では、前者が①、後者②となり、③の第IV b相当層が欠落する。このことから、本壁面で見限り同層準は第IV b層形成前と見なされる。

基盤層である第V層の直上に堆積するのは、②の砂礫を含む青灰色粘土層であり、この上に①の青灰色粘土層が位置する。②は混入する砂礫の多寡や粒径で細分が可能であるが、①と互層をなすような堆積を示す。①②ともに、その層理面がいずれも緩く弧状を描くような形状であることから、水の力による浸食と堆積が繰り返された結果と推測される。土層観察地点での第IV層中の出土遺物は認められず、本層準の形成時期は不明であるが、停滞水による還元作用で生成されたグライ化が継続する湿地のような環境下であったことになる。



①地点から遺跡北側を望む
〔210125 撮影、南東→〕



②地点から遺跡北東側を望む
〔210125 撮影、南西→〕

第 71 図 出土遺物の分布と遺跡北側の地形

(2) 第IVb層の形成

次いで第IVb層形成期を迎える。同層準はグライ層である第IV層内に挟み込まれる形で帯状の堆積を示す(第12図中段模式図参照)。本層黒褐色シルト質土の分布が土壌化作用によるとすれば、地下水位の低下等の要因から一定期間グライ化が中断したことを示す。同層面上の4地点(第19図A～D地点)から後期前葉段階の縄文土器数個体と石器2点が確認されたことは、グライ化が中断した時期の推測と共に、「縄文中期後半から目立ってきた気温の低下」(勅使河原2016)との関連も想起される。

いずれにしろ、縄文時代のうち唯一、本遺跡内に人々が入り込むことができたのは後期前葉期である。ただし、ここで石器製作を裏付けるような明確な遺構や遺物の確認はできず、第IVb層面のA・D地点では石器を入れた容器(縄文土器)を調査区内に埋置するような行為が想定される。それは、かつて湿地であった場に対する地鎖のような意味づけがあったのかもしれない。

(3) 第IVa層、第IVa+層の形成

第IVb層上面にはグライ層である第IVa層が認められることから、地下水位の上昇等を契機として人々が足を踏み入れることが困難となるような湿地に戻ったことになる。また、B区東側とA1・2区の一部では第V層由来の砂礫を多く含む第IVa+層が分布する。同層はC区北壁面、第13図a～b間の東側②地点(23頁写真参照)で、第IVa層の上位に位置することを確認している。第IVa+層は次に報告するS L07河川に切り込まれていることから、同河川形成前の堆積となる。

(4) S L07河川と流入した樹木

グライ層最上面の第IVa層、および第IVa+層を挟り込むように形成されるのは、S L07河川である(第21図参照)。その流路は上流(北側)から南下して一旦東側に折れ、再び南側に屈曲するS字クランク状をなす。現況の地形からみれば、その流路は北側から南側に向かう直線的な走行をなすと思われるが、なぜか直交して東に折れる。その要因は不明と言わざるを得ないが、東に向きを変える河川内直交部(第21図②地点周辺)に自然木(樹木)が集中して認められたことから、これが障害となることで流路が変更された可能性もあろう。河川跡内の樹木の樹種同定結果は、前章第4節に示したとおり広葉樹で占められるが、現地で観察した樹木等の状況から次の点をまとめておく。

- ・広葉樹は樹径が30～40cm程度であり、樹高10m前後、樹齢は20～50年か。
- ・河川内に樹木が流入したのは、出土層序・分布と第21図②地点、第22図③地点での堆積層を照合すると、S L07E期に1回、S L07C期に1～2回か。
- ・樹木には火災を受けたような炭化は見られず、人為的な加工痕跡もない。
- ・河川内からはトチ・クルミ等の種実も出土しており、同定された以外の樹種も多く自生していた。
- ・根幹部に付着していた土壌は黒褐色シルト質土であり、これは河川内堆積層のうち3・5層としたシルト質土(第21図②地点土層)と対応する。同層土は、第2章第1節の地理的環境で紹介した調査区北側の丘陵地の土壌、適潤性の褐色森林土壌(Fu-2b、富津内2統b)に由来するのであろう。

(5) S L07河川と第IV層の形成時期

S L07河川跡出土の遺物は、中期末～晩期末にあたる縄文土器片81点、石器・剥片130点である。S L07に先行する第IV b層に後期前葉の遺物が認められることから、当該期以降に河川は形成されたことになる。そしてS L07が埋没した時期は、古代（9世紀）以降の遺物が一切認められないことから見れば、下限は9世紀となる。ただし、第21図②地点で観察したS L07堆積層のうち粘土・砂礫を多く含む土層（1・2・4層）は短時間で埋積した様相を示し、河川内に樹木が流入したのが2～3回であることも考慮すれば、S L07の形成から埋没まで長期間に及ぶとは考えづらい。とすれば、晩期末以降の比較的早い段階で埋没が完了したと想定しておきたい。

一方で第IV b層以前の第IV層（B区東側の基本層序では第IV c層以下）形成始期は不明瞭である。第IV b層を除く第IV層内の出土遺物は、縄文土器片25点、石器・剥片94点である。各土器は一辺が5cm以下で摩耗が著しい破片が多いことから見ても、水流などで斜面上位側から転がるような形で調査区内に入り込んだと想定される。同様の状況は樹木からも確認できた。

B区北西側HG55グリッド第IV層（砂礫を含む青灰色粘土層、B区東側第IV d層相当か）から長さ10～20cm、幅・厚さ1～5cm程の木片が散在する形で検出された。それは樹種同定により、針葉樹のマツ科モミ（試料番号14、前章参照）と判明した。木片年輪は目詰まりが緻密であることから、密林状態での安定した生育環境が想定された。その出土状況は、S L07内樹木と異なり樹身の体をなしておらず、大きな衝撃の中で裁断・小片化されたように見え、それは土器片の様相と合致する。ただし、両者とも上位側から流入してきたことを物語る資料ではあるが、木片の出土層内（第IV d相当層）での明確な遺物は未確認であり、同層の形成時期は、縄文時代後期あるいはそれ以前としか提示できない。

2 第III層の形成と土層変形、その要因

第IV層の堆積終期は、これを切り込むS L07河川との関係から、おおむね縄文時代末頃と想定される。ただし、その直上に位置する第III層は時間差が大きい近世期の堆積層である一方、両者の層境が明瞭であることは（第13図②地点、23頁写真参照）、縄文時代以降近世に至る間にも堆積と削平・浸食が繰り返されていた可能性が高い。それでも基本土層として示したB区東側（第10図）では第IV層の上に第III層がそれぞれ水平堆積を見せている。

(1) 第III層の形成時期

B区東側GR51グリッド（第10図）で観察した第III層土の層厚は50cm、同じB区東側のGS・GT50グリッドでは層厚70～80cmを計測した。同層の形成時期は、出土遺物が縄文時代から近世までの時期に及ぶことから、近世の堆積層と判断した。比較的短期間で厚い堆積層が形成されるには、洪水等の外的営力が想定される。

たとえば、『八郎潟町史』には寛永9年[1632]6月に発生した「白髭洪水」により、湖東沖積低地が「海のようになり、小池、川崎、一日市、夜叉袋あたりの被害はひどく」との口伝が記されている（八郎潟町1977）。また、民話として「白ひげの洪水」が採録されており、これによると現在の馬場目川は、元々北側の夜叉袋周辺（第3・5図の夜叉袋川を指すか）を流れていたが、本洪水により現在の流路

に変わったとされる(長山1965)。白髭洪水にまつわる民話は、大仙市協和荒川や仙北市田沢湖田沢、湯沢市秋ノ宮にも伝わる。

第Ⅲ層の形成と白髭洪水を直接的に結びつけることはできないが、参考例として挙げておきたい。

(2) 土層の変形

上記のB区東側における第Ⅳ層と第Ⅲ層は自然な堆積を示す一方、B・C区西側では第Ⅲ・Ⅳ層を構成する堆積土層が変形した状態で観察でき(第14～17図)、それはB区中央でも認められた(第18図)。各地点での土層変形パターンは異なるものの、第15図②地点のaでは、青黒色～黒褐色シルト質土層(第Ⅳb相当層)が「心」字状に屈曲したり、第16図④地点や第17図⑤地点では土層末端が捲れ上がったような形状となっていた。

土層が変形した時期は、一定量の第Ⅲ層土の堆積が進んだ段階と想定される。それは、第16図④地点での図示面右側において第Ⅲ層土内に第Ⅳ層土(第Ⅳx1層)が入り込むような形状を示していること、第17図⑦地点では青黒色～黒褐色シルト質土層(第Ⅳb相当層)と褐色シルト質土(第Ⅲb相当層)が混在する形で認められたことによる。

土層が変形する原因は、寒冷期の凍結融解によって生じることが知られ、県内では後期旧石器時代初頭(約35,000年前)の遺跡とされる秋田市の河辺松木台Ⅲ遺跡(秋田自動車道河辺JCT周辺)などでも確認されている。同遺跡からは石器等が3,000点以上出土しているが、その分布状況は「インボリューションの影響を受けて石器群が二次的に移動した結果であるとする可能性」が示されている(秋田県教委1986)。インボリューションとは、「堆積後に発生した地層のちじれ、ねじれなどの変形構造」を指し(曾根2017)、河辺松木台Ⅲ遺跡におけるインボリューションが発生したのは、十和田火山を起源とする十和田八戸テフラ(約15,500年前)降灰前とされる。



河辺松木台Ⅲ遺跡の南側に近接する石坂台Ⅳ遺跡
で検出されたインボリューション(ポールは2m)

[851030撮影、秋田県埋蔵文化財センター提供]

地理学が専門の阿子島功氏(山形大学名誉教授)による「最終氷期の寒冷期(約2万年前)以降のわが国の低地における凍結融解による土層変形の報告はない」との教示を得て、本遺跡の土層変形は別の要因に求められる。

先のインボリューションについて、凍結融解作用以外にも「液状化などにより同様の構造が形成されることもある」と記されている。液状化とは「非固結の砂質地盤が地下水で飽和している状態にお

いて、一時的に液体状になる過程」を指し、それは「主として地震の強い震動に」によって形成される（隈元・三宅2017）。液状化は砂層地盤のみではなく、砂礫層でも砂礫の上昇・噴出例が存在し、宮城県仙台市の王ノ壇遺跡や福島市勝口前畑遺跡でも確認されている（寒川1992）。

その上で、本遺跡での土層を見渡すと、第15図②地点のdやb-c間とした箇所は砂礫を含む土層（第IV x 3層）が吹き上がったかのような、いわば噴砂の形状を示している。

（3）土層変形の原因と時期

本遺跡の土層変形が地震に因るとした場合、その時期を特定することは可能であろうか。その前提としては、第III層内出土のうち最も新しい時期の遺物である肥前IV期（1690～1780年代）か、それ以後の八郎潟周辺での地震となる。これに当てはまる地震は「理科年表 2021」によれば、次の3度である。発生日月日〔グレゴリオ暦〕とマグニチュード（M）は次のとおり。

①元禄7年5月27日〔1694年6月19日〕M7.0

②宝永元年4月24日〔1704年5月27日〕M7.0

③文化7年8月27日〔1810年9月25日〕M6.5

①は能代沿岸部、②は八峰町岩館を震源とするもので、2度の大地震で能代地方は壊滅的な打撃を受け、当時の表記は「野代」であったが、“野に代わる”ことを嫌い、“能く代わる”と読める「能代」に改名した経緯がある。③は男鹿半島東部、寒風山（標高355m）周辺を震源とする地震であり、寺社を含む家屋全壊1,444軒（潰家1,432、社潰1、寺潰11）、損壊家屋480軒、死者61人と記録がある（佐久間1908）。地震学者の羽鳥徳太郎によれば、「寒風山と八郎潟の間の平野地帯に被害が集中し、震度7に達したことは疑いない」（羽鳥1987）とする。寒風山は本遺跡の西約20kmに位置する。

なお、同地震翌日の8月28日夜半から「車軸の雨に大風」となったとの記録もある（若美町1977）。「車軸の雨」は雨あしの太い雨、大雨を形容する語である。仮に文化7年の地震によって土層が変形したとすれば、翌日の大雨によって更に新たな土砂（第III層土）が流入した可能性も想定される。

秋田県内の発掘調査された遺跡において、明確に液状化・地盤流動化が認められた事例は他にはない。ただ、地震に起因する地割れは、男鹿市船川港の大畑台遺跡で検出されており、縄文時代中期後葉の竪穴建物跡（S I 12・43）を分断するように、長さ73m、最大幅2.5m、深さ0.8mの規模であることが報告されている（五十嵐2013）。その他に地割れは、能代市浅内の石丁遺跡、八峰町峰浜の湯ノ沢岱遺跡で、断層が確認されたのは横手市市内の虫内I遺跡、三種町長信田（旧琴丘町）の家の下遺跡がある。地割れ、断層が発生した時期は、大畑台で縄文時代中期以降、虫内Iで同晩期以降、湯ノ沢岱が平安時代（10世紀）以降としか判らない。



大畑台遺跡の地割れ（男鹿市提供）

大仙市・美郷町に所在する城柵遺跡の払田柵跡では外郭を構成する築地土塀（基底幅3.3m前後、推定高3.6m）の一部が倒壊した状態で検出されており、これは天長7年〔830〕あるいは嘉祥3年〔850〕のいずれかの地震に伴うと考えられている（児玉1996）。

一方、山形県では液状化・地盤流動化が観察された遊佐町下長橋遺跡・浮橋遺跡をはじめ8遺跡が知られる（阿子島2013）。寒河江市三条遺跡では、「地盤変形」「地盤流動化」の痕跡が認められ、「軟弱層の褶曲」「軟弱層のゆれうごき痕」や「地下水で飽和された軟弱な粘土層が地震で揺すられてきたものであろう」と記されている（阿子島ほか1997）。これら流動化の時期は、平安時代以降とされる。

3 「白ケ口」地名の語ること

遺跡地の住所は現在、八郎潟町浦大町字白ケ口であるが、近世には小立花村の「白ケ沢」であった可能性が高い。第2章第2節の歴史的環境での記載のように、寛政12年〔1800〕までにまとめられた『領中六郡紀行』の「小立花村」には、家屋7軒、人口38名、馬5頭とある。文化7年〔1810〕の地震に際して家屋等に被害があったのか、関係史料を確認することはできなかったが、遺跡内における近世期の出土遺物からみれば、村内7軒のうち少なくとも1軒は白ケ沢内に存在していたのかもしれない。

「白ケ口」という地名の由来は不明だが、『地名用語語源辞典』によれば「うす（白）」とは、「①「浅い」の意か。「古語のウス（薄）にはアサ（浅）と類似する意義がある。②白状の地形」とある。一方の「くち」は「フチ（縁）に通じ、「端。へり」の意。クチル（朽。腐）の連用形から「湿地」または「崩落地形」を意味する」とある（楠原・溝手1983）。さらに、ウスイ（薄い）の「ウス」の転訛したものとされる「ウシ」地名には、「きわめて不安定な土地、すわなち①崩落地、地滑り地、崖、②洪水氾濫などがある」という説があるが、これは古語の「憂し」へ「牛」の字を当て字したとする（斎藤2012）。

このように見てみると「白ケ口」とは、発掘調査の結果得られた「湿地」「崩落地形」「地滑り地」「洪水氾濫」といった事象を現した地名であったとも考えられ、「白ケ沢」から「白ケ口」への変更は地震等を含む外的・内的営力を目の当たりとしたことを契機としたとも想定されるのである。

（註1）室町時代に成立したとされる『石山寺縁起』（巻二、二十三紙）には、雁股鍬を装着した矢を鹿に向けようする者に対して、殺生禁断の観点からそれを阻止しようとする人物が描かれている（渋澤1984a、小松1988）。

（註2）同じ絵巻物でも、南北朝期（13世紀末）の成立と推定される『男衾おびすまのまじらふ三郎絵詞』（第三段、十七紙）には、合戦時の武士が雁股鍬を装着した弓を引いている様子が描かれている（渋澤1984b、小松1992）。このことから、雁股鍬は狩猟のみの道具ではなさそうである。

〔参考・引用文献〕

- 佐久間舜一郎1908「文化七年男鹿半島の大地震」『新編北羽発達史上』秋田県教育会
長山幹丸1965「秋田の伝説」蓮西寺
新村出(編)1976「営力」『広辞苑』第二版補訂版
八郎湯町1977「八郎湯町史」
若美町役場1977「大淵芳昌家文書-男鹿地震之事」『若美町史資料』
日本鉱業株式会社船川製油所1979「大畑遺跡発掘調査報告書」
楠原佑介・溝手理太郎1983「うす(白)」『地名用語語源辞典』東京堂出版
洪澤敬三1984a「石山寺縁起」『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』第3巻 平凡社
洪澤敬三1984b「男舎三郎絵詞」『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』第3巻 平凡社
秋田市教育委員会1984「湯ノ沢F遺跡」『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
秋田県教育委員会1986「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ」秋田県文化財調査報告書第150集
羽島徳太郎1987「西津軽-男鹿間における歴史地震(1694～1810)の震度-津波調査」『地震研究所集報』
第62号 東京大学地震研究所
秋田県教育委員会1988「西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ-太田谷地館跡-」
秋田県文化財調査報告書第172集
小松茂美1988「石山寺縁起」日本の絵巻16 中央公論社
秋田市教育委員会1990「第54次発掘調査」『平成元年度秋田城跡発掘調査概報』
秋田市教育委員会1992「第56次発掘調査」『平成三年度秋田城跡発掘調査概報』
寒川 旭1992『地震考古学 遺跡が語る地震の歴史』中公新書
小松茂美1992「男舎三郎絵詞・伊勢新名所絵歌合」続日本の絵巻18 中央公論社
秋田市教育委員会1994「第60次発掘調査」『平成五年度秋田城跡調査概報』
大坂高昭1996「秋田県曹洞宗寺伝大要」無明舎出版
児玉 準1996「秋田県」『発掘された地震痕跡』埋文関係教授連絡会議・埋蔵文化財研究会
秋田魁新報社出版部1997「常福院」『心のふる里「秋田のお寺」』秋田魁新報社
阿子島功・佐藤庄一・水戸弘美・佐竹桂一・植松暁彦1997「山形内陸盆地の噴砂・地盤流動化の痕跡-寒
河江市三条遺跡-」『山形応用地質』第17号
大坂高昭1999「秋田県曹洞宗編年史」無明舎出版
秋田県教育委員会2000「洲崎遺跡」秋田県文化財調査報告書第303集
秋田県教育委員会2001「北遺跡」秋田県文化財調査報告書第315集
五城目町教育委員会2002「開防遺跡」五城目町埋蔵文化財調査報告書第8集
秋田県教育委員会2003「開防遺跡・貝保遺跡」秋田県文化財調査報告書第361集
秋田県教育委員会2004a「小林遺跡Ⅱ-平安時代・中世篇-」秋田県文化財調査報告書第376集
秋田県教育委員会2004b「堂の下遺跡Ⅱ-中世篇-」秋田県文化財調査報告書第377集
大橋東二2004「世界をリードした磁器窯 肥前窯」新泉社
秋田県教育委員会2005「ムサ岱遺跡」秋田県文化財調査報告書第396集
吉川耕太郎2012「北の縄文鉾山上岩川遺跡群」新泉社
斎藤廣志2012「ウシ・ウス」『あきた地名要覧』秋田文化出版
阿子島功2013「防災と災害考古学」『平成25年度 山形県埋蔵文化財センター発掘調査速報会』設立20周年
記念講演会資料
五十嵐祐介2013「遺跡からみた自然災害-男鹿市大畑遺跡の地割れ-」『秋田考古学』第57号
秋田県教育委員会2015「貝保遺跡(第2次)」秋田県文化財調査報告書第499集
勅使河原彰2016「縄文文化の発展と限界」『縄文時代史』新泉社
曾根敏雄2017「インボリューション」『地形の辞典』朝倉書店
隈元 崇・三宅紀治2017「液状化」『地形の辞典』朝倉書店
秋田県教育委員会2018「片貝遺跡」秋田県文化財調査報告書第509集
国立天文台2021「理科年表2021」丸善出版

報告書抄録

ふりがな	うすがくちごいせき							
書名	白ケ口V遺跡							
副書名	高岳地区農地集積加速化基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	八郎潟町文化財調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	鎌田大輝・工藤 晃・高橋 学							
編集機関	八郎潟町教育委員会							
所在地	〒018-1692 秋田県南秋田郡八郎潟町字大道80番地 TEL.018-875-5812 FAX.018-875-5950							
発行機関	八郎潟町教育委員会							
所在地	〒018-1692 秋田県南秋田郡八郎潟町字大道80番地							
発行年月日	2021年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うす ぐくち igoiseki 白ケ口V遺跡	あきたけんあきたこほ 秋田県南秋田郡 はちろうがたむらうまち 八郎潟町浦大町 あびつち 字白ケ口	363	27-56	39度 58分 11秒	140度 06分 18秒	20200622 / 20201007	3,630㎡	ほ場整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
うす ぐくち igoiseki 白ケ口V遺跡	散布地	縄文時代	(河川跡)	縄文土器 石器 剥片		中期末、後期前葉 晩期末		
		平安時代		土師器 須恵器 鉄滓・灰壁		9世紀代		
		中世		青磁 錢貨 須恵器系陶器		13世紀～16世紀		
		近世・近代	土坑・溝跡	陶磁器 錢貨 漆器 木製品		17世紀以降		
要約	<p>白ケ口V遺跡は、ほ場整備事業に伴い2019年に新発見され、試掘・確認調査段階では、縄文時代後期の石器製作に関係した集落跡と想定していた。2020年の本調査により検出された遺構は、近世あるいはそれ以降の土坑や溝跡のみであった。一方で出土した遺物は、縄文時代中期末・後期前葉・晩期末の土器、遅くとも縄文時代前期以降の石器・剥片類、平安時代の土師器・須恵器、製錬に係わる鉄滓・灰壁類、13世紀の青磁、14世紀以降の国産陶器、17世紀以降の国産陶磁器類と多岐にわたることが判明した。遺物の出土層や堆積土層(第Ⅲ・Ⅳ層)を観察すると、縄文時代後期前葉段階の一時期を除く多くの遺物は、洪水や地滑り等の外的営力により調査区外北側の丘陵縁辺部から二次的に移動させられた可能性が高いと推測された。遺物が調査区内に入り込んだ時期は、第Ⅳ層形成段階の縄文時代と、第Ⅲ層の近世の大きく2時期となり、後者が主体を占める。また、第Ⅲ層形成段階において発生した地震によって、土層が変形した痕跡も複数確認できた。この地震については、堆積土層と出土遺物の対比から、文化7年(1810)の男鹿半島を震源とする可能性が高いと想定した。</p> <p>本調査の結果、遺跡北側の丘陵縁辺一帯には、縄文時代の石器製作跡、古代の製錬炉を含む製鉄関連施設、中世の寺院等宗教施設、中世から近世にかけての集落・屋敷地が展開していたはずである。</p>							

八郎潟町文化財調査報告書

白ヶ口V遺跡

高岳地区農地集積加速化基盤整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行：2021年11月30日

編集：八郎潟町教育委員会

印刷：株式会社八郎潟印刷

〈表紙題字〉

八郎潟町教育委員会 教育長 江 畠 廣